THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿年　第八号

十月一日

中央公論

發行

秋期大附錄號

豫告

我「中央公論」は來る十月一日を以て秋期大附錄號を發行せんとし、左の諸大家より寄稿の快諾を得たり

小說　夏目漱石氏
小說　島崎藤村氏
小說　國木田獨步氏
論文　金子筑水氏
論文　綱島梁川氏
論文　山路愛山氏

新思潮、新趣味の代表者たる六大家によつて成る本號の價値を喋々するは却て愚なるべきを信ず。故に吾人はいはず。偏へに江湖の判斷に一任す。

（但し綱島梁川氏の病勢近來甚だ勝れず。病勢少しく緩めば無論執筆すべきも今日の儘にて續けば或は約を履む能はざらんを恐るとの申込あり。吾人は讀者と共に氏の速かに快方に赴き、其愛に滿ち力に充ちたる敎に接せんことを望むや切也。）

中央公論第二十一年第八號目次

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



第二十一年
第八號
(二百九號)

日露再び戰ふべきか

(一)

露國の軍人動もすれば復讐を口にし、必らず敗戰の恥辱を雪がざる可らずとして、現在の平和畢竟休戰に過ぎずと稱す

日露果して再び戰ふべき乎、否、必らず戰はざる可らざる乎、是れ何人も胸底に懷く疑問にして、萬人の齊しく言はんとして未だ言はざる所なり。

ヂスレリイの伯林會議に臨むや、ゴルチャコフを睥睨して曰く、『我れには和戰兩樣の準備あり、他の擇び取るに任ず』と、吾人は明白にいふ、日本は最も平和を愛す、然るも戰ひまた辭する所に非ず、唯だ露國の擇ぶ所に任かすべしと。

(二)

吾人は泰平に謳歌して驕奢盛滿なる俗流を排す、彼等請ふ露國の實際を看よ

露國が立國以來未曾有の敗辱を招きたるや事實なり、其の巧妙なる、否寧ろ傍若無人なる强壓手段を以て獲たる旅順口青泥窪は、巨億の資を投じて武備を嚴にし商港を大成したるに拘らず、群議を排して鋭意布設したる東清鐵道線の一半と共に、擧げて日本の手に奪はれたりき、世界隨一の强大國を以てして蕞爾たる極東黑子の一小邦に敗られて玆に至る、露國の恥辱たるや實に大なりとすべし。

殊にカイゼルの宮廷内外に跋扈して、威福を恣にし、世界併呑を夢想して自から偉なりとせし彼の大公、縉

紳、軍人の徒に至ては、自から日本を挑發して戰ひを煽したる發頭人なるがために、耻辱を感ずること一層深く、憤恚怨恨に胸裏常に熱火を燃さゞる能はざるべし。乃ち一度日本に酬ひんとすること、啻だに彼等の面目のためのみにあらず、又實に彼等自衛のためなりとすべし、彼等は日露戰役の失敗以來、上はカイゼルの信用を減じ、下は露國々民の嘲笑侮辱を買ひ得て、轉た其の驕泰の威を損じたれば也、革命論勢ひを得て、現に國會の意氣天を衝かんとするが如き亦其の結果の一に外ならざれば也。

更に思へ、露國敗戰の後を承けて、革命論の潮流滔々として防ぐ可らず、竟に國會を開くべく餘儀無くせられ、而して國會を開くや、政府との衝突激烈を極めて内閣辭職するに至り、而して虐殺、而して陰謀、而して同盟罷工、而して軍隊謀叛、到る處頻々たるも、外未だ大に國威を殞すには至らざるは何ぞや、國内の混亂紛擾斯の如きより推すれば、少くも二十年三十年の間は、唯だ内治の整理、紛擾の鎮靜に忙殺せられてまた他邊を顧みる餘裕無く、甚だしきは則ち國の運命殆んど測る可らざるが如くなるも、是れ西歐諸國及び我が日本に在て然るのみ、露國は到底吾人の常識を以て測度し難し、國内の紛擾、民心の洶々彼の如きも、政府の武力は依然として强大なり、政府の實行力は依然として堅確なり、其の外交官は例の手段を以て八方に應酬し、其の武人は尚ほ不屈の精神を以て印度波斯の背面を窺ひ、蒙古西藏の後方を覗ふ、且つ西伯利亞に於ける鐵道其の他重大なる經營に孜々として全力を注ぐが如き、其の精力並びに實行力の旺盛なる、殆んど驚嘆すべきものあり、是れ露國々狀の特別なる所以にして、而して敗戰の餘、未だ曾て國威を殞さゞる所以ならずや。

斯の如き國を視て、敗餘未だ俄かに起つ能はざるものと做すは實に危險也、盲目也。

(三)

更らに露國の不思議(殆んど)なる實行力は、日露戰役の終期に於て實驗せられき。

滿洲の物資素より限りあり。且つ日本海封鎖せられて、浦鹽斯德の密輸船甚だ少く、軍資糧食の多分は唯だ一單線の西伯利亞鐵道に由るの外無しと信ぜられ、而して吉林哈爾賓を除くの外は、生口寡く物價多からず、且つ險隘崎嶇の山地にして到底大軍を滯留せしむるに適せざるも、露國はクロバトキン將軍に替ゆるにリネウイチ將軍を以てすると同時に、鋭意して歐露の精兵を繰出し、講和前に至つては齊々哈爾以東にある總兵數實に百萬に達したりき、唯だ鐵道大臣キルコフが非凡の精力を以て西伯利亞鐵道を改良したりと做す勿れ假令北滿洲の清人より徵發して、閭村雞犬なく、全山皆禿するに至らしめしとは雖も、百萬の大兵を玆に集中したるに至つては、實に驚嘆に餘あらずや。

當時世界の識者は、露軍の兵數より打算して、日本が講和したるの最も時機を得たるを感嘆したりき、思ふに公主嶺一帶の險地、大軍を用ゆるに適せずと雖も、之を興京方面、通化方面に分つて進出せしめば、戰線の更に大に擴大せらるゝに止まらず、戰爭の慘禍は更に一層激甚なりしなるべし、講和の其の時を得たりと稱せらるゝ洵に徒爾ならず。

然れども吾人の主として感ずるは露國の精力なり、嗚呼ニッチェヲ、ニッチェヲ、如何なる場合にも此の不可思議なる語言を繰返して其の爲さんとする所を爲す露人の精力は、決して漠焉として視る可らず。

（四）

此の幾んど不可思議なる精力を有する露國は果して日本と戰はざれば止まざる乎。

還遼の羞辱を受くるや、日本國民は一齊に臥薪嘗膽を叫べり、次て露國が旅順口靑泥窪を强取するや、日本國民の血は沸返れり、既にして東淸鐵道を布設し、滿洲を占領して韓國を壓迫するや、我が國民は竟に耐ゆると能はずして蹶起したり。

思ふに敗戰後の露國々民は、還遼後の我が國民の如く悲憤せざるべし、否悲憤すべき理由あらず、然れども世界の强大國を以てして蕞爾たる黒子の日本に敗られたる耻辱の甚だ大なるを思はゞ、露國々民と雖も餘

りに樂天なるを得ざるべし、少くも日露戰役を挑發し煽動したる大公、縉紳、軍人の一派は、憤恚怨恨に耐えずして必らず復讐を期するなるべし、一八七〇年役後の佛國々民が寤寐にもアルサス、ローレヌを叫びたるに視れば、露國復讐の念の燃ゆるが如くなる寧ろ當然とすべきのみ。

且つ有體にいへば、日露戰役の結果は滿洲（精確にいへば南滿洲）に於ける露國の勢力を掃蕩したるに止まれり、露國に致命傷を與へたるにあらざるは勿論、彼の西伯利亞の死命を制するにも至らざりき。看よ、北滿洲蒙古の鑛物、木材、麥豆、牛豚羊等は依然露人の需要を充たして其の西伯利亞經營を助くるに非ずや、浦鹽斯德は依然不可侵の軍港にして又一大商港たり、米豆の貨物と文化とを輸入するに於て依然として有効有力なるに非ずや、露國は南滿洲を失へるがため、假令清韓を窺窬する便宜を有せざるに至れりと雖も、西伯利亞經營には幾んど寸毫の阻害を受けず、從つて世界殊に東亞に雄たるの地位は依然たり、但だ海軍を失へるがため、而して其の再造の少期間に完整し能はざるがため、洋上に於て日本と爭ふを得ず、日本本土を侵擊し能はずと雖も、陸上に於ては尚ほ堂々たる大陸軍國たり、鯨にあらざるの熊也、清韓に於て再び日本と爭はんと欲せば則ち意のまゝなり。

茲に於て吾人日本國民は露國の必戰を期するを以て最も安全なりとせざる可らず、日露戰役の經驗によれば、露國は滿洲方面に百萬の軍隊を集中するの能力ありとす、故に我れ亦之に對し少くも百餘萬の兵を大陸に用ゆるの準備を維持せざる可らず、其の軍器、粮食動員の如き、總て滿洲に集中し得べき露軍よりも優良なることを期せざる可らず、換言すれば、何時にても露軍を擊破するの實力を支持せざるべからず、徒らに泰平を謳歌し、勝に狃れて驕泰自から居り、露國恐るゝに足らずと做すが如きは、實に國を誤まる所以也、切に戒めざる可らざる也。

（五）

露國に對しては、劍を磨して如何なる場合にも彼れ

に勝つの力を支持すると同時に、又誠意を推して彼れと善隣の誼を厚くせざる可らず、常に禮儀を正しくして彼れと應酬せざる可らず、平和は我が愛好する所にして、戰爭は我が甚だ欲せざる所なれば也、如何なる場合にも『ニッチエヲ』と稱して洒々落々たる露人の意氣は、寧ろ親むべくして憎むべき所以を看ざれば也、斯の如くして相交はると十年二十年三十年ならば、彼れ亦漸く敗戰の羞辱を忘れて、心より我れと親善するに至るべければ也。

一八七〇年役後の佛人は、必らず一び獨逸に酬ゆるとを期したるにあらずや、其の海陸軍は總て獨逸に復讐するを目的とし、其の國民は必らず獨逸に打勝つを目的として鋭意勤倹したるにあらずや、然かも獨逸に乘ずべき釁隙なく、世界の大勢また戰ひを許さず、荏苒三十餘年を經過して、今や讐敵の感幾んど一掃せられんとするにあらずや。

此の例は我が日本の最も範とすべきもの也、乃ち海陸軍備を整頓して、如何なる場合にも敵(たるもの)を壓するの實力を支持すると猶ほ獨逸の如くならざる可らず、一方には益々教育を普及せしめ、學術を應用して諸般の工業技術を改良し、鋭意して隆盛を計らざる可らず。英國との同盟を益々堅實ならしめ、米國との親交を彌よ敦厚ならしめ、更らに佛國と親み、獨逸と善くして我が味方を常に多數ならしめざる可らず、而して力めて露國と親善する方針を採らざる可らず。

第一軍備整頓、第二產業發達、第三外交發展、是れ實に我が日本の三大要務たるべきもの也、一切の政治、教育、奬勵、指導總て此の三大方針に由るを要す

斯の如くならば、露國戰はんと欲するも戰ふの機會を得ざるべし、竟に戰意を消滅するに至るべし、何ぞ況んや憤恚怨恨するもの唯だ一部の貴族社會に過ぎずして、露國々民の大多數は却つて平和を愛するものをや。

學生流弊の一二

近時學生流弊の著るしきもの縷指に遑あらず、暫らく其の一二を擧げむ

其の一は、人生不可解と稱して煩悶するもの多きことなり、彼等の中、甚だしきは身を殺すに至るあり、彼等果して人生を研究したりや。能く哲學の書を涉獵し、能く倫理學を習得して然る後徐かに研究する所ありしや否や、僅かに一冊二冊の哲理書を讀み、淺薄なる思索を以て早くも人生解す可らずとして煩悶し懊惱す、愚といふべし、世の新聞紙また之を愚とせず、却つて幽遠の哲理を研究するもの丶如く之を誇張し縷説し、益々其の同類を簇出せしむ。

彼等は人として佛神に對し人類に對して貢献の義務あるをすら知らず、父母妻子に對して扶養の義務あるをすら知らず、放縱無節度に生活して虛弱なる體質と偏固なる感情とを有するもの也。

其の二は淡泊の氣風なくして總てを詐り氣取ることなり。青年男女僅かに獸慾を逹すること能はず、或は獸慾の結果大なる羞辱を蒙むらんとしてその耐忍する能はず、虛弱なる感情に驅られて自から死せんとするや、正直に其の事實を告白せず、却つて人生不可解の故に世を棄つと稱し、或は宗教の信念枉く可らさるが故に自から絕つと唱へ、諸種の理由を揑造して死華を咲かしめんとす、昔戲作者一九の死するや、腹中に花火を藏して火葬の際之を爆發せしめて以て會葬者を驚かしたりといふ、死して尙ほ人を弄ぶの意氣思ふべし今の青年男女等乃ち死して尙ほ詐はり氣取る、人間の卑むべき豈多く之に踰ゆるものあらんや。

其の三は青年學生に花柳病多きことなり、吾人は七月廿日の萬朝報の左の記事を看て實に意外に感ぜざる能はず

去九日より第一高等學校内に行はれし大學豫科選拔試驗に於て學術試驗了つて後體格檢査を行ひ同時に尿を檢査し或は局部の檢査をもなしたり何の爲なるかと云ふに入學志望者の中に花柳病患者の有無を檢せんとしてなり是誠に學生

の品性を侮辱し其名譽を蔑にしたるものなりと學生たるものは大に憤慨せざる可らざる處なれども試驗の結果は此試驗の甚だ有要なりし事を證明したるに至つては驚く可し即驚く可き大多數の花柳病患者が此少壯有爲の青年學生中に包含されありし事なり更に驚く可きは尿の試驗ありと聞き學術試驗を了りて多少有望なる者迄既得の權利を放棄して出校せざりし者の尠らざりし事なり是等の病毒が女同様に劇しかりしを推知すれば殆どお話にならずと云ふの外なし試驗の成績を聞くに尿を以て花柳病なりと認られたる者約半數、更に陰莖の檢査をなし下疳、硬下疳梅毒等に罹れる者を發見し其數總受驗者の二分の一を超ゆるに至りたりと、此事に關し該試驗委員の一人たりし醫學士大野豐太氏の談話を聞くを得たれば左に記す『花柳病と文明とは同義異語ならずやと疑がはる何となれど文明の度の進むと同時に同患者の數は殖え行く事歷史と統計の示す所なり先頃伯林大學のラツセル教授が大學生の尿を檢査し百人中八十人の淋病患者ありたりと、今日日本の大學、高等學校、高等師範學校又は軍隊等に就て尿の檢査をなすに於ては恐らく是以上の比例を發見す可し、偶然高等學校入學試驗に半數以上の比例を見たるは驚くに足らずと雖僅に中學を卒りしのみの廿歲前後(多くは以下)の青年に花柳病患者の大多數を見るは誠に一驚を喫するに堪へたり、今日我國中學生の風紀紊亂は當局者も大に認めて居らるが如し然れども一通の訓令や說諭位にては彼等の惡風を矯す事能はざるべく彼等の成効の門府たる高等學校の入學試驗に花柳病患者は入學を許さずと云ふ規則を設けしならば事實に於て青年の花柳病は出來なくなるべく少なくとも豫防を奬勵し蔓延を防遏する事を得べし人或は花柳界に遊ぶを青年にのみ許さぬは人情に於て酷なるべしと說く者あれど嘗て議會にて青年の禁煙禁酒を唱道し既に煙草は法律を發布されたり然るに日常の生活には性慾をこらゆるよりも煙草を飲み酒を飲むを禁ぜらるゝが實際には苦きものなり之を禁じてある以上は性慾に對して制限を加ふるは樂なり或る論者は花柳界に於る肉交を防遏すれば手淫、鷄姦を逞ふるものあり然れども手淫、鷄姦の害は寧ろ花柳病より少なかるべく之までも禁ずる事は出來ず又之は個人の勝手なれば自から顧みざるべからず而して花柳病豫防と云ふ點に於て入學試驗に於て之を取締れば學生風紀上、教育上更に大にしては國家の上に最大の便利を與ふべし、又更に眼を轉じて女學生の樣子を見るに甚しき腐敗に陷れり、青年學生と女學生との間の關係は甚はだ密接の關係にして父母兄弟の知らぬ事實隠蔽され居れり、青年學生の半數が花柳病ありとすればそれが女學生と

關係する故女學生も病毒に感染し居るに相違なく之等の女學生が將來賢母良妻たるの資格を得べきや如何現に信用ある某々女學校の生徒が密かに尿道病、黴毒等を憂ひて診を乞に來るもの頻繁たるにあらずや中には自ら恥ぢて醫師に來らぬも多からん而して此花柳病を持し女學生は他の病毒なき青年に再び移し、移されし青年は又他の少年處女に傳染、傳播せしむ斯の如く花柳病の病毒は日一日否一時間毎に散布されつゝある事慨歎せざるを得ざる世の中になりたり今日の信用ある女學校の女學生に於て此事あるを見たる以上他の怪しき風聞ある女學校に於て彼等の花柳病に對する比例は案外なるを知るべし子女を東京に留學せしめし父兄は極て此點に留意せざるべからず其花柳病の一個人に及ぼす害等は今こゝに述る必要なけれどやがては國家の消長に關する者てあれば此際當局者は斷然たる處置をなし花柳病の防遏に盡力されんことを望む但し入學試驗に花柳病を不合格とするも突然之を發布せば氣の毒なるべけば今後五年位の後ちに實施する樣にしたらば實効多かる可し

此の記事中には恐らくは多少の錯誤あるべし。何者第一高等學校入學學術試驗の行はれたるは七月九日より十二日までにして。其體格檢査は七月七日を以て行はれたれば也。但し學術試驗終了後即ち十三日を以て體格の再檢査を行はれたる者ありしとは事實也、而して受驗生中多數の花柳病者ありしとは亦蔽ふ可からず男女學生の夙くより斯の如き破廉不耻貞操なる病毒に罹る事は、實に浩歎するに餘りあり。是れ啻だ國民精神上の大缺陷なるのみならず、其の體質を虚弱、疾患的ならしむるに於て、實に容易ならざる患害を貽すものなれば也。而して彼の薄志弱行にして人生解す可らずと稱し、或は詐はりて氣取りて死するもの、亦實に滔々たる此の男女學生中より出づ、經世に心あるもの、奚んぞ等閑に視る可んや、嗚呼奚んぞ大に匡救の途を立てざるを得んや

男女學生交際論

博士　リギヨル

人あり、若し眞面目に「火は熱い、だから燒けぬやうにしたいなら、餘り近く寄らぬが可い」と言ふ者が

有つたら其れは本統には相違ないが、餘り本統過ぎて聞く者皆笑を禁じ得ぬてあらう、余の今男女交際に就て言はうとする所も殆ど之と同じ性質のものてある、別に珍らしい意見でもなければ、新らしい議論でもない、蓋し地上に男女あつてより以來、就中靑春妙齡の男女あつてより以來、其の交際に就ては如何程まで用心すべきか又如何程の度合にまで止まるべきかと云ふ事は人皆能く之を心得て居るのである、男女が餘り近く接觸するときは、忽ち火災が起る、其の火災の裡に男女共に最も珍とすべきものを燒失し去らるゝを常とする、だから、燒かれぬやうにしたいなら、成る可く、餘り近く接觸せぬやうにするが可い、少くとも用心に用心を加へての上の接近すべきてある、嚴密に言へば、余の意見は是れぎりである、左に開陳する所の如きは、其の大體に於ては言はぬも毫も損失はない、が然し此は餘り普通の常識と日常の經驗とに偏した議論のやうに思はれるから、未だ之て足れりとはせられぬてあらう、早く言へば、何んとなく物足りぬ議論のやうに思はれるてあらう、就中今日のやうな時勢には、學者らしい着物を着せぬ言論は、理屈てゝ通らぬ傾きがあるから時勢止むを得ぬとして今少し辯を試みて見やう。

が、實を言へば、是は隨分六箇敷い議論てある、何ぜなれば此の問題に就ては世の學者先生方が最早や殆ど言はれるだけ言つてあるから、其間に立て嶄新な議論を立て、珍らしい意見を述べることは出來ぬ程てある、一番捷徑は今迄先進の言つた所を簡單に約言することてなからうか。

然し兎に角男女交際と云ふものは絕體的に禁ずべきものてあるかと云ふに、決して然うてはない、余も亦此如な野暮な議論を吐かぬ、男女は自然の約束により同棲、否、同生すべく作られたものてあるから、早晩結合、否、集合すべきものてあるが、男女其者の利福の爲及び社會の公益の爲に、其の交際が如何樣な條件の下に行はるべきかと云ふことは、大切な問題てある。

先哲の語に「女子は風俗を作るものなり」、とある、その言や眞なりてある、味へば味ふ程味の出る言てあ

る、即ち之を解説すれば、婦人が貞淑であれば、風俗も善良、婦人が軽佻浮薄で腐敗して居れば、風俗も腐敗して了うと云ふ意味である、處で風俗と云ふものは一國富强隆昌の花である、それ故社會の公益は女子をして德風の淵源となる樣に、出來得るだけ其の善良貞淑であることを要求し、其の風俗に對する影響を善き方面に向はせることを希求するのである、是から觀れば、女子は單に閨門深く鎖して幽房の裡に暮すべきではなく、時には屋外に出て、交際場裡に立つて社會に貢献すべきことは瞭である。

聞く所に據れば近頃日本人中にも有爲有識の先生方が、事業の爲か愉快の爲かは別問題であるが、兎に角男女交際の門戸を開かん爲、請ふ隗より始めよの主義で、各々夫人を携へて集會し始めたと云ふことである此は洵に美事壯擧と言つて差支ない、此樣な性質の集會に於て初めて婦人が風俗を作り、德風の淵源となるのである、夫人の在ます所には、良人たる者も決して心に疚しい所が生ぜぬのである、君子人の體面益す備はつて、其の家庭に於ても風波の爭ひの起る憂はなく、其の家政も亦紊亂を來たす恐れがない、然るに下の如くいふ人がある、此種の夫人の中へは教育の少し後れた者、學問の點に於て少しく缺けた者、及び年嵩の者が出ては、新時代の教育を受けた妙齡の夫人方の手前少しく耻しいやうな氣がすると。此樣なことは娘心の心配である、此の年輩になつては、見頃といふでないことは誰も承知して居る、間違つてはならぬ、多年夫に伴れ添うて忠誠貞操を盡したので、額上に年波を寄せ、頭上白髮を雜へたとて、決して耻ではない、寧ろ一種の後光のやうなものである。

ケレドモ右は男女學生交際ではなく、男女學者交際とても云ふべき性質のものであるから、特に靑年男女學生に就て語るところがなければならぬが、靑年學生をして此種の男女學者先生方の交際を見せたなら、果して如何樣の利益があるかそれから先づ一言しなければならぬ、蓋し靑年學生で判斷が曲つて居らず、優美の性に缺けて居らぬならば、其が品性を修養する上に

其嗜好を美妙にする上に、又其が高崇なる能力の發展妙用を期する上に利益する所は決して鮮少てはない、何ぜなれば之によつて自他を尊重するの美風を學び、士君子の禮を知り、武士のなくなつた時代に武士の道を覺へ、禮節を貴び、信用を重んじて、最早や紳士の體面を失墜せざらんことを心に矢ひつゝ、徐ろに其が榮譽ある將來の地盤を築くことが出來るからである、品性を高貴ならしめむが爲に、否、往々天才を發揮せしめむが爲に青年學生をして此種の男女學者先生方の交際に加はらしむるはこれ即ち優るものない良好な學校を與ふるのであると言ふも誣言てはない、歐洲の歷史を繙いて見るに、戰場の勇擧、文壇の傑作、詩界の雄篇等が其の因て來る所を遡つて見れば、往々皆一ミユーズ、一名媛が後ろに在つて之を奨勵し、之を啓發せるに原因するのを見るのである。但し上述の交際の場合にも妙齡な女子は多く母と共に出席するを要す。る、最早や子供てなく、學課を卒へて一人前となり、漸く社會に出づる時が來りて實地に交際術を學ぶに至るまでは、其の通りてなければならぬ。

さて眼を轉じて純然たる男女學生の交際に就て卑見を述べて見よう、先づ此種の男女學生が遠く故鄕の天を去り、父母の膝下を離れ、都門何等の監督者のない處に自由に交際し得るとすれば、其の敎育、其の進步及び其の將來の爲に果して如何樣な益があるか、之を先づ講究せなければならぬ、之に就いては生理學にも質し、經驗の敎をも仰いて見なければならぬ、先哲はかくいつて居る『人は自身の心界を司配するに當つて、二種の能力に面するのである、一種の能力に對しては專制權を有し、之が運用行使は自由自在てある、けれども此種の能力は其數が多くはない、他の一種の能力に對しては一種の政略權を有するに過ぎぬ、故に意の如く其の能力を運用することが出來ぬ、その覇權を握らうと思へば、勢ひ權謀術策を用ひねばならぬ、而も尙且之を逸することがある、想像、感情、情慾等凡て哲學上感性（センシビリテ）と稱する所のものは皆此類てある云々』これは人性の眞意を得たるものと言ふべきてある。

此言に徴するときは多くの人々の奇怪に思ひ、不思議に思ひ、難解のやうに思ふ問題は自ら釋けて了ふ、一青年、一處女、而も能く事理を解して居る者が、今迄極めて潔直貞淑であつたに係らず、偶々路上相見て忽ち其の胸中に情火を燃し、意馬心猿羈束するに道がないと云ふに至るのは即ち是れてある、而も是れは未だ逸走の第一着歩といふのみである、若も速に之が防禦の策を取らなければ、其結果は果して如何に成り行くてあらうか新聞を見れば直に分る、彼等自身は悲歎する、父母は心配と耻とて痩せ衰へて了ふ、果然一種の滅亡である。

論者或は曰ふてあらう、然し一男一女の行末、是非之を考へねばならぬ、是非片付ける準備をしなければならぬ、據ないてはないかと、如何にも御説御尤てある、男子一人前となり、精勵に、勤勉に、素行修まり、心性正しき者は是非天の之に與ふる淨配に想到しなければならぬ、女子も亦己をして幸福ならしむべき良人を選定するに務むべきてある、乍然青春齡妙の女子たる者よ、間違てはならぬ、路上到る處目を振廻はしたとて其の希望する理想の良人なる者に見當る筈のものではない、女子は花の如きものである、幽陰に馥香を送るべき性質のものである、最も美にして最も人の愛着珍重すべき所の者は其德操の、靜に中に隱るゝ者である、路上に亂發して、衆覽に供せられ、塵埃に委せらるゝものゝ如きは、毫も價値のない者で、士人の一顧にも値せぬ、士人にして室を作らんとするときには、決して此樣な花を手折りて飾りとはせぬ、女子の方面から見ても之と同じく、選擇の自由のない限りは若くは他に生活するの道のない限りは、路上無職のぶらつき者を良人に選ぶ者はなからう、此樣な者には迚も信賴は出來ぬてあらう。

のみならず、青年男女相識らずして結婚するのを惡く言ふのは玆に年ありてある、此の弊害を除去すべきものなるや否やと云ふに、誰も除去してはならぬと云ふ者はない、結婚するには須らく先づ相識り相愛せねばならぬ、然し乍ら幸福な家庭を作り、幸福な將來を

準備する愛と云ふものは決してあばれた愛ではない、先づ相互の値打に基き、相互の尊敬に律せらるゝ愛てある、中情相接近せんとすると同時に、何物か之を適當の距離に隔離せしむるもので、相互に眷戀じつゝも、尙且會見を恐るゝのである、其の心配する所は如何にして相互の幸福となるやうに準備すべきかと云ふに在る、又此の希望は相互の進歩を妨げないのみか、寧ろ相勵み相競ふ基となるのである。

路上に相見るとか、緣日に相會するとか、若くは花見の時互に馬鹿遊をするといふ樣なのは、以て眞に相識れりとは言はれぬ、相識るに至るまでには尙一層近く見、長く互に調べ合はなければならぬが、どうもその時分の年頃には外貌外觀にだまされ易い、年少氣鋭、意氣豪宕なのを見ては、直に偉い武人の如くに思ひ、背丈すらりと風情好きを見ては忽ち紳士の如くに思ふといふ有樣、稚氣寧ろ憐む可きである、男子も又女子の少しく美にして艶なる者が袴をはき、靴を穿ち、運步を活潑に移すを見ては、早や旣に我が理想の式部の如くに思ふ者がある。

男女學生は諸共に、人を美にし、其美が相貌にも浮かぶ所のものは心性であることを忘れて居る、將來のことを考へるならば、美なる心性の理想を腦裡に畫いて之を實現せむと務むるのが大切である、其外は別に心配するには及ばぬ、美なる者善なる者には必ず愛する者が伴つてある、大道を叫び廻つて品物を賣らうとする商人の如きは、店に置ては賣れぬ品であることを廣告するやうなものである、今日此頃では此種の廣告をなす人間が隨分あるやうに見受けられるではあるまいか。

世には又隨分矯激の議論を吐く者がある、人は自由である、自由に其の本能を發展すべきである、酒は飲む可きである、色は買ふ可きである、お轉婆可なり、自由結婚至極よろしい云々。貞淑優雅な青年に對して斯樣な議論は餘りに侮辱的であるから、余は今玆に之を反駁せぬ、否反駁する程の値打のあるものとも思はぬ

要するに青春妙齡の男女は、栩々として飛び、翩々

とした舞ふ蛺蝶の如きものである、輕妙と云はゞ云へ、實は輕佻浮薄なものである、光の美しく見ゆるところから、之をよろこび、之を樂み、之に引かれ、之に近づき、歡び遊びながら其羽を失ひ、往々は其の生命をも失て了ふことがある、無經驗なる青年男女よ、卿等は未だ火の熱く、火の物を燒くことを知らぬ者である、是非之を知らしむる者がなければならぬ。

余が男女學生交際に就てのこの卑見はザット此樣なものである、サゾ頑固な意見だと言ふ者があるでもあらうが、眞理は一番頑固なものと極つて居る!!!

滿洲問題の解決

田中穗積

滿洲の門戸開放は帝國政府が曩きに列强に對し聲明せる所にして、列國と共に產業上均等の機會を得んとは帝國年來の主張なり、故に舊臘日淸間に於て滿洲協約の批准公布せられたる以後、依然として該問題を懸案淹久の狀態に置くが如きは、獨り帝國產業の對外發展の爲めに忍ふ能はざる所なるのみならず、又外交上帝國政府の態度に對し列國政府をして、無用の疑惧を惹起せしむる惧なきを得ず、然れども百數十万の大兵を送りて戰線數百里の長きに亘り二ヶ年の久しき駐屯せる、滿洲全軍の撤退が容易の業にあらざるは、苟くも軍隊の行動に多少の智識を有するものにあつては、毫も怪むに足らざる所にして、講和談判の成立し自餘の交渉が略ぼ完了せる以後、僅かに數閱月にして全軍を撤退し滿洲の野を淸掃せるに至ては、寧ろ嘆賞の値ひある機敏の行動と謂ふべく、撤兵一日を緩ふすれば帝國の戰費に巨万の增加を來す明かなるが故に、既に滿洲還附を聲明せる帝國政府が、又何を苦んで撤兵開放を故らに遷延するの愚を爲さんや、故に曩きに滿洲開放の遷延が往々外人の不平を買ひたりと謂ふが如きは果して此を事實なりとせば甚だ事理に通せさる誤解にして、難きを責むるものに外ならざるが故に、列國政府たるもの此の如き不平に對し一顧を拂ふべき理由な

く邦人動もすれば外人の片言隻語に耳を貸し徒らに杞憂するが如きは、深く此を愼まざるべからず、矧んや帝國政府の心事の公明にして一點の私心なきは、爭ふ可からざる事實の確證する所にして、四月上旬既に淸國政府に促すに滿洲一部の開放を以てし、淸國政府は寧ろ意外の感に打たれたるもの丶如しと雖も、能く此を說破して安東縣、大東溝及奉天の開放に同意せしめたると同時に、機を待てる西園寺首相は、議會の閉會と共に蒼皇滿洲視察の途に上り、歸來直ちに廟議を一決して、滿洲鐵道經營方針の公布となり、軍政署の撤退、大連港の開放は着々として斷行せられんとするに至れり、

即滿洲鐵道の經營方針として六月八日勅令第百四十二號を以て公布せるものを見るに、我戰利鐵道及此れに附屬せる採炭事業を擧げて、日淸兩國政府及人民の合同會社に一任し、會社の總裁及副總裁は政府此を任命し、別に監理官を設け業務の監視に當らしむると謂ふにあるが故に、能く日淸協約の精神を遵奉せる者にして、滿洲に於て帝國政府自から鐵道事業を經營し、或は採炭事業に從事し、爲めに淸國の主權を汚損する嫌を避け、此を會社の經營に委ね、而かも淸國官民の共同參加を促したるは、誠に帝國恢々の襟度を表明せるものと謂はざるを得ず、偏見者流或は其經營方針が露國の東淸鐵道と全く同一轍に出でたるを觀て、以て微溫的軟弱政策と做し或は虛僞的政策を弄するものと做し、共同經營の假面を被り其實權を我れに收むるか如き手段に出づるよりは、寧ろ斷然帝國の人民をして此を經營せしむるか、然らざれば內國鐵道と等しく國有主義を滿洲鐵道に適用するの優れるに如かずと做すものあり、然れども此を韓國に於ける京釜鐵道既往の事實に顧み、私設會社の力に依り滿洲鐵道の完備の容易に企及し得べからざるは、火を睹るよりも明かにして、翻て此れに國有主義を適用するに於ては、日淸協約第二條に於て「日本國政府は淸露兩國間に締結せられたる租借地並に鐵道敷設に關する原條約に照し、努めて導行す可きことを承諾す」と規定せる條項と衝突す

るのみならず、帝國の位地に顧み苟くも淸國の主權を汚損するが如き手段は深く此を愼まざるべからず、然らば即滿洲鐵道の經營を日淸官民合同の會社に委ねんとするは、最も機宜に適したる手段にして、滿洲鐵道を放棄せば即止む、苟くも然らず此を修築改良して以て滿洲富源の開拓に便し、列國に開放して均等の機會を得んと欲せば、此の以外に又採るべき適當の手段なく、淸國の官民が理正さに帝國の方針を歡迎すべきは素より論なく、環視列國と雖も、亦淸國の領土内に於ける帝國の戰利鐵道を處分するに當り、淸國以外の國人の株主たるを禁したるが爲めに、苟くも其感情を害し或は異論を唱ふべき理由なく、必ずや帝國政府の公明なる態度を諒とせずんばあらず、

而して軍政署の撤退が着々として斷行せられんとするは、帝國の對滿洲政策が確立し、武斷主義を排し機會均等主義の勝利に歸せるとを明かにせる者にして、滿洲問題が尙懸案瀰久の狀態にありたる際、予輩が心私かに憂惧を禁せざりしは誠に此問題にありとす、蓋滿洲に於ける秩序の維持が淸國政府の力に依て容易に企及し得べからざるは、過去の事實が此を證明するのみならず、露國圖南の野心が這般の戰敗によつて挫折するものにあらざる事を確信する論者は、頻りに軍政署撤退の不可を論唱して曰はく、門戶開放は帝國政府が曩に列國に對し聲明せる所にして、日露交戰は又實に此主張を貫徹するが爲に敢行せられたるものなりと雖も門戶開放は畢竟機會均等主義を實行する手段にして、機會均等主義の實行は滿洲に於ける秩序の維持と兩々相俟て離るべからざる關係を有し、秩序にして維持する能はず、生命財產の安全が常に脅かさるゝ如くんば、機會均等若くは門戶開放は全然有名無實に終はらざるを得ず、故に滿洲に於ける秩序の維持を無能なる淸國政府に委ぬるの危險を冒さんよりは、寧ろ此を帝國軍政の下に置くは、必ずや機會均等主義を主張する列國の異論なき所にして、苟くも滿洲に關し多少の智識を有し、馬賊橫行の如何に恐るべきかを知るものにあつては、軍政署撤退の輕擧に出づるを容認すると能はず

況んや露國は這般の戰敗の爲めに決して滿洲南下の宿望を放擲するものにあらず、他年一日會稽の恥辱を雪くの覺悟が平和條約訂結當時に於て、早く既に其骨に刻まれたるは、彼の從軍徽章の表面に刻するに、「神よ將來我等を擧けよ」と云へる悲壯の文字を以てし、而かも此の文字が露帝の宸慮に出でたりと謂ふに徵するも明かにして、滿洲の荒野に曝せる血痕未だ乾くに遑あらず、ノヴウレミヤの如きは頻りに復讐反感の論議を弄し、近くレンネカンプ將軍が露都に於ける盛宴の席上演説は、誤報として打消されたりと雖も、露國が極東に於て復讐を爲すは決して遠きにあらず、露國は其失ひたる威望と領土とを回復するが爲めに万般の準備を爲さゞるべからずと謂へる、敵愾の氣象は國内に横溢し、少くとも武斷派及軍人の一部に臥薪嘗膽の熱情燃ゆるが如きものあるは、爭ふべからざるが故に、將來内國の秩序恢復し國力稍充實するに至らば、再び干戈相見るの不幸に逢遇するの覺悟なきを得ず、加之露國の滿洲南下は決して一時の外交的政略にあらず、實に彼得大帝以來の大方針により海に面して不凍の港灣を得んとするにあるが故に、千辛万苦の末初めて握得せる大連旅順に對し、一敗の爲めに數百年來の大方針を一擲すると能はざるは、火を覩るよりも明かにして、此の瞭然たる事理を藐視し、露國又南下の志なしと輕斷し枕を高ふして偷安姑息に陷り、急遽軍政を撤去するが如くんば、設令滿洲に於て利權の發展著しきものなるも、時到り機熟し疾風一陣倏忽にして此を掃蕩するは、免れざる勢なりと謂ふべく、事玆に至れば二十億の國帑を消靡し同胞十萬の血を以て買ひ得たる這般戰勝の効果は、全然水泡に歸せざるを得ず、即ち此の如き危險を冒すも尙ほ且つ軍政の撤去は、此を一日も緩するを能はずと做す乎、抑も亦軍政を撤去するにあらざれば産業上に於て機會均等主義を實行すると能はざるかと謂ふにあり、

予輩は軍政署の撤退を不可とする如上の議論に對し、決して一部の眞理の存するとを否認するものにあらず不凍港の握得が數百年來露國の外交を支配せる大方針

にして、此の宿志が將さに達せんとするに垂として、意外の障礙に逢遇し、夢の如き敗衂の爲に宿志の放擲を餘儀なくせられたる痛恨が如何に深刻にして、復讐の熱情が如何に強烈なるかは此を推知するに難しとせず、然れども若し單に此れあるが爲めに露國の南下は必然の勢なりとせは、千八百七十年其國都を敵軍の蹂躙に委するの屈辱を被り、血を吐き眦を決して復讐を誓ひたる佛人は何故に三十余年の久しきに亘り、未だ嘗て一矢をを獨逸に酬ひざる乎、思ふに利害の衝突にして遂に避くべからざるに至らば、砲火相見るの慘劇は遂に濟ふべからずと雖も、昂進せる感情は時日の經過と共に自から冷却すべきは、獨佛の關係に徵するも明かにして、予は日露の關係必す此れに類するものあるを信せんと欲す、加之武斷派一味の個人的功名心に驅られたる、猪突的外交政略の失敗が意外にも無謀の交戰を挑發し、百万の大兵を極東に派遣し、誅求苛斂國力を傾倒して頽勢の挽回に日も亦足らざるの際、革命の氣氛は漸く國內に横溢し來り、敗衂の悲報到る每に其勢力は愈強大となり、初期にあつては一壓の下に此を剿滅し得たるものゝ如しと雖も、武斷政府の鼎の輕重が旣に窺知せられたる曉に及んでは、又此を奈何ともすること能はず、同盟罷工より一轉して革命運動となり、再轉して議院政治の運動となれる今日にありては、其根底已に瀰蔓し其枝幹旣に繁茂し、官僚政治の力を以て到底此を芟刈すること能はず、將來豫想外の事變に逢遇せざる限り議院政治の成立は蓋し避く可らざる勢と認めざるを得ず、即ち如上の推斷にして大過なしとせば、官僚政治の亡びて議院政治の確立せる曉露國施政の方針は果して如何の變態を呈すべき乎、政府の行動が輿論の勢力に依て支配せらるゝに至れば、國民の利益を個人的功名心の犠牲とせる侵略政策の破れて政府の精力は專ら內政の改善に傾注せらるゝは必然の勢にして、少くとも外交問題よりは內政問題を先にするとの順序たるは又疑を容るゝの餘地なく、殊に歷代の君主宰相常に其精力を外政に用ひ、內政の荒廢に對して一顧を拂はざりし露國の國情にありては、近き將

來に於て到底其餘力を外政に注ぐの遑なし、然らば即將來露國の南下に備ふるが爲め、依然として滿洲を帝國軍政の下に置き、帝國が天下に率先して提唱したる門戶開放を拒み、條約を蹂躪して淸國の主權を傷くるが如き輕擧は絕對的に此を否認すべきにあらざや、唯夫れ滿洲に於ける秩序の維持が無能なる淸國政府の力に依賴して晏如たると能はず、旣に秩序の維持にして難ければ設令門戶を開放して機會均等主義の實行に努むるも、滿洲の富源を開拓し商權の發展を期する事甚だ至難なるは誠に論者の說の如し、然れども單に此の憾あるが爲めに、帝國の屢々聲明せる言質に悖り、條約を蹂躪し、淸國の主權を脅かさんとするが如きは、事態の輕重前後を誤れるものにして、秩序の紊亂の爲めに商權の發展を阻礙せらるゝ苦痛は、帝國獨り此を被るにあらずして、列國又同一の苦痛を被らざるを得ず、故に淸國政府の無能なるが爲めに滿洲の秩序が常に紊亂し、門戶開放機會均等が有名無實に終はるとありとせば、列國政府たるもの決して此を忍ぶ能はず、必ず機宜の手段を擇ぶに於て躊躇するものにあらず、即此際に及び帝國進んで秩序の維持に適切なる手段を講ずるも、予は其時期の決して遲からざるを信ず、加之滿洲現時の經濟狀態にありては、都市以外の地方に向つて深く我商權の擴張を計るは事甚だ至難なるが故に、邦人の勢力は暫らく此を貨物の聚散地たる樞要の都市に限らざるべからず、而して此等樞要の都市は幸に我戰利鐵道を以て貫通し、戰利鐵道を保護するが爲めに守備隊の駐屯は條約明かに此を規定し、約二萬の軍隊は樞要の地點に分屯して、鐵道の保護に當ると同時に又其地方の安寧を保全すべきが故に、我商權の發展に甚しき阻礙を被らざるや明かにして、產業的勢力の及ばざる村落に迄て軍政を布き、長へに秩序維持の大責任を帝國自から負擔するが如きは、空名を喜ぶ無謀の輕擧たる論を俟たずして知るべきなり、此れ即予輩が武斷主義を排し、機會均等主義の勝利に歸せるを喜ぶ所以にして、明かに滿洲問題の解決上一大英斷と認むべきにあらずや

最後に政府が大連港の開放に當り、此を自由港と爲すに決したるは、又疑もなく一大成功にして、租借地内に於て需要せらるゝ貨物の數量には自から限りあるが故に、關稅免除の利益は必しも多大ならずと雖も、旣に貨物の數量にして多大ならずとせば、煩瑣の手數を冒して此れに關稅を賦課することの徒勞たる明かなると同時に租借地の繁榮を企圖するが爲めに此を自由港と爲すは、最も適切なる手段と謂はざるを得ず即ち大連を開放して自由港となし、移住民を誘致し、貨物の聚散盛なるに至れば、滿洲の富源が次第に開發せられ、商權の內地深く發展すべきは必然の勢にして、滿洲の開發如何は懸て其門戶たる大連の盛衰如何にありとす、矧んや東淸鐵道の一部を失ひたる露國は、今や再び浦鹽の經營に焦慮し、有ゆる手段を盡して其繁榮を挽回するに努め、近時の情報に依れば、或は鐵道賃金を低減し、或は急行直通列車を運轉し、或は浦鹽及長崎間に航路の聯絡を計らんとするが如き、劃策經營着々其緖に就かんとするものあるが故に、大連の經營は一日も閑却すること能はざる急務にして、此れと對峙するが爲めに當局者能く其處置を誤らずんば、大連は浦鹽に比し地理上遙かに優等なる位地にあり、僅かに一衣帶水を隔て、帝國韓國及南淸の諸港灣に相對し、冬期海水の鎖す所となる浦鹽とは交通の便日を同うして談るべからざるものあるが故に、浦鹽は到底大連の敵にあらず、歐亞の直通線は早晚長春より我が戰利鐵道を經由して大連に聯結すべきは自然の大勢にして、露國人心の激動尙ほ未だ鎭靜せざる今日にありて、此の如きは容易に望むこと能はずと雖も、大連に聯結すると否とは要するに西比利亞鐵道の問題に屬するが故に、露國政府の方針にして西比利亞鐵道を軍事專用に供するにありとせば即ち止む、苟くも然らず平和の通路として歐亞の聯絡に供すると同時に西比利亞の富源を開拓するにありとせば、其門戶を大連に求むるは必要巳むを得ざる所にして、單に他國の租借地なりと謂ふ理由により大連を棄てゝ浦鹽に聯結するが如きは人力の如何ともすること能はざる地理的關係の容さゞる所なり

とす、

滿洲經營の三大業として決定せられたる、鐵道の官民經營、軍政署の撤退、大連港の自由開放に對し、嚴正なる見地より批評し來れば凡そ此の如く、予は現內閣の擇びたる方針に對し滿幅の贊意を表するに吝ならず說を爲すもの或は政府の方針を以て推讓に過ぐるものと做し、甚しきは偷安姑息眼前に禍機の伏在を知らずとすら批評するものありと雖も、予は此等の論者の爲めに普佛戰後に於けるビスマークの外交方針を告ぐるに止めんと欲す、富强宇內に誇れる佛蘭西を一戰の下に擊破したる普國が列國猜疑の渦中に陷るに當り、ビスマークは其外交方針を陳べ、「獨逸今日の急務は列國の猜疑怨恨を一掃するにあり、即ち此れが爲めには飽まて公正平和の手段を擇ぶと必要にして、獨逸の强大は歐洲小國の爲めに、佛露英等の强大なるよりは寧ろ安全無害なるを知らしめざる可らず、故に公正平和快濶推讓は獨逸現下の大方針なり」と做せるに至ては其用意の周到にして識見の高遠なる、予は輕躁なる論者の爲めに必ず頂門の一針たるを確言して疑はざるなり。

個人主義と家族主義の調和

安部磯雄

個人主義と家族主義とは何れを主とし何れを客とすべきかと言へば勿論個人主義が主であるに相違ない。世には此二主義を以て恰も楕圓形に於ける二中心の如くに思ひ、其間に輕重の差はないと唱ふる人もあるようだが余は其說に服することが出來ぬ。家族といひ國家といひ何れも個人の生存には必要の條件ではあるが、これは吾人が此世に生れ來つて敎育を受くる間の事て、既に一人前の人間となれば家族も國家も吾人生存の必要條件といふことは出來ない。家族を有せずして此社會に生存して居る人は隨分澤山ある。獨身生活が果して幸福のものであるか、或は否らざるか、是は別問題であるが、家族の繫累を有せぬことを却つて幸福だと信じて居る人も決して少くはあるまい。亦ロビン

ソン、クルーソーの如き生活をすれば國家は勿論社會其ものがなくても生存は出來る。勿論孤島に獨居することを以て幸福と思ふ人はあるまいが、まさかに自殺する程に苦痛なものでもあるまいと思ふ。個人は或意味に於て絕對的存在者であるが、家族とか國家とかいふものは相對的のものである。個人は家族や國家を離れて存在が出來るが、家族と國家は個人なくして存在の出來る筈がない

家族でも國家でも個人の幸福を完全にする爲にこそ必要であれ、若し個人の幸福を增進することが出來なければ殆んど存立の必要がない。斯く論ずれば個人主義は全く自己中心主義となりはせぬかと危む人もあらうが、斯る心配は全く無用である。個人主義を本位とすることは決して家族や國家を無視するといふことてはない。或場合に於ては家族の爲め國家の爲め個人が其利益の一部を犧牲にし、或は其意志を枉げねばならぬことがある。何となれば斯くすることが却つて彼の幸福になるからである。然れども如何に家族や國家の都合とは言へ個人の幸福を侵害することの出來ぬ場合がある。此意味に於て個人は不可侵權を有する絕對的存在者であると言はねばならぬ。余は家族が個人の爲に存在して居ると思ふので、個人が家族の爲に存在して居るとは考ふることが出來ぬ

古來家族や社會の爲に個人を犧牲に供したる實例は甚だ多いのであるが、斯る制度は勿論文明の今日に於て存在することは出來ぬ。彼の奴隷制度の如きは如何であるか。今より考ふれば殆んど議論にもならぬ程の惡制度であるけれども、其當時の人々は相當の理由を以て此制度を辯護した。殊に宗敎家までが奴隷制度の已むべからざることを說いたのは滑稽でないか。要するに社會の爲とか利益とかいふことで幾多の同胞人類は奴隷として虐待を受けたのである。其他宗敎の爲とか國家の爲とか團體の爲とかいふことて一個人の幸福が蹂躙せられたる場合は幾何あるであらうか

今日も尙ほ家族てふことの爲に個人の犧牲に供せらるゝことが幾何あるか殆んどこれを數ふることは出來な

い。多くの青年男女は學問するにも結婚するにも家族の都合といふことの爲に將來の幸福を全く犧牲に供せねばならぬことがある。余が今筆を運ばす中にも悲慘なる多くの事實が記憶に浮んで來る某青年は非凡の學才を備へて將來大學者となるべく人々に矚目されて居た。彼には充分なる學資もあり奮發心もあつたけれども、彼は不幸にして長男なるが故に終に學事を抛つて田舍に歸るべく餘儀なくされた。某青年は文學に嗜好を有して居るに拘はらず彼は其父の醫者なるを以て無理に己の好まざる學科を選ばされた。某女子は其親戚の富家に學問もなき智慧も足らざる青年あつて他に妻を求むる途なきため、兩親に强いられて終に其家に嫁した。結婚後夫が放蕩を始めたる爲め今は離婚して居る。若し此の如きことを擧げ來つたならば今日の家族主義が如何に暴威を揮ふて個人の安寧幸福を破壞しつゝあるかゞ分る。

今日は個人の權利も大分發達して來たようではあるが尙ほ吾人はこれが爲め大に努力する所がなくてはならぬ。我國に於ては家督相續といふことがあるから養子制度といふ忌むべき習慣を生じた。これは家族主義の爲に個人の幸福が犧牲に供せらるゝ明白なる實例である。今日の青年にして獨立獨行の出來るものが好んで養子となる譯はない。養子になる位の者は先づ無能にして氣慨のなき青年と見て差支はあるまい。然らば其青年を夫として迎ふる所の女子は實に氣の毒なものではないか。若し此女子にして自由に他に嫁することが出來るとすれば彼は隨分有爲なる夫を擇ぶことが出來るのだ。然るに彼は家族主義の名の下に平凡なる夫を迎へねばならぬのだ。家といふものは個人の幸福を斯く犧牲にしても差支なき程に大切なるものであるのだらうか

吾人は飽くまでも個人主義本位を主張する。然れども個人主義は決して家族主義と調和の出來ぬものではない。若し此二主義の間に衝突が起つたならば吾人は勿論個人主義を主として家族主義を客とするけれども、此主客の位地さへ轉倒しなければ二者の間に衝突を來

すが如き憂はない。個人が充分に幸福を完ふしてこそ家族も國家も發達して行くのではないか。世には往々個人主義と社會主義とを以て氷炭相容れざるが如くに考へて居るものがある。然れども個人主義を埋沒するが如き社會主義ならば吾人は斷じて之に賛同することは出來ぬ。充分發達したる所の個人主義を含蓄せざる社會主義は必ず抑壓主義に陷るに相違ない。或は趣味なき平等主義に傾くかも知れぬ。故に完全なる社會主義は必ず完全なる個人主義と一致すべきものである。家族主義でも其理は同一だ、若し個人主義といふものが完全に發達して居なければ家族の圓滿和合といふことも期せられぬのである。此點から考ふれば兩者の間には自ら調和の途がある樣に思はれる

各部の發達に依りて全體の調和を來すことは下等動物の有機を見ても分るてはないか。彼の植物とも動物とも附かぬような生物は其構造が單純であつて手足の區別もなければ耳目口鼻といふが如き特別の作用もない。從つて其身體を切斷せられても各部分が單獨に生存を續けて行くことが出來る。然るに生物が高等になればなる程各部が差別的發達をなすと共に其間には完全なる一致が生ずるのである。即ち其一部を切斷しても全部の存在を危くするに至るのである。社會の進化も此理に洩るゝことはない。個人が遺憾なく自己特得の才能を發揮したならば社會の進步は果して如何であるだらうか。吾人は家族や國家の發達を謀るに當り先づ個人が其能力を遺憾なく發揮し得るよう勉めねばならぬ

吾人は勿論家族若くは國家の爲に個人が其意志を枉げねばならぬ場合のあることを信ずる。然れども如何なる場合には家族の利益を主とし、如何なる場合には個人の利益を主とすべきか。是れ全く程度の問題であつて人々は其判定に迷ふことがあるかも知れぬ。然れども此場合に於て吾人が常に忘れてならぬことは個人を主とすべきことである。若し個人が家族の爲に意志を枉ぐることは家族全體の平和を來し、其平和幸福が再び其個人に反射し來るといふ場合には個人が其利益の

一部を犧牲に供するは當然である。何となれば彼は小利を捨てゝ更に大利を取ることが出來るからである。或は亦個人が喜んで自ら家族及び國家の爲に其身を犧牲に供する場合あらば吾人は寧しろこれを賞賛するもこれに反對すべきの理由を見ない。斯る場合に於ては個人が隨意的行動を採つたのであるから決して吾人の所說に反對することはないのである。個人が其友人や團體の爲に其身を犧牲に供するはこれを美事として賞賛すべきも、友人や團體は個人に對して斯ることを請求するの權なきのみならず、これを强請するに於ては其害の及ぶ所決して少小ではあるまい

個人の幸福に重きを置けば家族の幸福も必ず增進せらるゝに相違ない。世の親達は往々家族てふ名を以て其子女の行動を束縛し其幸福をも破壞せんとするけれども、若し其考を今少しく廣くしたならば、子女の幸福を謀ることが取りも直さず家族の幸福になるといふことを發見するであらう。例せば娘に養子を迎ふるが如きも、親は其家族の利益を謀る積であるかも知れぬが、彼は却つて反對の事を爲して居るのである。若し眞に家族のためを謀るのであらば其娘に養子を迎へずしてこれを有爲の人に嫁せしむるが善い。而して其娘の生みたる子供の一人をして其家を相續せしむれば、一方に善き相續者を得ると共に、他方に於ては其娘の爲にも善き夫を得ることが出來るではないか。世の親達にして先づ子女の幸福を求むることを第一とせば家庭の幸福は自ら之に伴ひ來るに相違ない。余は個人主義と家族主義を調和せしむるの途は一方を主とし一方を客とするにあることを信ずる。

謹んで陸軍大將兒玉源太郎子の
逝去を弔す



イブセン氏の訃

『エヒヨー』

ヘンリツク、イブセン氏は久しく衰弱症に罹り居たりしが、去五月廿三日午後二時半、クリスチアナ府に於て、近時多數の人が逝けると同じ卒中發作の疾を以て遂に他界の人と成りぬ。行年七十八歲。氏は西曆千八百廿八年三月廿日スキーンに生る、グリム、スタットの藥劑師が許に徒弟たりし頃より指を作詩に染め、此頃已に數篇の抒情詩及劇詩カチリナの作あり兼て志せる醫學をば外のものにして只管劇場に出入し、ベルゲン座の支配人兼顧問となり、後クリスチアナ座に入る。其間傍ら尙ほ脚本をも書けり。千八百六十四年の春、幾何かの旅費を得て那威を去り、世界漫遊の途に上る、此行の主なる目的は羅馬に客たらむ事是也。ブランドは實に此際の作にかゝる。爾後那威國會より年金下賜の沙汰あり、且つ自己の作物漸く世の注目を牽くに至れるを以て漸く其職に安んずるを得たり。千八百七十四年に初めて故國に歸り、千八百八十五年再度故國を訪ひしも、思はしからざりしにや、逗ること須臾にして去る。其最も久しく滯在せしはミユンヘンなり。千八百九十一年再び北に嚮ひ、クリスチヤナ府に居を定め、爾後復此地を去らず。獨乙を先として海外の藝術界は氏を目するに多想像の詩人、獨創的の詩人、深刻なる近世劇の天才となし久しく渇仰して措かず、那威本國に於ても亦此自國の天才を俟つ事漸く厚きを加へ、七十歲の辰日に當りては頗る殷盛なる祝典を擧行せり、千八百八十年の初交より氏が名聲をして重からしめたる幾曲かの社會劇は「吾等死者若し起たば」なるドラマチツシエ、エピローグを以て終る。千八百九十九年の十二月に出でたる此劇社は亦氏が量に於ては豐富、質に於て一新機軸を出したる作劇の惣收となりたるものなり。

イブセン氏の沒するや聯邦政府並に那威國會は氏が未亡人に弔電を送つて懇ろに悼意を表し、氏が遺骸は國葬を以て葬らる。那威國々會が其日程に入るに前ち、議長は下の演說をなせり。

我國會は前回の開會後に於て一大損失を蒙れり。何者吾等が寵兒ヘンリツク、イブセン氏は死神に招かれて亡き數に入りたればなり。氏が吾人に與へたる凡て、吾人に敎へたる凡てに向つて、またわが本國が世界に對して作り出でたる名譽に向つて、吾那威國は氏に對して常に深遠なる謝意を表すべき也。予は聯合政府の首相と合議の上、氏を葬るに國葬を以てせむことを茲に提議す。

國會は滿場一致を以て此提議に賛同せり。

●イプセン氏が作を成せし次第に就ては此物故せし大劇詩人の友人にして傳記々者なるイエーゲル氏が、フオツスシツエ、ツアイツング紙上に於て述べて曰はく、

夏は概れ七時頃、冬期に入りては稍之より後れて起床、衣を改むるに多大の時間を要す、是氏は衣を着くる迄には散歩をも爲し、其作の筋の工夫をも此間に於て爲すを常とせるを以てなり。氏が衣を着け終る迄に並一倍半の時間を要する所以も亦實に玆に在る也。次に朝飯は輕きものを採り、九時に著作に取かゝる。氏が作劇の筆を執れる間には明るき室の三室若くば四室を通じて行きつ戻りつするを好めり。斯の如く午前の四時間なば散歩と著作とに費すなり。氏は亦著作する間には極めて短き煙管にて煙を吹かせて、其外の時には決して喫煙することなし。一時に作を舍て、中食前に戸外に出づ。午後は讀書時間なり。夕食は適宜の時間に於てし、適宜の時間に於て寢に就く。氏が日々の勞作は一年を通じて終始渝ることなく、旅行中たりとも能ふ限り平素の慣に從つて生活せんと力めたり。其作を爲す順序方法に至りては亦極めて興味あり特色あるものなり。則ち、氏は先づ一材料を得たる時は、凝思久しきに亘り、決して輕しく筆を執つて紙に臨むことをせず。此頭腦内に於ける作の烹錬は多く單り散策せる間に於て行ふ。若し全體の輪廓が略ぼ腦中に描かれたならば、氏は之を紙に寫し取つて一々の形を與ふ。かくしてやがて草稿を成す。此稿則ち氏にあつては腦中のものに外ならざるなり。此草稿成らば氏はまづ作中の各の人物に肉を與へ血を與へ遂に魂を納れて活躍せるものたらしむ。次に至つては添删なり。添删に次ぎて淨書あり。氏は全く淨書を終ゆるにあらざれば作を他に示すことをせざるなり。之を概していへば



NONE BUT THE BRAVE DESERVE THE FARE.

—Davenport in the New York *Evening Mail.*

夏期は著作期なり、冬期は結構の工夫に專らなる時なり。冬の潜心之を夏に於て表現するなり。氏が一趣向を立てゝ作に手を下すや、單だ必須不可缺の養分を採るに過ぎず。毎朝、筆を走らする時には少量の麵包と半杯の珈琲とにて足れり、若之に過ぐる事あらば徒らに作を妨ぐるものとなると氏はいへり云々。

此イエーゲル氏の記する所に加ふるに、パウル、リンダウ氏がイブセン氏を訪問したる後に物せし零碎なる下の說明を以てせば、可ならむ

曰はく、氏は殆んど終始同一の速度を以て筆を走らして、一曲の脫稿に凡そ五ヶ月の日子を要す、一ヶ年中剩す所の七ヶ月を以て氏は一曲の作を起す準備の勞作に充つ。氏は亦各曲をいづれも形式の許す限に於て全く異りたる三樣の稿に作る。氏が一度筆をとりたる後には事故の如何を問はず決して內容を變改することなし。第一の稿は極めて不完全にして僅かに圖取り、下地塗りに過ぎず。氏は自ら言はむと欲するには悉く之を言ふ、而して舞臺面の約束などは毫も顧みず。曲中の主なる改變は第二回目の稿則ち添删の際之を行ふ。第一回の起稿は亂雜にして不秩序なる雜多の材料の堆積にして、此裡よりして首尾相關連せる舞臺面の脚色現はれ來たるなり。又此時の對話に至つては最早改むべき所なき迄嚴密に洗練を經たるものなり。第三回目の稿は此を淨書せるものといふも差支へなし。と。更にイブセン氏が友人にしてリンダウ氏の同國人なるパウルセン氏のいふ。「イブセン氏が新曲を作るに際し全く四邊の繫累より隔絕し隱退し世と相遠からざるべからざるは蓋し止み難き要求なり。抑懷胎の期間に於ては一吹風も一草搖も太しき妨げとなるものなればなり。氏は何事の近づくをも好まず又何事に近づかむともせず、かの聖僧の寺院に入るが如き念を追へり。之を例へば蠶が繭を紡ぐが如く觀念を紡ぎて、極微の色彩に至る迄剩す所なからむと欲し、日々營々として默坐裡に從ふ。日常俗界の義務を果さむが爲めに空想の世界より遷らむとは氏に取つては又なき苦痛なり。據なく書かせらるゝ返書や、止むを得ざる應對往訪やは此際氏にありては石を投じて精細、微妙なる精神上の勞作に、一大空孔を穿つが如く感ぜられしなり。

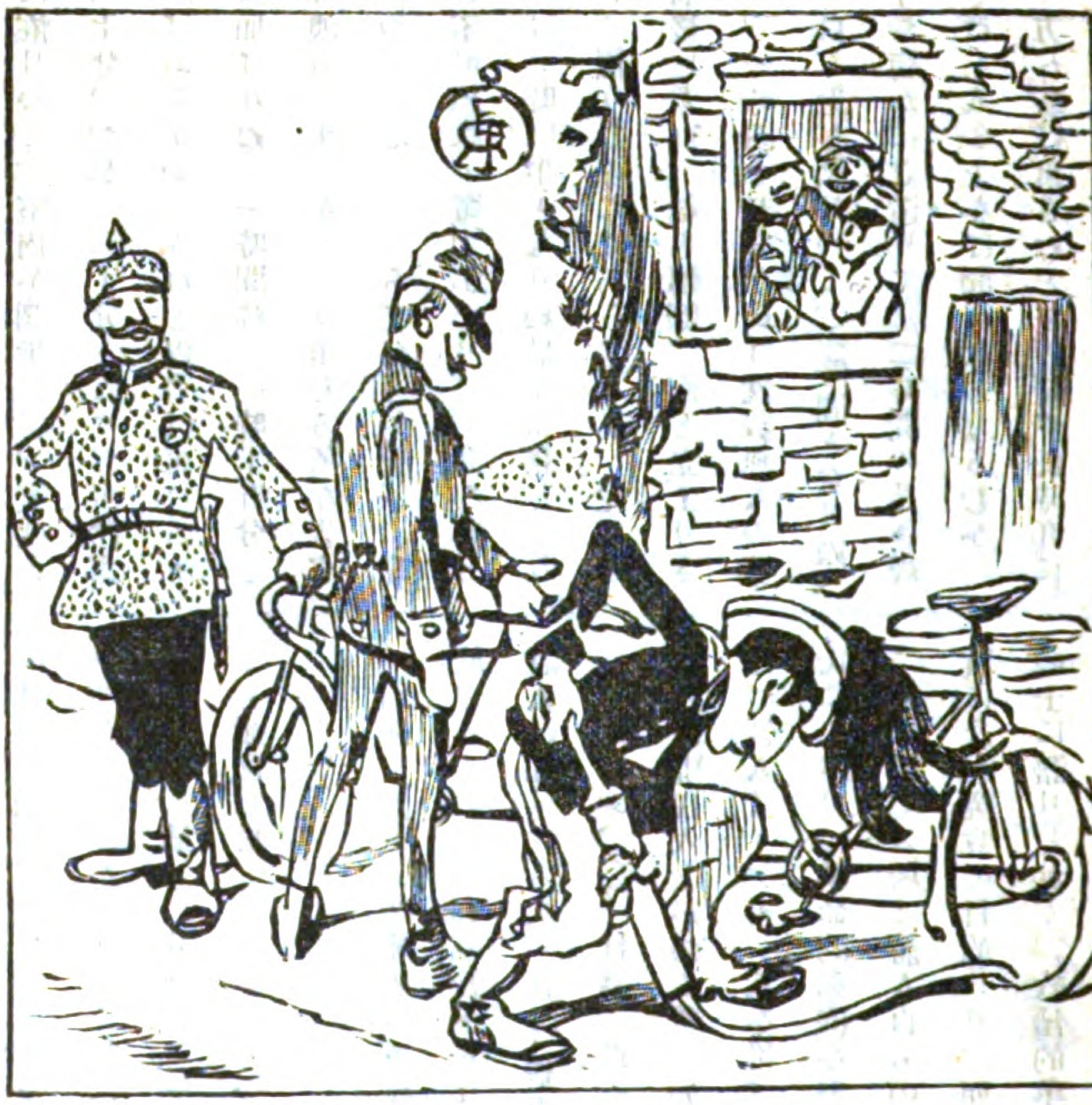
●イブセン氏に就てビエルンソンが語れる所は「コッペンハーゲン通信」の伯林通信中に見えたり。曰はく、ビエルンステエル市、ビエルンソン氏は數日前伯林より歸り來りて、イブセンの訃を耳にせし時、暫時默然たりしが、口を開いていふ。「然らば事は已に茲に到れる乎。此憐れむべき僕は恐ろしくも惱みたりき。近來は對話すらも叶はずして、偏へに死期の至らむことをのみ望み居たりき。五ヶ年が程はかゝる狀態を以て續け來たりしなり。ハーコーン王を迎立せし際、吾人は其當時或は直ちに渠は死去するにあらずやとの虞を抱きたりき。其衰弱は啻ならざりき。抱への醫師ブル博士は其砌一奇蹟を演じぬ、即ち佛國にて化成の際に發見せられたる藥劑、則ち沃度加里を投劑したりき」。ビエルンソンは更に語を續ぎていふ「イブセンが作は猛火の高塔の如し。萬人を照して歸嚮を示し、那威國に入る者をして先づ仰望せしむ。「商量」中に於て渠は其作用を最も殘なく發揮せり、渠は兎に角に一大「建

楽師」也。「野鴨」に於ては規矩整然一字の删るべきなく一句の添ふべきを見ず。渠は各曲を成すに二ケ年が間全身を捧げたり、之に仍りて其作は不朽の價値あるものとなれり。那威國人は此偉人を悼して、喪へる所の如何許大なるべきかを知らむ。取りわけて一身を渠に捧げ來りしイプセン夫人こそ愍わしきものゝ極みなれ。誰しも自己が杖とも柱とも賴みにしたるものを喪ふばかり辛きものはあらざるぞかし云々と。

●イプセン氏が結婚の事

イプセン氏は一風變りたる遣方にて戀しと思ふその人の口より、貴下の女房に成りませうといふ返答の文句を捥ぎ取りたりと傳へらる。其次第はアリートリック氏が瑞典の一新聞紙上に掲載せる次の逸話に見るべし。

イプセン氏未だベルゲン座の爲めに作を爲せし頃の事也、或時氏は不圖も、一牧師トレーセン氏が息女の美しきに眼とまりぬ。併しながら之を如何せば求婚の正當手段なるべきか、初心の氏は樣々に思を焦したる末、遂に面と向つて打出す事をせず、手翰を送つて此大問題の解決を下さむと決心しぬ。乃ち一書を裁してトレーセン夫人に遣りて返答を求め、午後五時を合圖に同家を訪はむことを期したりき。氏は獨り所爲へらく先づ名刺を與へて案内を請はむ、若し通り給へとの答を得なば是我願成就せるものにして、若しトレーセン夫人は御不在なりと聲高の返答を聽きたる時は即ち拒絶せられたる時なりと。かくて氏は寺の門に五時の寺の鐘をきゝぬ。一人の乙女は扉を開き、氏が出せる名刺を手にして、熟々と氏が身の廻りを見守りし末入り給へといふ。胸打轟かせつゝ室に入りしが、室は空うして人なかりき。乙女は氏を揖して安樂椅子に請じ、程なく夫人の來るべきを告げて退きぬ。氏はホッと吐息を洩らして坐に着きつゝやゝ心弛ぶを覺えぬ。何者人なき所に霎時ありて觀念を凝



THE THREE-SEATED TANDEM ALLIANCE.

The third tire still needs in flating.

—*Kladderadatsch* (Berlin).

らずとは氏に取りて此上なき嘉なりければなり。氏は若し意中の人が出て來らば何と言葉を掛くべきやと自問自答の內に時は過ぎて一分。五分、十分は過ぎたり。されど誰あつて出て來るものもなし。茲に至つては氏も餘りに長く待たすものかなと心に惟りつゝ、室內を濶步して、幾度か懷中時計を出しては眺めたりき。二十分、やがて三十分となりて事體萬の如し。抑かの書牘の届かざりしにはあらずや、されど返書は來れるものを。かゝる間に室內運動の速度は加はりぬ。一時間經て一時十五分ともなりぬ。一家寂として些の響をも洩らさず。かくては求むる所を告ぐべくもあらず、いて去らむ哉と思ひつゝ、心にもあらで叉もや椅子に座を下しつゝ氏は此時椅子に一種靈妙不可思議の魔力がありて、我を魅せるにはあらずやと思ひたり。正に時は一時間半となりぬ最早詳無しくなりて耐ゆべくもあらず、夫人は急病に罹りたるにはあらざるか、左りとて我にそを包む要はあらざらむ。前後無差別、氣も轉倒、衝と立上りさま癲樂の如く室中を駈廻り始めたり。一時四十五分。氏は沈寂無人の境に趺坐して求むべき何の福祉ぞやと自ら怨を罵りつゝ、二時間となりぬ。萬事休矣。所爲らく夫人は恐らく今や竊かに立還りて、二時間の長き經過を僧院の殿堂に儼然として取殘されし人の上をば聞きたるならむを、氏は此時忽然として立上りさま表の方へ駈け出さむとす。時や此時耳にしたる聲は何者。哈笑の聲、胸の奥秘を流れ出てゝ玉を轉がし鶯の初音とまがう快き微笑の聲、あの女の笑ひ聲なり。恁麼何處より此聲は來れるぞ。かの魔力を以て我を引留めしと思ひしかの安樂椅子の中より出てたるにはあらずや乎。我は夢みゐたるにはあらざるか、安樂椅子の下より美しき處女の顏の現はれ出てしをば見ざりしか。夢寐束の間も忘られぬかの心憎き美しの眼を此時見たるにはあらざるか。今氏に向けたる此眼には淚の滴を宿せり。イブセン氏は石の如く佇立せり。「妾は……妾は只卿がいかばかり久しく茲に耐忍して坐し給ひ、妾の來るを待たせ給ふかを見むと欲したりき」と笑に息を塡まらせつゝ言ひ出てたり「卿はよくも耐忍し給へり、されど今は妾の出てむことに力を供し給へ」

○ ○ ○ ○

伯林レッシング座の現支配人にしてバウル・シュレンテル氏と獨乙に於けるイブセン劇の讃爭者なるオットー、ブラーム博士の筆に成れる故詩人に加へたる次の評論「新自由紙」上に現はれたり。

イブセン、ゾラ、杜翁、此三傑が凡ての藝術上の價値の標準を變ぜしめたるは現代人士が知る所の如し。就中其動力圈の最も强きものを求めば先づ吾人はイブセン氏を推すに躊躇せず、殊に獨乙國民の精神生活上、氏にも勝りて革命的動機を與へたるもの未だあらざるなり。

下に擧ぐる所は詩人自らの感想なり。所爲らく「人類の精神的革命」は實に氏が究竟の目的たり、而して此精神的革命に就いては嘗て氏が昵近の士に語りし如く、政治的革命の期は已に去つて今や人道上のものゝ期と成りぬと。

堅固なる人格の偉力を以て節の「民人の敵」の詩人はいと熱烈に個人の權利の爲めに奮鬪したりき。而して獨乙人風の眞理探求の向上心に駈立

てられたる氏は、常に日新の體度を以て社會虚僞の外被を剝奪し、新なる社會の柱石を打建てむとして、かの過去にその根を詛き乍ら新まり行く現代に首つき出せる世の有象無象の幽靈と戰ひぬ。

されどかのベルグマン氏にも比擬すべき此大懷疑者は一大鐵槌を揮つて、化石と成りし舊時代の遺物を打破し粉碎して、徹塵と爲さずんば止まざらむとせり。氏は亦その盛年の頃欣求せし「自由と眞理」の理想、即ち自然主義の下に久しく留まるを欲せずして、新たなる前途を憧憬して之に向つて勇猛精進せし氏が詩風の最終期の傾向、即ち以前にありては一に神秘摩訶不可思議の將來の一路、死者の醒めたる時に於ての一條の大道となさむと爲たりき。

凡て此有意の所期を氏はその作劇の上に試み、嚴密に藝術的に劃限せられたる一定の熔爐中にその懷抱せる所を投じて、當代の演劇舞臺面に一新機軸を出し一新問題を提供し、更に種々の新模型を多く造り出したり。其型の活躍すべきは尙今後の獨乙劇歐洲劇に見るべく以て尙其發達を俟つべきなり。



THE POT THAT HAS A HOLE IN IT!

—*Die Wahre Jacob* (Stuttgart).

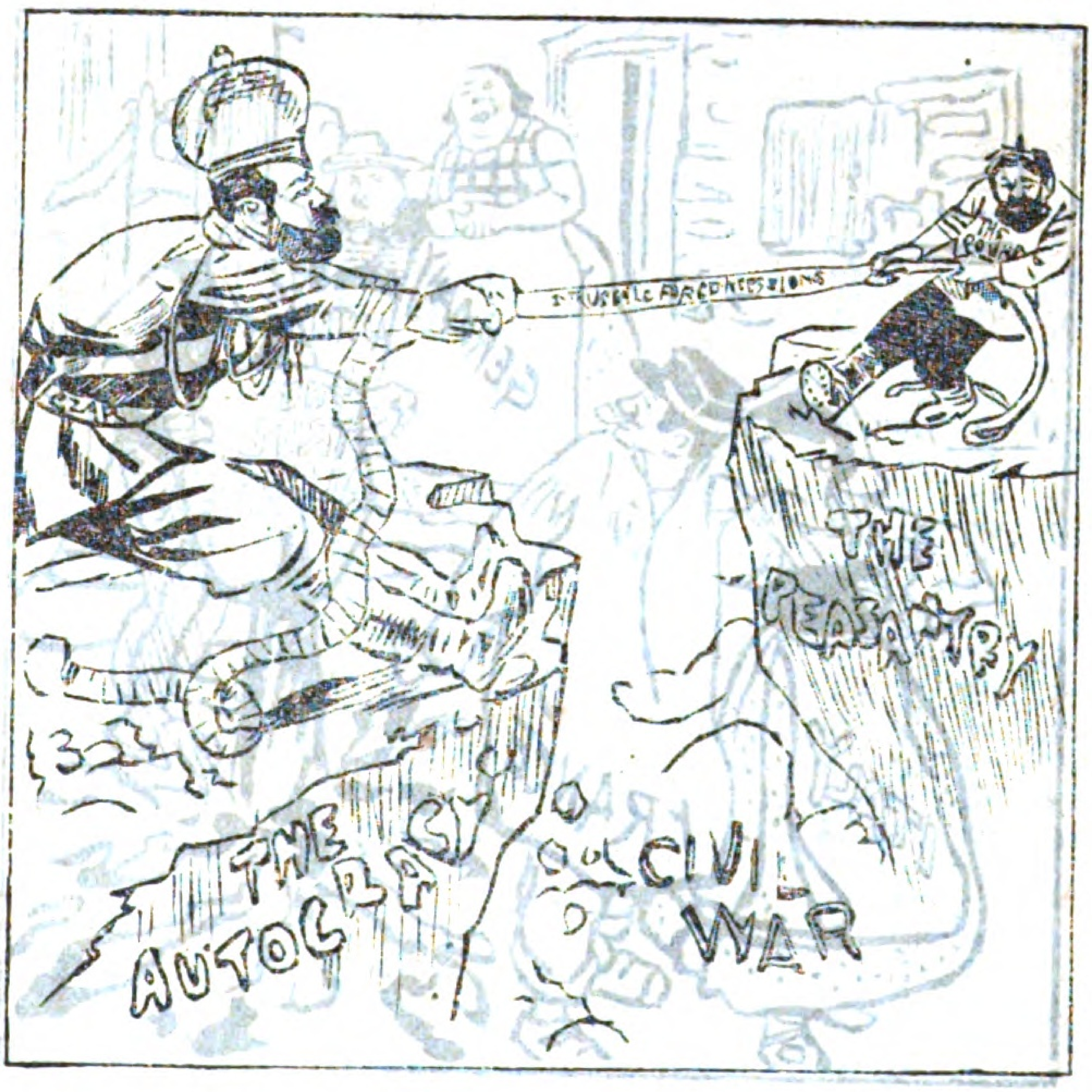
永年の重き苦痛より解脱せしめたる氏が長逝は決してその活力に終を告げたるものとはいふべからず、否寧ろそは只現在の苦闘を免れしめたるに過ぎず。氏が歷史的貢献の影響及功績に至つては、時代の經過するに連れて漸く認取せらるゝならむ。

米國日本を恐る

「モーニング、ポースト」

米國の一新聞記して曰く「日本の國旗たる旭日の章は彼が近き將來に於て太平洋上の商業權を掌握せんとするの標徵にはあらざるか」と。此記事は米國が日本が極東に於ける商業權を獨占し、米西戰爭に於て比利賓を領有したる以來殆んど米國の湖水となりたるの觀ある太平

洋を支配するに至らんことを恐怖しつゝある好證にあらずや。同新聞は倘舘を進めて曰く「若し日本が其企畫したる目的にして完成するの曉に至らんか、必ずや太平洋岸に於ける米國の港と東洋との間の汽船乘客及び貿易貨物を支配するに至るべし。而して若しかゝる豫想をば全く度外に附するも、今日公にせられたる報告書は已に漸々極東に於ける英國の商權が破壞せられ、セントジョールヂの十字章の色次第に褪せて旭日の旗章の光益々輝きつゝあるを示すなり。而して今日パシフイツク、メール。グレート、ノールザン。及びノールザン、パシフイツク等の汽船會社の船によりて北太平洋を横航しつゝある米國の旅客が餘り遠からざる將來に於て日本の旭日章の飜る下に於て日本船長の管理を受けつゝ航海することあるべきを信ず。二三日前新嘉坡の總領事ウイルプルの報告する所によるに、日本の汽船會社の一たる東洋汽船會社がパシフイツク、メール汽船會社の船を買ふべく、倫敦市場に於て二千萬圓の公債を募ることに於て成効せることを傳へたり。



THE RUSSIAN TUG-OF-WAR.

—Maybell in the Brooklyn *Eagle*.

又一方に於ては日本郵船會社がグレート、ノールザン、汽船會社よりダコタ及びミネソタ號を。ノールザン、パシフイツク汽船會社よりショームト及びトレモント號を購入するの相談纒まりたりといふ。

是れ素より公報にあらず。されど公報も亦之れと同趣旨なり。日本を商業上の强敵として恐怖するの態度は香港に於ける佛國副領事の「領事及び商業報告」によりて顯然たり。此報告は才氣ある軍人によりて米國公報の上にあらはれたり。其題目は「日本の發達。一佛國副領事の警戒」といふ。而して一節を擧ぐれば、

「香港に於ては石炭の輸入の四分の三は全く日本の手を經て、こゝに達す。加之日本の船はます／＼銅の運搬に用ひらる。最近に至るまで日

本が香港より輸入する砂糖の運搬は實に多量なりき。然るに今や其額は三千三百萬キログラムより僅かに三百萬キログラムに減少し、而して之に代て臺灣は今日本に向て多量の砂糖を産出す、領事は日本人の萬事抜目なきことを擧げ、且つ彼等が國內及び支那人との取引に於ては一年一回の計算をなすに止れども、歐洲との貿易については三ヶ月乃至六ヶ月一回清算することを記せり。日本の商船の增加は實に驚くべきものにして今や支那貿易に於ては世界の第二位に進み、香港に於ける日本船舶の噸數は千八百九十八年に比して全く二倍の多きに達したり」と

「領事及商業報告」の記者は曰く「領事が最も異常なることゝして驚嘆禁ずる能はざるは日本に於ける商業の勃興して英國の商權の侵害せられたることなり。日本は必らず極東に於ける一種のモンロー主義を建つべきこと殆ど疑を容れず」と。



AMNESTY.
THE CZAR—"Bother this Douma! Who would have thought that the cutting down of the gallows was so much harder than erecting them?"
—*Humoristische Blätter* (Vienna).

清國及び日本に於ける米國の領事は何れも日本のが爲めに諸外國の受くべき影響の大なるべきを報告せり。

米國が商業上日本を恐怖すべきは當然のことなり、何となれば米國は今や清國と大に利ある貿易をなしつゝあり、且つ今後若し日本に妨害せられずんば益々其額と重要を加ふべきこと疑を容れざる位置にあり。正直にいへば米國の恐るゝは最早や英國にあらず。眞に恐るべきは全く日本にあり。故セクレタリー、ヘー氏は常に滿洲市場を世界の競爭の爲めに公開すべきことを主張し、露國の占有に向て頑强なる反對を試みたるも全く米國の商權を彼地に張らんと欲したるが爲めのみ。又セクレタリー、ルート氏も滿洲開放論者たりしが是れ亦日本の專横を防ぎて滿洲に米國の貨物を賣捌かんと欲するによるのみ。而して近來の報告によれば米國の綿其他の織物等は續々滿洲に輸入せらるゝを證せり。今後日英米

三國が如何に極東に於ける覇權を掌握せんとするかは吾人の一日も忽諸に附すべからざる問題なり。

詩聖ゲエテが最後の光景

「フオッシエ、ツアイツング」

ラベレエの飜譯者ヨハンネス、ゴットリープ、レギー氏の手藁の中よりオットー　フオン、ベニック氏によりて發見せられたる女流批評家ルヰイゼ、ダイドレル氏の一書翰は、圖らずもゲエテが最後の光景に就いて、一の新らしき消息を齎しぬ、こは一八三二年三月二十八日の日附を以て、フオン、グワント氏に宛てられたる信書にして、其主要なる記述は實に下の如し、

昨午前十一時三十分、ゲエテは其美しかりし全生涯に比ぶべき花の如き最後を遂げぬ、八日前渠は大公妃の訪問に接して、一時間に亘る長時間快活なる談話を試みしが、此時已に渠の呼吸は聊か急迫せしと覺しく、其後直に爲したる逍遙は頗る有害なる結果を生じぬ、やがて彼は感冒の氣味にて加答児性の發熱に襲はれ靜に安臥せざるべからざるに至りぬ。醫師は一時頗る彼の狀態を憂慮せしが、程なく病症も稍快復せしを以て、再び其希望を維ぎしも思ひしも束の間にて、彼が最後の二日前狀態は急に一變して、全身は凍るが如く冷却し、胸部並に背部に劇しき疼痛を感じ、呼吸も甚しく不規則に亢進するに至り、其苦しげなる咯痰は、實にも絕望的狀態をなせるなりき、醫師は全く其希望を抛ちたりしと雖も、彼の精神は極めて確かにして、其擧止動作や話し振の日頃に增していとも快活なる、一日狀體のさまで絕望的なるべしとは思はれざりき。――彼は彼の色彩論に就いて滔々として論ずるところあり、又其最終の夜に於ては彼の息女に向つてバーゼルの講和條約締結の次第を物語り、小兒等(ゲエテが孫)を芝居見物に遣らんことを命じ、かくて自らが病症の左まで重大となるに至らず、其呼吸の少しく安樂とならんことを望みき。夕の七時半に至り、我等は病狀の頗る有望なるべきを思ひたるも、是亦果敢なき空頼みに過ぎざりき、やがて彼が兩手は氷の樣に冷却し始むると同時に其脈搏も次第に衰へ行きぬ、かくても猶は彼の態度はいやましに快活になり行くのみなりき、夜に入りて彼はサルバンヂヰ（恐らくは Salvandy が著 " Zwanzig monate oder die Revolution von 1830" を指せるなるべし）を讀まんことを望みぬ、醫師がこを遮らんとせし心盡しをも聽かず、彼がアルマ(ゲエテの孫女)を見んが爲に座を立ちし間に、詩聖は燭を命じて幾度かそを讀まんと試みたりき、されどそは已に不可能なりき、斯くて彼は書を高く捧げて戲れて言ひぬ、さらば我等切めては、彼のマンダリンの樣に恭しく此書を拜せなん」、竊に隣室に止まりし息女の彼が側に步み寄りし時、彼はさも嬉しさに堪え得じと樣に、慈愛の限を盡したる優しき情を以て此を迎へ入れしが、やがて暫時の後出て行かしめぬ、死の當日朝まだき七時頃、彼は猶は息女をして一個の紙筥を　さしめ、女史と共に色彩の變化など研究し、之に就いて種々說明

するところありき。かくて談話はやがて來るべき春の上に及び、間もなく溫和なる春ともならば己が健康もやがて勝れぬべしなど、いと爽かに物語りぬ、されど此等の晴快なる狀況にも拘らず、醫師は此七時を以て詩聖が光榮ある永眠の時機の已に開始したるを信じたりしなり、然るに彼は猶ほ何物をか物せんと試み、卓上より數葉の原稿紙を取り寄せぬ、十時頃に至りては彼は最早や、殆んど何事をも物語ることなく、唯時々極めて簡單なる片言隻語を洩すのみなりき、例へば「我側に坐せよ、間近く〳〵、我いとしき娘よ」、「卿が可憐なる腕を我に與へよ」、双の眼は大方唯半打開きてありき、其見据えたる眸には、言ふばかりなき愛情の影と去り行く彼が精神の不撓なる面影とは讀まれたり、其眼には遂に一滴の涙をも見ず、靜に椅子に倚りたる彼は、其最後の呼吸を引取りしまで其手をだに動かす事なかりき、此偉大なる美しき人格が此瞬間の於て耐へざるべからざりし苦闘は、實にも一層猛烈なるものなりしなり、頭や兩手やは靜に其位置を守りて、少しだも亂れたる樣なし、此沈痛なる寂滅の光景を眺め見て、切めては其最後の名殘を惜まんとて、轉ぶが樣に馳け入りて來りし多くの人々のあるにも氣付かざるが如く、彼が息女は唯坐りたるまゝ身動だに得せず、猶ほ暫しが間は沈默の深き思に沈めるなりき、漸くにして彼女は彼が美しき双の眼を靜に壓して、やがて今一度最後の彼を見しめんとて小兒等を呼ばしめ、自らは階上――それは二三時間前、彼の大人格が彼女が優しき涙を受けくれし彼の階上にと上り行きぬ。遺骸は猶ほ數時間同一の狀態にて病床の上に留まりしが、やがて相當の手續も濟みて、月曜日の早朝六時に埋葬することゝなりぬ、偉人の靈は大公カル、アウグストと竝んで、王族墓地に永久平和の安眠に入らるるなるべし。

次號の公論欄には**桑田法學博士**の「社會主義と社會改良主義」**中島半次郎氏**の「家族主義と個人主義の調和」を初めとし、思想界を裨益すべき名論數篇掲載せらるべし。

秋期大附錄號は九月一日を以て發行するの計畫なりしを準備整はざる爲め、延期して**十月一日**に出版することゝせり。乞ふ刮目して本號の出づるを俟て。



机上小觀

戸川秋骨

五　所謂煩悶の側面觀

日露の戰爭の正に酣にして全國民の熱情擧てこれに傾注せし時に當りて、尤も活氣に富み尤も情熱の盛なりし青年の一部が、此國民活躍の一大事業に對し、頗る冷靜の態度に出て殆んど干り知らざるが如きものありしは深く留心すべき事に屬す。「國民」氏は則ち筆を呵して此一輩を警戒し訓飭する處ありき。而もかれ等の心意、實は決して冷靜ならざりし、其心裡の內殿には尋常人以上の覇氣ありしなり。果して然らば彼等は何事を默慮しつゝありしか。

近時煩悶者流のやうやく盛にして自殺者の續出するや、同じ「國民」氏再び起ちて百方言を盡して後、道同じからざれば共に語らずと最後の嗟嘆を洩せり。然りこの、戰時及び戰後に於ける「國民」氏が警飭たる、まことに當然の事にして吾人また首肯せざるを得ざる也。然れども烱眼なる「國民」氏は、何故に此大恨事の裏面を洞觀するの勞をとらざりしか、抑も亦所謂同じからざれば想ひ到らざりしものか。余は此一大恨事が一朝にして起り來りし尋常の事實にあらずして、其禍根が深く明治政府の政策に基せりと信ずるものなり。

實にかれ等自殺者流煩悶者流の行動は嘲笑に値すべきものあるべしと雖も、かれ等を外にして別に現代に一大煩悶一大缺陷のあるは事實なり。而して現代にこの煩悶缺陷を顯出せしめ、これを增大せしめしもの一々明治政府の政策にありとす。今暫らく明治政府の政策を言ふに前だちて、さらに一つの事實を語らしめよ。戰爭の當時に於て、新聞紙は口を極めて對手國を罵れ

り。かれの爲す所は盡く非にして、吾の行ふ處は凡て可なり、かれの道義かれの戰術かれの作戰かれの勇氣盡く拙惡にして、吾のそれ等はみな善良なりき。斯くの如きは素より人心鼓舞の必要ありしためにして、政府も亦飽まで言論を檢束して以てかくの如くならしめしものなりと雖も、其結果せし處は則ち如何、試みに個人に就きて戰爭に關して其知れる處其想ふ處を語らしめんか、極めて頑迷なる徒輩の外は、心情を吐露して對手國の長を說くなり。これを戰場より歸來の軍人に問へば、かれ等また露人の勇と其武器の精とを說きてやまず。これと共に吾が政府の檢束せる事實は遠き海外に於て發表せられ屢々識者の笑を招けり。こゝに於てか其檢束はたま／＼心ある人をして反離の念を抱かしめ、僅かに愚民の心を鼓舞しかれ等をして躍起盲動せしむるを得しに過ぎざりき。則ちかれ等愚民を躍起せしめ盲起せしめし結果は、最後媾和の一段に至り其眞相の開示せらるゝに及びてや、民衆の失望となり落膽となり、嚮きの反動は交番の燒打となりて顯れたり。當初は隱して喜ばしめ後段には顯はれて其怒を買ふ。政府は交番の燒打に於て、播きたるものを刈りたるのみ。また當然なり。而も明治政府の斯くの如き短見は啻に日露の戰爭のみに限られざるなり。

余は門外漢を以て猥りに政治の如何を論ずるものにあらず。只こゝに二個の動かすべからざる事實を語らんと欲するのみ。曰く戰爭に對する青年の冷靜と其原因、曰く識者が視たる敵國の長所これなり。而して余は言はんと欲す、かくの如きは人心の自然より出しものなりと。まことに日常學藝の新らしきに接する青年と識者とは能く事實の眞相を知れりしなり。故に青年が殊更らに冷靜なりしにあらずして、言論の檢束が斯くの如くならしめしのみ。若し言論の檢束が當時の必要事件なりしとせば、則ち國家の必要事件が青年をして斯くならしめしのみ。然らば青年の冷靜はたま／＼かれ等が熱烈の抑へんと欲して抑へ難かりしを示すものにあらずや。此れ實に人心の自然なりとす。

自然の大勢は恐るべし、英國の南阿に惡戰するや、界

國非一致なりき。一面にはチエンバレーン氏を難撃してまた餘さざるものありき。所謂人道の重きを説きて世界同胞主義を標榜せるものは氏を蛇蝎視せり。然れども一面の活動論者はグラッドストーン氏の政策を難じ、かれにして若し千八百八十年に於ける其執政宜しきを得たりしならんには、今日戰爭を見るの要なかりしと稱して、氏が人道主義を排斥するものありき。凡そ事物に兩面の存するは其自然ならずや、此の自然を無視するものは危し、佛蘭西軍のロムバルデアに侵入するや、希世の畫家レオナルド、ダ、ヴインチ其門弟フランチェスコと共に硝煙の高く登るを見て所思く、ロムバルデア贏つか、佛人贏つか、公爵ルドヴイコかはた異邦の王者ルイか、吾か民の勝利か抑も亦異郷の軍か、斯くの如きは些事なり。國家、光榮、戰爭、政略の爭闘、王位の顚動、國民の激興、凡そ常人の大なりきとして恐るゝ處の者、すべて斯くの如きは彼方にかゝれる一抹の煙雲にして、靜平なる夕榮のうちに消えて不變なる自然の清きが中に沒し去るなり。

ヴインチの感想は世界的文藝復興時代伊太利の思想にして、直に移してこゝに用ふべからざるものなりと雖も、また人心の一面を見るに足るべし。而も當代に時を同ふしてマキアベリーの如き愛郷者ありしを見れば、益々以て人心自然の兩面を視ふを得んなり。讀者よ、再びこれを吾が戰時中に見よ、當時言苟も公平に亘らんか、非、學術の上に關する者と雖、社會は論難攻擊、罵詈惡聲して餘す所なく、直ちに呼んで露探といふ。かくの如き時局に際し、自家の公平なる所見をとりてこれを公衆に披陳して、罵詈惡聲を顧みざるものは高德偉大の人、識者にして亦活力ある人ならざるべからず。若しそれ尋常の人ならんか只これを思ふて徒らに煩悶するに止まらん。今こゝに青年は如何、かれ等は新智識を有せり、所謂官廳の小吏に勝りて廣濶なる思想に浴せり、恐らくはかれ等の先輩よりも更らに活眼を有せり、而も老輩の有する隱忍の念なくして活氣に富めり、かれ等言論を檢束せられてまた如何に

處すべきか。

言論の檢束すでに青年に煩悶を與ふるものならずや。かれ等はやむを得ず、實際の世界を去つて精神界に赴く、而れども其去るや、心平ならずして去る。故に精神界にありてもたま〳〵其苦腦を多くし煩悶を增すのみなり。然りと雖も讀者よ、余は現時煩悶者流自殺者流が斯くの如き有望なる青年なりといふにはあらず、むしろ斯くの如き徒輩を出すは現代の恨事にして、此れを厭ふの念は世の論者と等しと雖も、かれ等末流をしてこゝに至らしめし所以に至りては、別に如上の高潔なる青年のうちに斯くの如き思潮の貫流せるを警告せんと欲するのみ。見よ、露西亞のトルストイの思想はかれ政府が壓抑に依りて出しものとす。かのツルゲニエフ亦政府の忌む所となり、他郷に流寓して其鬱勃の氣を不朽の文字に殘せるにあらずや。見よ〳〵吾が青年の趣く處、トルストイにあらずや、ツルゲニエフにあらずや、抑も亦極端なるゴルキーの歡迎せらるゝは頗る留心に値すべき異象にあらずや。

余は特に戰時中の政策に關して論議する處ありしと雖も、そは極めて明確なる一例に過ぎずして、更らに著大なる誤謬に至りては常に明治政府に依りて行はるゝ處なりとす。たとへば徒に儉勤を說き尙武を勵むるが如き、口に忠孝を稱せざれば愛國者にあらず、日に道德を說かざれば敎育家たらざるが如き、凡てかの短見政策に屬す、爲政者思はざるべからず、局に文政にあたるもの再思三考せざるべからず。

余の言ふ處誤らずとすれば、現代の煩悶自殺は政府の自から招きし處なり。恰もこれ民衆をして戰爭に狂喜せしめ、後ちポーツマウスに落膽せしめしと同一の逕路のみ。今日愴惶として青年の前途を懸念し、更に檢束主義に反るが如きは思はざるの甚しきものとす。これを要するに青年はしかく墮落せるにあらず、政策これを害ふのみ。かれ等が空想煩悶は直ちに其熱情有爲の資を示す。現代の青年を指導するものこゝに見る處なかるべからずや。蓋し爲政者は深遠の洞察と明識とを要す。現首相西園寺侯の如き則ち其人にあらずや。

六　西園寺内閣の文政

西園寺内閣成るの日余は先輩某氏に書を送りてこれを慶し、其大に文政に力を致さん事を希望し、殊に總理閣下の自から文相を兼攝せられん事の時宜に適せるを述べにき。余がこの希望は二個の理由より出しなり、第一は世人の熟知せる如く、侯爵閣下の行爲の瀟洒にして、人格の時流に拔ける處あるを以てなり。第二には閣下が嘗て文相として卓見を有し、世界主義を標榜して一世を驚かしたる事實を記臆せしが故なり。然るに現首相の期したる現文相當時なほ海外にありしがため、余が私望はたまたま事實として現實され、首相は文相を兼攝する事となれり。後また乙なる某氏余に語りて曰く、現內閣が所期の一は文政の革新にありと。余は益々希望の徒爾ならざりしを見て深く喜べり。讀者よ、余は徒らに自家の私事を公にして喜ぶものにあらず。只總理閣下の風姿と抱負とに多大の信賴をなせしを言はんと欲するのみ。

余が閣下に信賴するの處ものは、其積極的の方針にあり。曩日の世界主義これなり。更らに行政整理の打切りこれなり。社會主義に對する寬容の態度これなり。聞者閣下の行跡風流洒落、花柳の巷に出入して能く他の心服を贏ち得、大官元老の常に醜態を演ずるとは雲壤の差あり。事古りにたれども元老の遊興を以てこれに溺るゝものとせば、閣下のそれは眞によく遊ぶ者といふべきか。閣下の狹斜の巷に出入するは故星亨氏が私行の清潔なりしに勝りて推服すべき處ならん。それ戰時の政策は或は消極なるを要する事あらん、然れども戰後の事は凡て積極的なるを要す。余は閣下が花柳の巷に心服を贏ち得る其遺憾なき積極主義を以て、戰後の文政に力を致されん事を聞き、衷心の喜悅を禁ずる能はざりき。何となればこれ實に國家の慶事たればなり。

日ならずして牧野現文相歸來せり。君は嘗て西園寺文相の下に次官たりき。故に總理閣下の政策を遂行するに好個の大臣たり。余は斯くの如く信じて、益々現內

閣が期する處の文政の刷新が著大なるべきを想像せり。果然新文相の訓令は出てたり。然れども余が希望は根底より覆されたり。余は訓令の內容に容啄せんとは欲せず。何となれば訓令の文字は極めて明白の道理なればなり。只惜む、あまりに道理に過ぎて、新文相が個人的性格の其內に髣髴たるものなく、總理閣下が本懷とすべきもの終に見るを得ざるを。

抑も余が察して首相の本懷となす處のものは、前記の如く主義主張の積極的なるに在り。然ればも訓令は凡て消極的なり、曰く風紀を亂るべからず、厭世に陷るべからず、社會主義は非なり、奢侈は非なりと。かくの如きはそれ一學校長の訓辭にあらずや、これをしも國務大臣が文政の方針といふを得べきか。素より一面を排するは則ち直ちにまた一面を揚るの意なりと雖も、訓令全體の聲調は全く消極にあり。余を以てすれば、事の積極的なる限り、所謂奢侈も可とすべく、社會主義も奬勵すべく、厭世も喜ぶべし、區々なる風紀の如何に驚くが如きは、時代の精神、時勢の風潮を知らざるに坐す。總理閣下の見解また或は斯くの如きにあらざるなきか。而も人各其見を異にす、文相閣下の意は則ちこれにならずとせばまた已を得じ。而も宜しく積極的の見地に立つべかりしにあらざるか。たとへば曩日の西園寺文相が執りし如く、儼然たる主義の標榜を以てすべし。奢侈を非とし社會主義を排すと號せずして、國權の重んずべきを說くべく、はた活動の大本義を敎ふべし。訓令の斯くの如くならざりしは頗る遺憾なりとす。これ果して西園寺首相閣下の眞意本懷なるべきか、果して然りとせば、閣下が他の政策に比して頗る矛盾する處あるを怪む。

星菫、自殺はなほ情熱の欝勃たるを示す。知らずや、凡ての否定は寂滅に終るべきを。

● 常建

竹徑通幽處
禪房花木深

エスペラント語の要領

藤田季莊

(一) 序言

國際間の交通倍々頻繁を極め列國間の關係愈々複雜を極むるの今日に當り交通を簡便にし以て意志の疏通を容易に關係を圓滿にし以て親好の程度を増進し各國民互に長を取て短を補ひ以て便益の交換を期するは必然辯を俟たざる所なりとす、而して之れが多少の障害をなすもの丶素因中各國民互に其國語を異にするの一事亦預て重きを致すものたらざるべからず、然りと雖ども國語の存廢如何は國家の興亡如何と共に重大の關係を有するものなるが故に各自其國語を進歩完成するに止らず更に他國人間に使用範圍を擴張せんとするの趨勢を生ずるは必然免かれざる所にして同一國内に於ても居住臣民の用語を異にするときは亦斯の如きの競爭を現出すること稀なりとせず假令墺何國に於けるが如し、蓋し是れ各自の存在を防衛し國家の獨立を倍々鞏固ならしめんとするの動機に出づる當然の行爲たるべきものにして斯の如きの自尊心に乏しき國民は遂に國際競爭の場裡に於て獨立行動をなすに堪へざるに至るもの少なしとせず假令布哇島民に於けるが如し、此を以てか各國民は互に他の國語を學習し以て交通を簡便にし意志の疏通を容易ならしめんとす、然り而して現世界に存する言語の數決して少なきにあらず優に三千以上に達するものにして單に其重要なるもの丶みを列舉するも十指を越ゆること遂に多し、加ふるに學習の難易互に相同じからず、此に於てか國際通語なるものを一定し以て各國民の共同用語となさんとするの要を說く者起るに至れり、而して現世界の一國語を撰て之れに宛てんか猶く國民の自尊心を毀傷するの嫌なき能はず舊世界の死語を取て之れに宛てんか全く開明の新天地に適合せざるの嘆なき能はず、遂に一種嶄新

の中立用語を編成し各國民をして自國語と共に併用する國際通語となさんとするの考案を實施するに至れり、彼の「ヨハン、マルチーン、シウライヤー」Johann Martin Schleyer の考案に成れる、「ヴォラピュック」Volapük 即ち世界語是れなり（讀賣新聞は明治二十一年一月以來の紙上に其文法を連載して多く社會に貢献する所ありたり）、同語は歐洲諸國に於て漸々使用範圍を擴張し將に國際通語とならんとするの觀ありしが未だ全く其奏功を確實にするの機に遇せざるに先だち露國「ヴァルシアーヴァ」Warszawa の醫師「ザーメンホーフ」Dr. L. Zamenhof 亦國際通語を案出し「ドクトーロ、エスペラント」Doktoro Esperanto と稱する匿名を以て千八百八十七年即ち明治十八年末之れを公表するに會せり、（此匿名は後ち一變して遂に此國際通語の名稱となり「リングヴォ、エスペラント」Lingvo Esperanto 即ち「エスペラント」語又は單に「エスペラント」Esperanto と謂ふ、「エスペラント」とは冀望者即ち國際通語となるの奏功を冀望する者の義なり）、

「エスペラント」語一度世に現はれてより先づ露國に傳播し次に瑞典、獨逸、瑞西、墺匈國、伊國、西國、蘭國、白國、葡國、佛國、英國等に普及し亦北米合衆國を初とめし南米の諸共和國に亘り駸々乎として日々に賛同者を增加し各自の國語を以て其文法及字彙を編纂し以て之れが學習の便宜を圖り賛同者の間に於ては俱樂部を組織し以て之れが普及の進路を開き亦同語を以て雜誌を發刊し以て之れが傳播の步武を速かならしめんとす、之れに加ふるに國語を以て著述し又は翻譯したる書籍の世に現はるゝもの一にして足らず、而して同語の効益倍々世の認識を固ふするに至り巴里の醫科大學に於て今や編纂の緒に就きたる世界藥物學大辭典中に同語を加入するの運に趨けり（中央公論第二十一年第七號第三十四丁を參看すべし）、蓋し將來に於て眞に國際通語となるの機に會したるものと謂ふべきものなり、本邦に對し初めて「エスペラント」語使用の勸誘を促したるものは但し明治三十一年喜賓會に宛同語を以て認めたる書柬を送附し來れるにあるならん、以來同

語の存在と有用を認めたるの人士實に僅少數にして未だ全く一般の膾炙する所とならざりしなり、然るに今日に於ては幸にして同語に對するの注意漸く盛ならんとするの徵を呈するものあり、此を以てか同語の要領に就き記述するは有志者に補益する所亦少なからざるべきを見るに至る。

「エスペラント」語は文法の組織を極めて簡單にし學習者をして容易に之れを修得せしめんとするを本旨とするものなるが故に該點に於ては遙に彼の「ヴォラビュック」語を凌駕するものあり即ち一定の語基に一定の語尾を附して品詞の區別變形を示し使用を固定するものにして要則十六ヶ條より成り僅に三十分間を出でずして之れを暗記することを得べく亦除外例を設けざるが故に一度之れに通達せば直ちに文章を解釋するの緖に就くことを得べし。

「エスペラント」語は「ヴォラビュック」語と同樣に歐洲の言語を基礎として案出したるものにして殊に羅馬Romance語派に屬する分子を包含すること多し、此故に現歐洲國語中の一二を能くする者は一見して容易に其意義如何を判定することを得べく從て之れに通達すること極めて迅速なるべし。

「エスペラント」語の字母は一字一音を示すものにして假令歐洲國語中の字母の如く歷史の沿革に據り一字數音を表するが如き複雜の態を現はざるゝが故に學習者をして發音の難に惱ましむることなく又母音を語尾とする場合多きを以て本邦人には平易流暢なるの感あらしむるものなり。

「エスペラント」語の語辭は一定の語根又は語基に一定の前添Prefix又は後添Suffixを附して編成し亦一語に複雜の意義を帶ばしむることなきが故に之れを學習すること甚だ簡易にして重要の語根約九百を暗んずるときは一定の法則に從て任意に他の語辭を編成することを得べく亦國語を讀み書き且話すこと容易の業たることを得べし。

然り而して「エスペラント」語が未だ歐洲の言語を修めざる本邦人に對し多少の難點を呈する所あるものは

左に記述せんとする同語の要領中に於て之れを示すが如く(第一)文章の組織に於ける語辭の配置にあり即ち寧ろ漢文と同様にして邦語の文章中にある語辭の位置を轉倒したるが如き觀あらしむるものあり、(第二)語句の運用にあり即ち同語は歐洲の言語を主脳として案出したるものなるが故に其精神に準據すること多く直ちに邦語を翻譯して同語に化すること易からざるの嘆なからしめざるものあり、但し之れに熟通するときは遂に全く是等の異感を除くに至らん。

今や「エスペラント」語は既に「ヴオラピユック」語を凌ぎて倍々普及の範圍を擴張せんとするに際し吾人が之れを使用するの便宜如何を論ずるは實に無用の言を弄するものにして其大なること素より辯を俟たず、即ち自國語の獨立を毀損することなくして僅に一種の中立言語を使用し以て汎く全世界の同志國民と交通し互に其意志を解し其學藝を賞し互に其便益を交換することを得べく亦一國内に於て別種の言語を使用する臣民の統一を易くし一致を固くするに便なるとを得べし。

左に斯の如きの國際通語たる、「エスペラント」語の要領を記述せんとす、但し眞に其要領を摘記するに過ぎざるものにして殊に未だ歐洲語文法の素養なき者に對しては猶ほ細に亘るを要するものとす。

(二) 字母

「エスペラント」語の字母は二十八字より成り母音六子音二十二を有す、其形態及發音は左の如し、(字母中には日本語音を以て正確に發音を示し難きものあり、依て必要を認むるときは英、獨、佛語音を引用せり)

1. A a 日本語母音「ア」に同じ。
2. B b 日本語「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」の基音「ブ」に同じ、英獨佛語の b に當る。
3. C c 日本語「ツ」の音に同じ、獨語の z に當る
4. Ĉ ĉ 日本語「チ」の音に同じ、英語の ch の軟音に當る
5. D d 日本語「ダ、ヂ、ヅ、デ、ド」の基音「ヅ」に同じ、英獨佛語の d に當る。

6. E e 日本語母音「エ」に同じ

7. F f 日本語「フ」の音に同じ、英佛語のf又は獨語のf及vに當る

8. G g 日本語「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」の基音「グ」に同じ、英獨佛語gの硬音に當る

9. Ĝ ĝ 英語gの軟音即ちgentlemanのgに當る

10. H h 軟喉音「フ」に同じ、英語又は獨語のhに當る

11. Ĥ ĥ 硬喉音「フ」に同じ、獨語chの硬音又は露語のxに當る

12. I i 日本語母音「イ」に同じ

13. J j 日本語「ヤ、イ、ユ、エ、ヨ」の基音「ユ」に同じ、英佛語のy又は獨語jに當る

14. Ĵ ĵ 日本語「ジ」の音に同じ、佛語journalのjに當る

15. K k 日本語「カ、キ、ク、ケ、コ」の基音「ク」に同じ、英獨佛語のkに當る

16. L l 英獨佛語のlに當る

17. M m 日本語「マ、ミ、ム、メ、モ」の基音「ム」に同じ、英獨佛語のmに當る

18. N n 日本語「ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ」の基音「ヌ」に同じ、英獨佛語のnに當る

19. O o 日本語母音「オ」に同じ

20. P p 日本語「パ、ピ、プ、ペ、ポ」の基音「プ」に同じ、英獨佛語のpに當る

21. R r 日本語「ラ、リ、ル、レ、ロ」の基音「ル」に同じ、英獨佛語のrに當る

22. S s 日本語「サ、シ、ス、セ、ソ」の基音「ス」に同じ、英獨佛語sの硬音に當る

23. Ŝ ŝ 日本語「シ」の音に同じ、英語のsh獨語のsch佛語のchに當る

24. T t 日本語「タ、チ、ツ、テ、ト」の基音「ツ」に同じ、英獨佛語のtに當る

25. U u 日本語母音「ウ」に同じ

26. Ŭ ŭ 日本語母音「ウ」の最短音に同じ、母音a及eと結合して二重母音を組成す

27. V v　日本語假字「ヴ」の音に同じ、英佛語のv又は獨語のwに當る

28. Z z　日本語「ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾ」の基音「ズ」に同じ、英佛語のzに同じ

第一則「エスペラント」語の語辭は凡て之れを綴書する字母に從ひ發音するものにして無音の字母なし。

第二則「エスペラント」語の律音 Accent は凡て最終音節より起算し必ず第二音節Penultimate Syllableの母音に存するものにして該音節が母音を以て結了するときは高長音を有し子音を以て結了するときは高短音を有するものとす。

Aŭ 及 Eŭ は二重母音 Diphthongにして一音節を組成するものと見做し一聲に之れを發音するものとす、假令 antaŭe(アンターウエ、前に) aŭdi(アーウヂ、聞く)、hodiaŭ(ホヂーアウ、今日)、morgaŭ(モルガウ、明日)、leŭtenanto(レウテナント、中尉)の如し。

複母音 ai, ei, oi, ou は一聲を作すが如く發音するものにして律音を有する場合には前方母音に存するものとす、假令 balai(バーライ、掃除する)、trai(トラーイリ、經過する)、krei(クレーイ、作成する)、foiro(フオーイロ、定期市場)、trouzi(トローウジ、濫用する)の如し。

Aj, ej, oj, uj の如き結合字に於ても亦二字を併せて一聲に發音するものとす、假令 Japanoj(ヤパーノイ、日本國) Unuigitaj Ŝtatoj Amerikaj(ウヌイギータイ、スタートイアメリーカイ、北米合衆國)の如し。

(三) 品詞

第三則 〔冠詞Article〕定冠詞 Definite Art.一個あるのみにして不定冠詞、Indefinite Art.を使用せず定冠詞を la(ラ)と謂ふ、附屬すべき名詞の數、性、格の如何に拘はらず之れを使用するものとす、假令 la patro(ラ、パートロ、父)、la patroj(ラパートロイ、父等) la patrino(ラ、パトリーノ、母)、la patrinojn(ラ、パトリーノイン、母等を)の如し。

(注意、定冠詞を使用すべき場合は獨語又は佛語の文

法に示すものと大略同一なり、然れども初學者に於て困難を覺ゆるときは全く之れを除去して使用せざるも可なりとす)。

第四則 〔名詞Noun〕

凡て單數Singular Number の名詞は男女の性如何に拘はらずoを語尾とす、假令patro-o(パートロ、父)、patrin-o(パトリーノ、母)、dom-o(ドーモ、家)、orient-o(オリエント、東)の如し。

複數Pluralを作るには單數に語尾jを附するものとす、假令單patro複patro-j(パートロイ、父等)、單domo複domo-j(ドーモイ、家々)の如し。

女性Feminine Genderを作るには男性Masculine Gen.を示す名詞の語基に後添inを附するものとす、亦更に語尾oを附して名詞の形態を備へしむ、假令viro(ヴイーロ、男)、vir-in-o(ヴイリーノ、女)、koko(コーコ、牡鷄)、kok-in-o(コキーノ、牝鷄)、bovo(ボーヴオ、牡牛)、bov-in-o(ボヴイーノ、牝牛)の如し。

主格Nominative Caseには特殊の語尾なし、單數又は複數の名詞之れが形態を作すものとす。

目的格 Objective Caseを作るには單數又は複數の名詞に語尾nを附するものとす、假令la patro-n(ラパートロン、父を)、la patroj-n)(ラ、パートロイン、父等を)、la domo-n(ラ、ドーモン、家を)、la domoj-n(ラ、ドーモイン、家々を)の如し。

其他の格は各自に該當する前置詞を使用して之れを示すものとす、假令前置詞de(デ)al(アル)、per(ペル)por(ボル)kun(クン)等の如し。

de la homo (デ、ラ、ホーモ) 人の
de la homoj(デ、ラ、ホーモイ)人々の
al la homo (アル、ラ、ホーモ) 人に、へ
al la homoj(アル、ラ、ホーモイ)人々に、へ
per la homo(ペル、ラ、ホーモ)人に據り
per la homoj(ペル、ラ、ホーモイ)人々に據り
por la homo(ポル、ラ、ホーモ)人の爲め
por la homoj(ポル、ラ、ホーモイ)人々の爲め
kun la homo(クン、ラ、ホーモ)人と共に
kun la homoj(クン、ラ、ホーモイ)人々と共に

(未完)

文藝雜考

佐々醒雪

詩歌と人生

（芭蕉の俳諧）

文化の幼稚にして、生活の困難未だ甚しからざる時代に於いては、人類は未だ人生の意義に想到せず、從つて文藝の趣味は、唯愉快なるものとして享樂せらるゝのみ、未だそが人生の上に如何なる意味あり如何なる利害あるかを詮索せんとはせず。譬へば彼は富有の家の子なり。彼は歌舞宴遊を以て、直ちに人世の意義なりとせり、歌舞宴遊は彼にありて既に絶對の價値なり、又何ぞ別にこれが價値の標準を求むるの要あらんや。萬葉の歌人はかくの如くにしてその歌謠を享樂せり、彼は唯謠はんと欲するが故に謠ひぬ、而してその謠はんと欲する所以のものは、やがてこれ人生なりけり。青春妙齡、久しきを保すべからず、富有なる家の子もやがては人生の無常變易に會せざらんや。古今以後の歌集はかるが故に秋風落寞の悲聲多し。しかも、彼等はなほ未だ、現世の快樂に戀々として、別に清淨常樂の彼岸に憧ることを知らず。即ち歌つて曰く、「秋の菊匂ふ限はかざしてん、花より先と知らば我が身は」と、嗚呼これ何ぞ、かの信仰なき蕩兒が、最後の錢嚢を倒にして、半宵の驕興を買はんとするに彷彿たるや。

現世の快樂を外にして、別に人生の意義あるなし、その無常觀も現世佛教も、畢竟、文藝の享樂を慫慂するあるのみ。又何のところにか、彼と此との關係を疑はんや、平安朝の人士は、かるが故に、等身の佛像に拜跪して、面白き物語を讀まんことを乞ひ、佛神に立願して名歌を得んことを祈りぬ。神も佛も、彼等にとりては現世の保護者にして、そは人間と同じく、音樂を欣び、文藝を要するものと信ぜられたり。かるが故に聲美はしき讀經には梵天の來向あるが如く、今樣の巧なるものは、屢々佛神の奇瑞を蒙りぬ。何ぞ獨り、底筒男命の和歌三神の一たるを疑はんや。

とまれ、世は漸く澆季に向ひぬ、武門政權を私して、

歌讀む人はすべて失意の境に沈みぬ。百篇の名歌も三月の糧に代ふるに足らず、名流四方に流離して、朝夕なほ且つ給せざらんとす。況や歌舞管絃の都は忽にして修羅の巷となり、老たるも若きも一つ煙に立ち騰る世に、あはれ我が來世や如何ならん。翌日をも知らぬ現し世に、はかなき三十一文字の優劣を爭つて、上求菩提の途を忘れなば、見ぬ世の苦患は現世にも過ぎなんものを。靜かに思へば、色はこれ空しと說き給ひしを、花を戀ひ月に憧るも、執着の罪や得らん、ましてや、よしなき作り物語に、執着瞋恚の樣々を敍して妄語戒を破るらん物語こそはゆゝしけれ。いでや、一念發起して、遊戲三昧を棄てなんかな。さるにても、顧みて往古を見れば、代々の聖のこの道を奬め給ひしはさらなり、天地をも動かし鬼神をも感動せしむべき道とし聞くを、和歌三神に何どかこの道を守り給はざるべき。試に精進潔齋して住吉の社頭に參籠せんに、我が惑ひ晴けなんものをと、平安の末期隨一の歌人藤原俊成は、こゝに人生と文藝の關係を、神意の判決に任しぬ、これ實に當代の歌人が一般の疑惑にして、偶彼によりて代表せられたるのみ。かくて夢物語は幸に文藝に加擔しぬ、曰く和歌はいみじき菩提の緣なるべしと。これ日本の文藝が人生の意義に關して評價を蒙りし第一次なり。

定家卿は再び同じ社頭に夢想の告を得たり。此の時代に在つて、人生の意義を解決すべき唯一の標準は、神佛の敎なり、而して今や神佛は歌道を認容せり、鎌倉室町を通じて、歌道の權威を維持せしものは、實にかくの如き評價なり、神統佛敎の認容なり。文藝の價値はかくて絕對の價値に非ずして、相對の價値なり人生に對する直接の價値には非ずして、宗敎上の價値なり。世は變じ時は移りぬ、歌道漸く廢頽して連歌これに代りぬ。しかも、そはなほ神佛との關係を絕たざりき。連歌全盛時代に及びては、二條良基の徒は、盛にその功德を稱贊して佛果にかなふといひ、菩提の緣なりといひ、果ては、當時漸く權威を得來りたる儒敎にも附會して、治國平天下の術に通ずとさへ主張せり。され

ば、出陣追善等、凡そ祈願するところあれば、百句千句の連歌必ず興行せられて、當時の名匠が一代の心血を注ぎたる傑作は、多くはかゝる宗教的儀式の席に於いて成りぬ。

啻に連歌のみならず、滑稽を詮とする俳諧さへ、その最も古くして著名なるものは、立願のことありて企てられたる守武千句ならずや。我等よりこれを見れば「飛梅や輕々しくも神(紙)の春」といふが如き、輕薄なる口調を以つて初められし俳諧が、宗教的意義を含むべしとは、殆んど想像し難しと雖ども、これ守武千句の跋の言明するところにして、而して又、當時の作者の眞面目なり。

嗚呼、我が緒論はあまりに長きに似たり。されど、今日の進歩せる文藝論のみに慣らされたる讀者は、我等の祖先も、一たびはかゝる幼稚なるものなりしことを、深く反省する要あるべし。蓋し今の俳句乃至は新體詩等に耽る青年は、動もすれば、平安朝歌人の域を脱せず、彼は唯面白きが故にこれを弄ぶに過ぎず。若し一朝、失意落魄の境に立ちて、而して、その稍進歩せる理性は宗教的解決に随喜することを許さずとすれば、彼は何處にか、その文藝的生活の安心を求めんとするぞ。彼等の歸着する所は、それ或は淡林派の墮落か。眞に文藝の意義を解せずして、個人生問題の危機に立てば、彼の文藝は慰安の途に非ずして、却つて自暴自棄の緣たるべきなり。元祿以前の俳諧史は、蓋し適切にこれが例證を示すに似たり。

貞門の俳諧は古の歌道を通俗にしたるに過ぎず。彼は唯歌道の端緒として俳諧を説けり、纔かに亂痲を出でたる蒙昧の民は、堂上家の尊崇するところとして、歌道に渇仰せり、彼はその窺知すべからざる雲上の世界を仰望して、神聖なる歌道の存在を想像し、通俗なる俳諧にその餘瀝を舐むることを歡べり。當代の俄分限者が、頻に彈箏蹴鞠の遊をなして、堂上の風に模したると、その貞門に随喜せしとは、同一の徑路なり、唯人眞似のみ、別に意義あるに非ず。されば、彼等は許多の入銀を投じて、己の句の木板に印刷せらるゝを歡

びぬ、撰集の擧多きに堪へずして駄句累々たるものは頗る今日の青年雜誌の應募欄に似たり。

人智は久しく停滯せず、貞門の權威は忽にして疑はれたり。蓋し延寶天和の世は自由なる活動の開始せられし時代なり。古書新刊は年ごとに出版せられぬ、堂上の獨占に歸したりし文學は平民の間にも傳播しぬ、而して前時代の謠曲幸若の如きは、全く上流の式樂となり、歌舞伎淨瑠璃の類、日に新奇を競ひて觀客を迎へぬ。徒らに神聖視したりし歌道の、少くとも當世の風に非ざることを認めて、新らしき歌舞伎淨瑠璃の現代的趣味に嚮ふは當然の傾向なり。貞門の輩は談林の俳諧を目して四條河原の道化猿若と嘲りぬ、しかも梅翁宗因は、自ら道化猿若の達者なるを誇とせしなり。

新滿の氣に滿ちたる談林は須臾にして全國を風靡せり、自由なる滑稽と寫實とは、やがて西鶴が偉才を啓發しぬ。さもあれ、談林の徒は未だ文藝の眞意義を解せざりき、彼等は貞門の文藝論の牽强附會を笑ひぬ、而して、自己の文藝の眞の價値をも忘れたるなり。曰く「上手は上手、下手は下手、好きなことして遊ぶに若かず、夢幻の戯なり」と。嗚呼彼等の俳諧は全く一座の戯なり、點取に高點を爭へば足るなり、大矢數に儕輩を壓倒すれば足るなり。今の俳句の運座に熱中する青年は又この阿流に非るなきか。

かゝれば、その俳人は、深き修養を說かず、幽けき趣味を論ぜず、唯當時の人氣に投合して、初心の歸向者多からんことを願ふのみ。その點者の顧客（弟子）を爭ふさまは、譬へば私立學校の生徒募集の如く、その手段の陋劣なることは、英漢數敎授の怪しげなる二階に似たり。こゝに、俳人化して幇間となり、俳諧の蕩樂は女郎買よりは安値なるのみと罵られぬ。奇怪なる評價にはあらずや。當代の碩儒をして俳諧は廢家の具なりと絕叫せしめしは、これが爲なりけり。

松尾芭蕉は、かゝる時代に生れたり、彼は終生赤貧に甘んじ、乞食行脚の氣輕さを歡びぬ。彼亦固より貞德の如く、家を起し産を成したるに非ず、或は梅翁の如く衣食の爲に俳諧すといはず。これを功利主義の眼よ

り見れば、或は成功の人に非ざらん。しかも、一介の貧措大、數百年の俳壇に祖翁の名を恣にし、山村海角蕉翁の名を耳にせざるものなきに至つては、亦一個の偉人にあらずや。況や、前代の歌人俳人が嘗つて道破し得ざりし、絶對的價値を俳諧の中に發見して、滿身の熱誠を傾注して、俳諧と終始したるに至つては、日本文學史上稀に見るの人傑といふべし。予は必しも、深く芭蕉の作に隨喜するものに非ず、しかも、その高遠なる俳論に對する毎に、彼が崇高なる人格に渇仰することを禁ずる能はざるなり。

古の歌人俳人は、皆、人生の實際問題を以つて詩の價値を說かんとしぬ。そが人間の生活に快樂を與ふといふものは談林の說なり、そが人間の未來世に幸福を與ふといふものは師範家の說なり。然るに、芭蕉は俳諧を以つて、詩趣を以つて、逆まにこの人生を說明したり。曰く我が俳諧は風雅の爲なり、而して我が風雅はやがて俳諧の爲なり、名は二つにして實は一つなりと。何をか風雅といふ、曰く「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休が茶に於ける、其貫通するものは一なり。しかも、風雅における造化に從ひて四季を友とす、見る所花にあらずといふことなし、思ふ所月にあらずといふことなし、思ひ花に非ざるときは夷狄にひとし、心月に非ざるときは鳥獸に類す、夷狄をいで、鳥獸を離れて造化に從ひ造化にかへれとなり」。これ彼が風雅にして、而して又彼が俳諧なり。若し今日の言語を以つてすれば、あらゆる利害得喪の念を離脫して、天地の眞美に憧憬せんことを教ふるなり。彼は實に美神の行者なりき、人生の一切をあげて美しき天然に捧げんとしたり。所謂る美的發達を以つて人生の究竟なりと信じたり。

かるが故に、彼の俳諧は單なる發句にあらず連俳にあらず、言語文字は必竟第二義なり。されば、その門下の俳諧の形式を云々するものにあへば則ち曰く、

物知りにならんよりは心の俳諧肝要に御座候。句者は澤山に御座候へども、心法を守る人は稀〻なるものにて候。

と、宛として彼は美學宗風雅宗の傳道者なり、既に文學者の域にあらざるに似たり。さもあれ、彼が美學宗の歸依者はげに稀々なりき、世間は唯面白き戯として多く俳諧を歡迎せり、彼即ちこれを評して曰く、

風雅の道筋、大方世間三等に相見え申候。點取に晝夜を盡し、勝負を爭ひ、道を見ずして走り廻る者あり、彼等は風雅のうろたへ者に似申候へども、點者の妻子をはごくみ、店主腹をふくらし候へば、僻事せんには優りたるべし。又其身富貴にして、目に立つ慰は世上を憚り、人事いはんよりはと、日夜に二巻三巻點取、勝たるものもほこらす、負たるものも強て怒らず、いざ又一巻などゝ取りかゝり、線香五分の間に工夫をめぐらし、終に即點などゝ興ずることども、偏に少年のよみ歌留多にひとし、されども料理を調べ、酒を飽くまでにして、貧なるものを助け、點者を肥えしむること、是また道の建立の一筋なるべきか。又志を勉め情を慰め、あながち他の是非をとらず、これより誠の道にも入りぬべき器なりなど、遙に定家の骨を探り、西行の筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子か方寸に入るべき族、都鄙を數へて十の指をふさず。

彼は徒らに句作に耽るものをも、其の無用の徒勞を嘲らずして、斯道の建立なりと稱しぬ。蓋し芭蕉よりこれを見れば、人生一切の行動は、その俳諧その風雅に對してのみ、意義あり價値あればなり。

思ふに斯の如きものは芭蕉が俳諧或は詩に對する根本主義なり。彼はその終生の理想として風雅の途に向上せり、彼は世俗の一切を棄てゝ、俳諧に精進すべき天職を自覺せり。故に、偶々風雅をともにすべき者あるを見れば、先づ心の俳諧を說いて、俗塵の樂慾に拘々たらざらんことを敎ふ。蓋し眞の妙句は、風雅の理想を體得したる人格の表象なり。「其角が無分別なるところ中々及ぶべからず」と嘆ぜしもこれが爲なるべく、北枝が火災をとむらひて、

池魚の災承り、我も甲斐の山里に引移り、さま〴〵苦勞致し候へば難儀の程察し申候。されども「燒に

けり」の御秀作、斯る時に望み大丈夫感心、去來丈艸も御作驚き申ばかりに候、名歌を命に代へたる古人も候へば、斯る名句に御代へなされ候へばさのみ惜しかるまじくと存候

といひしもこれが爲なり。蓋し、既に生命を捧げて風雅に渇仰す、調度邸宅又何の惜むところぞ。況や爲に一代の名吟を得たるに於いてをや。

さもあれ、彼は一切の人類が。盡く一簔一笠、俳諧の修行に倒れざるべからずといはず從つて、又、人間の一切を犧牲にして、その風雅宗眞美宗の弘通を計らんとするが如く大膽ならず、却つて、出てゝは他人の家業を妨げんことを思ひ、故なくして同じ家に再泊せざらんことを誡め、世間滔々たる俗人凡夫は、靜かに其の家業を守つて、俳諧は老後の樂と心得んことを勸めたり。故にその直弟路通の還俗するを見ても「常の人が常のことをなすに何の不審か可有御座哉、拙者に於いては不通仕まじく候」といへるのみ。

それ〳〵、我か國の歌人俳人は、西洋の詩人と稍その立脚地を異にせり。彼にありては、一切の詩歌すべてその讀者を豫想す。彼は例へば俳優が觀客の爲に演技するが如く、或は農夫職工が需要者の爲に生產する如く、その作品は讀者の享樂を目的とせり、そが單に純美の爲にすると、道義の觀念を混ずるとを問はず、獨り作者の爲の文藝には非ずして、實に又讀者の爲の文藝なりけり。さるを、我が和歌俳諧は、主として作者の爲に創作せらる、そは或は讀者を豫想することあるべし、されども偏に讀者の爲にせんことは、彼等の賤しとする所なり。故に「俳諧は萬人にかなへんは易し、我一人にかなへんは難し、他人の爲の俳諧ならばなしよかん」とは、芭蕉が咏嘆なりけり。されば、彼等はその作物の價値を社會に求むる能はずして、これを己に求む。こゝに文藝が獨善の途として、修養の法としてのみ說明せられ、「我が俳諧は夏爐冬扇の如し、衆にさかひて用ゐるところなし」と斷ぜらる。蓋し、その夏爐冬扇とは、唯利害を離れたりとの義にはあらずして、社會に用なきの義なり。俳諧既に自己の爲にして、風

雅既に獨善の途なり。彼はその俳諧の創作を以つて、同胞人類に何物かを貢献せりとは信ずる能はざるなり。こゝに彼は他の娯樂的遊戯的俳諧の點者として、他人の遊樂の幇助者として、少許の報酬を得るに滿足し、爲し得べき限の質素なる生活を送りて、世間の費を輕うせんことを期しぬ。芭蕉が實社會に對して、極めて消極的なる態度に立てるものは即ちこれが爲なり。而してこれ又我が古來の名家の其軌を同じうする所。西行これなり長明これなり、兼好これなり。宗祇これなり。彼等の名利に淡きことは即ちこれあり、しかも、何ぞ必しも暖衣飽食の樂なるをしらざらんや、しかもそのことさらに麁衣麁食に甘んじたるものは、その社會同胞に對する偉大なる事業を以つて、單に獨善の途なりと信じたるもの、一の原にたらずとせんや。數千の門葉天下に偏ねくして、新年の瓢に五升の米あるを豐なりとし、萬子が五兩の贈遺を斥けて、三百文の小遣錢を歡受せしものは、又芭蕉が俳論の結果ならずや。

怪物傳（六）

覆面冠者

杜に凭れて眠つてゐる人

一

千早振る神田明神の坂下に、葆光社といふ印刷工場がある。

往還に沿ふて、ペンキ塗の細長き看板は見ゆるが、工場はじめ〳〵した路次の奥に在るので、電車の往き通ふ街路に看板が出てをるにも拘はらず、すと街頭を通つた丈けでは、何者の眼にも觸れない。

然かも此の印刷工場は、職工の數。三四十人、資本金幾萬圓といふ株式組織の會社、其處等の名刺刷印刷場の類では無い。――社長殿は、何人であるか知らぬが、何時も中央の椅子に、社長然と腰を据へてゐるのは、齡は六十の上を出たらしき、言葉の斷然した、小體な老人。

入口に紙は積んであるが、つと草履を足に掛け、二

夕足三足進むと、最う其處は事務室、四五人の事務員は、卓子を駢べて、生白ろき校正員と交つて、事務を取つてゐるが、例の中央の椅子に掛つてゐる老人は、工場の方に眼を遣りながら、何時も煙草をくすべて、ぽかんとしてゐる。――軈て午後二時頃に爲ると、極まつたやうに、柱に凭れて、こくり／＼と居眠するのである。

偶々周圍に陣取つてゐる事務員等は、傍に來りて、靜かに用務を質せば、眼をぱちりと、帳簿に眼を配ばりて、燐寸より火を出して、煙草を二三服、左も腹の最底より絞り出せるかと思はれるやうな音聲にてあゝ眠い！。聲が餘りに大きいので、事務員は、今更のやうに驚いて、匆々にして座に退く。すると再び昏々と柱に凭れて、眠に入るのである。……之は此の葆光社の社長代理であるが、奇妙不思議の重役もあつたもの。

葆光社の社長代理と掛けて、何と解く、と謎語を出だす者が有れば、余輩は恁ふ答へる。柱に凭れて眠つてゐる賓頭顱と。柱に凭れて眠つてゐる人！。なるほど後邊の柱子は、賓頭顱のやうに、光輝を放ちて、滑々してゐる。

柱に凭れて眠つてゐる人――あゝ是れ明治初年の大謀叛人、愛宕道旭等の靑公卿を煽動して、川上彥齋、古松簡二等と謀を通じて、新政府を顚覆せんとした岡崎恭輔の成れの果、と聞いては、讀者も意外とするであらう。

二

近頃なにがしの雜誌を見ると、當世の人氣男原敬の人物評が出て居る。其の經歷を敍せる中に、大東日報在社當時の消息が出てゐたので、柱に凭れて眠つてゐる人を知つてゐる余輩は、無限の感慨に打たれた。當時原敬を使つた大東日報社長は誰あらう。――今小印刷工場の金庫番、羽田恭輔、明治四年より、十四年に至る十年間、石川島の牢獄に於て、國事犯者を初め、強盜、殺人者の間に威名を縦にせる岡崎恭輔其の人であつたのである。

いざやさや縄目のせめもかゝる身に
　とくるはなどか妹がした紐

羽田恭輔――大村陸軍大輔襲撃より、續いて長州奇兵隊の暴動以來、有らゆる陰謀に與て、牢獄に投ぜられて、幾度か拷問に掛ると數十回、川上彥齋を初め、初岡敬治、古賀十郞等の同志は、概ね斬に處せられたるにも拘らず、八年の間未決に在り。獨り免れて、社會に出づると。

又もや娑婆ッ氣を出して、羽田姓に苗字を變へると同時に、今度は福地丸山等と棒を組んで、曾て顚覆せんとした政府のお味方に附き、大阪に大東日報を起こして、民權派の古澤滋等と對抗したのである。……政黨を離れて爰に二十幾年、羽田恭輔の名は、社會の最底に沈んで、殆んど世間に忘れられた今日。

此の明治初年の謀叛人は、原敬の內務大臣に爲つたのを傍に見て、寂然と、柱に凭れて眠つて居るので。

三

中央公論の原稿〆切刻限は、刻一刻と迫つて來る、「柱に凭れて眠つてゐる人」を書きつゝ、此處迄來ると、偶々熊本表より一封の手紙が來た。不思議！不思議！同じく明治初年の陰謀者にして、此の「柱に凭れて眠つてゐる人」と事を與にせる中村六藏老人の消息を受取つたのである。

中村六藏と言へば、雲井龍雄と京都より手を携へて東海道に下つた平井城之助其の人、獄中大圓眞理を著はして、天地の大道を悟れりと稱せる自稱神佛の古手だらうではないか――中村老人は南手東畑町十人集小路在住に有之、竹の柱に茅の屋根にあらざれども、丸太の柱に竹の屋根、赤貧洗ふが如くに御座候、……同氏金山を所有せらるゝよしにて、目下其買手出來たる趣にて東奔西走、三四回伺ひ候も面會を得ず、殘念千萬に御座候、云々。」

立志大應若乾坤　成功高順如崑崙
心比鐵石鐵石軟　誠較日月日月昏
斬姦一擧身任此　攘夷列侯不足恃
獨恨讀書業難成　只期鞠躬斃而止

勿憂天下無酬韓　自有子房心獨丹
正知宴晏是鴆毒　暫先努力碎精神

之は京師より東海道に下る時、遠山翠の雲井龍雄に與へた詩である。三十幾年の疇昔、「立志大應若乾坤、成功高順如崑崙」と壯語して快を呼んだ當年の豪傑は今金山の買手を求めて、東奔西走、寧日なしといふのである。直に知る宴晏是れ鴆毒！。

四

『柱に凭れて眠つてゐる人』を描かんとして、岐路に這入つた。往年大圓眞理を拈つた獄中の哲學者は、今老軀を提げて礦山師の群に入つて居るに、政黨離去後は、藤田傳三郎等と交つて、商才ありと稱せられた岡崎恭輔は、金庫の門番甘んじて、柱に凭れて眠つてゐるのは、不思議の對照である。

然かも太古の如き寂然たる間に、一人の怪人物が現はれたので、舞臺が聊か面白く爲つて來た。其れは南龍公以來、怪人物を出せるを以て名ある紀州男の精粹——陸奥宗光と相並んで、「油斷のならぬ人物」を以て知られてゐる明治年代の大怪物岡本柳之助が、によろりと現はれて、此の「柱に凭れて眠つてゐる人」と結び付いたのである。其の紹介者は、大阪事件の磯山清兵衞に加擔して大井小林等の計畫を破壞し、後岡本の帷幕に參して、朝鮮王妃を襲撃した中村楯雄である。

此の「明治年代の大怪物」と、「柱に凭れて眠つてゐる人」との對面の記事は、次號に讓る。

夏季學生の讀物

○　川上眉山

過般御照會の往復葉書故殘中に紛れ込み居り候爲、御返事非常の遲延何とも申譯無之候、御問合せの條小生はツルゲーネフの獵夫日記などを薦めたく候、處は綠陰にても、水邊にても、一讀悠遠なる人生に付いて冥想せらるゝ機あらば、思半ばに過ぐるもの可有之と存候、草々。

○　高島平三郎

御尋の趣一々書物の名を擧げ候事はむづかしく候が、概していへば文學生は夏期には自己專門以外の書物を讀み、趣味を多方にいたし候樣いたし度ものに候。英獨文などの讀める人には、一般にキッドの Principles of western civilization や、ヘッケルの Die Welträthsel などを推薦いたし度候。又少し古けれど Wallace の Wonderful century などもよろしかるべく候。隨つて邦文にては、丘氏の進化論講話、進化と人生、坪井氏の人類學講話などもよかるべく候。又平生あまり國文などよまぬ學生は、百家説林でも讀んで見るがよかるべく、漢文の趣味あるものは聊齋志異などのおかしきもの厭かざるべく候。英詩にては、學生にはやはりウオルヅウオルスやテニスンをすゝめ度く漢詩は五朝詩別裁などにて好なのをよむがよろしく候。

戸水寛人

○

拜復

夏期學生の讀物として最適當なるものは、傑士逸材の傳記と旅行記、特に海外の旅行記と存候、英國人は好んで人の傳記を讀む是其能く實際家として名を揚る所以に候又好んで海外旅行記を讀む、是其海外の事情に通じ、世界的事業を爲す所以に候、日本人は動もすれば空理に走り候に由り夏期休暇の際などには、人の傳記又は旅行記の如き、實際に近きものを讀むこと必要と存候、草々頓首。

岸本能武太

○

拜啓「夏期學生の讀物」に關して、愚見申上候樣御申越し相成り候ひしが、差當り考へ付き候は、昨夏小生が同樣の目的を以て集めたる、「海詩百篇」と申す有名なる英詩短篇集に御座候、海事思想涵養の爲め、又英語研究の爲め、海國青年男女避暑の友として、恰好ものゝ一と信じ申候、神田東京堂の發賣にて定價四十五錢に御座候、早々。

島地默雷

○

拜復夏期學生の讀物數多あるべしと雖も要するに山海逍遙に伴ひ携帶に便にして誦讀に趣味多き者第一の撰なるべければ風流瀟洒塵念を滌盡せん事は入蜀記、呉

船錄、漫遊紀行、先哲叢談或は劍帚、菜根談杯最も適切にして、面白かるべし若一層進んで道味を愛賞し精神修養を主とせん歟楞嚴、維摩、圓覺、抔の諸經或は論孟、老莊の諸漢籍を上乘とせん若只吟風嘯月眠臥の倦厭を消遣するに止めんとせば八犬傳、膝栗毛、の類數多にして近時國書刊行會にて出版せし新群書類從第一演劇部の如き者適當ならん然れ共好惡取捨は人に依て不同なれば一概に斷定し難し今は只予が見る所の一二を掲げて來問に報るのみ、回答延引多罪々々。

「夏期學生の讀物」に對する名士大家數十名の高見は、載せて前々號及び前號の附錄にあり。本號と併せ讀まれなば裨益する所多かるべきを信ず。



樺太の漁業植民

『東京朝日新聞』

我領土に歸したる樺太の地域は、其面積二千餘方里、殆んど九州と伯仲の間に在り。若し此島が九州と同緯度に存在せんか。其產業的價値の大なる論なきなり。去れど此島の此島たる所以は、北方に僻在するにも在る譯なれば、產業的價値少しとて、決して永く拋棄す可からず。爲し得る限り植民せざる可からず。然るに現在に於ては原人的土民の此處彼處に散點する者ある外、少數なる殘留露人が今後の雲行を眺めつゝ、僅に昔のまゝ在住するあるのみ。本邦人にして同島に在るものは、官吏の外は則ち若干の商人に過ず。これも義務上若くは利益上の掛引に由り、一時寄留するに止まり、土着の決心あるものは曉天の星も啻ならざるが如し。同島民政署が曩日移住せしめたる數百戶の農民だけは、永久土着

の見込ならんも、其農業的植民の困難なる次第は、端に論述したるが如くなれば、其繁昌は恐らくは難し。北海道の移住民中にすら、失敗を招きて當初の目的を遂ぐる能はざるもの多きに、幾層困難なる樺太のそれが、最初より容易に成功し得べしとは思はれず。果して然らば同島の植民は絶望か。否其漁業的植民は極めて安全なる可きなり。

本邦人の樺太漁業は頗る古き歴史を有す。しかも皆出稼的に之を營み絶えて同島に永住するもの有ることなし。即ち夏季を限りて一時居住すと雖も、未だ冬季に到らざるに先だちて、内地に引揚げ、年々之を繰返しつゝあり。これは同島が露領なりしが故に然りしならん。今日は即ち此の如くなる可らず。國家の上より立論し、農業的植民の成功覺束なきに林業、鑛業、若くは工業は猶更なれば、同島の植民は如何にしても漁業に依賴する外なし。況や個人的利益の上より見ても、同島に於ける隨一(寧ろ唯一)の生産業たる漁業を益發達せしめ、且永久に維持するの途は之に勝るものなきに於てをや。左に其理由を列擧せん。(一)同島漁業は從來專ら本邦人の經營し來れる所にして、最も手慣れたる確實の業務なり。(二)樺太の漁業は出稼的經營よりも、土着して之を營む方、一層安全にして有利なり。土着すれば、冬季越年中冱寒氷雪の爲、多大の困難もありと云はん、同島の冬季は決して恐るゝ程のものに非ず。(三)現に北海道沿岸には到る所として漁業者の土着を見ざるなく、而も尠少の困難を感ぜざるに非ずや。加奈陀及諾威等の實際も亦同様なり。樺太の沿岸は必ずしも此等の地方より寒しと云ふを得ず。(五)冬季の交通も亦北海道沿岸に於けると異るなし。而して土着の結果は冬季中漁船漁具の製造修理を行ひ得。且加製上須要なる薪炭の採取上にも便利多からん。(六)土着の結果は自ら同島を愛する念を加へ、引きて益漁業の改良進歩を促すべく、又魚附林として必要なる山野の樹木を濫伐せられ、若くは火災に罹るものを防ぎ得べし。(七)漁場附近に於て、耕牧を兼營し得べく、其利益亦尠少ならず。主業としてならば、耕牧の經營覺束なけれど、副業ならば則ち見込あり。且つ之を副業とする結果、自ら同島に於ける斯業經營の資料を作り、後來の農業植民に多大の參考とならん。

見よ、北海道植民の先驅をなしたるものは漁業者なり。其農業植民の成績の今日あるを致したるは、漁業の功なり。諾威に於ても然りし也。加奈陀に於ても亦然り。此等の地方と風土及天産の酷似する樺太にても亦素より然らざるべからず。樺太を經營して完全なる一地方たらしむるには、吾人は漁業植民以上の方法なしと信ずる也。況んやこれに據りて更に同島の四圍に横たはれる曠大且豐富なる新漁場を開拓し得るに於てをや。又況や同島の漁業に從事する數萬の資本家及現業者をして、折角同島にて獲得したる利益を、歸鄕の途中に於て酒色の爲め消費し、餘毒を我社會に流さしむるの弊害をも斷ち能ふに於てをや。

無我に就いて

松本文三郎

『東洋哲學』

元來事物の解釋なるものは智識の程度に因りて相違あるを以て、唯無我の名稱の均しきによりて直ちに之を同一視するが如きは大なる謬見なりと云はざるべからず、今此には是等解釋を古今東西に亘り歷史的に詳論するの暇なきを以て中に就き其最も主要なるもの丶二三を取りて略論すべし、西洋にありては、彼の厭世主義を以て有名なるショーペンハウエル亦無我の說を爲せり、曰く、意志は我の本體にして又世界の本體なり、意志は常に快樂を求め苦痛を避けんと欲して活動す而して人類は不斷不滿足を感ずるものなるが故に吾人人類の心には常に欲求あり、欲求は我の活動なり、然れば我を消滅せしめんとせは、先づ一切欲求を無にせざる可からず、然れども道德にては我を去り他を去り、自他を滅して完全の無我の境に到ること能はず、故に一切の欲求を棄てんとせば現世より退隱せざるべからず、即ち涅槃の狀態に入らざる可からず、涅槃は即ち絕對の無我なりと、是れ實に意志を本體とせる論にして此の思想は實に印度のヴエダンタ派の說に負ふ所大なるものなり。

印度に於けるヴエダンタ派は同じく無我を唱ふ、曰く、個人的我は大我の一部なり、萬有に偏滿せる世界精神は個人化して自我を生ず、既に我となれば我は自己的動作をなす、惟ふに本來我なる者あることなし、たゞ宇宙の大我分れて個人的我を生ぜしのみ、斯く考へ來らば他を殺すも又他より殺さる丶も、同じく是れ大我一部の變化に過ぎず、元と殺者なく、又被殺者なきなり、然れば則ち個人を利し、個人を愛するは無意味にして、他を愛し我を愛するは共に同一事實なり、此の個人我を全然大我中に沒入し、個人我と大我との冥合する、これ即ち、悟の狀態にして之を涅槃となす、さればたとひ個人我は滅却するが故に、之を無我となすと雖、しかも大我は終に無となるに非ず。

又佛敎中にも無我の思想あり、即ち一般の人の考ふるが如き我の實體なるものなしとなす、然れども一方より見るに、我なる者あるが如くにも見ゆ、こゝに於て眞我、假我或は世俗我眞諦我等の區別をなすに至れり、しかも假我、世俗我は眞我にあらず、感情知覺の如き世人の所謂我と稱する者は眞實に存在する者に非ずと、後代此の無我の意義に就き種々の議論起り來れるも皆大同小異なり。

更に顧て支那古代の思想を見るに、亦無我の說あり、老子には曰はく「吾所㆔以有㆓大患㆒者、爲㆓吾有㆑身、及㆓吾無㆑身、吾有㆓何患㆒」と、此の身無きに及びては何の患かあらん、即ち「復㆓歸于嬰兒㆒」するとは老子が根本の目的なり、是れ無我の狀態の現はれし形なり、然れども是未だ全く我無きにあらず、無我の至極は死なり、列子に、「人生有㆓大化四㆒、嬰孩、少壯、老耄、死亡」、而して死亡は無我の極致なり、少壯は欲望ありて不可、老耄は寡欲なりと雖ども、未だ死亡の平穩なるに如かず、即ち死亡は左別の狀態に推移せるものなるを以て、嬰孩も尙ほ且つ及ばず、死亡眞に無我の狀態なりとす。

斯く無我の見解は人に由りて各差異あり、或は身體を以て云ひ、或は意志を以て云ひ、或は大我によりて其說をなす、我に關する思想の史的變化は少しく心理學を學びたるものゝ皆知る所なり、今試みに何等かの方法によつて我を絕對的に無にせりと假定せよ、然らば現世は如何になるべきか、若し人々眞に無我なるを得たりとせんか、人世の進步は一切の方面に於て失はれざるべからず、抑進步なる者は我が現在の不完全なる狀態より比較的完全圓滿なる狀態に到達せんとの努力欲求より起因す、若し然らずんば吾人努力の必要を認むる能はざるなり、然れば此不完全を棄て完全に進むの念なからんか、進步は終に望むべからずして現世は全然不變と化し終らんのみ、斯くて發達なく、新業起らずして萬事茲に休す、是は決して望ましき狀態にあらず、吾人は常に進步を欲求して動作す、進步無くんば人生亦眞に單調なるのみならず、欲求なくんば人は枯木死灰の如し、座死以外何等の道なきなり、欲求の爲めに事を成すを以て罪惡なりとせば、人は靜坐枯死せざる可からず、果して欲求を否定せば道德も將た宗敎も成立す可からず、道德宗敎は元と是れ人生の產物なり、人生無くんば同時に此等存在の必要を見ざるなり、然れば若し斯の如き意味にて無我の說を唱道する者ありとせば、其は甚だしき自家撞着の說たるや、論を俟たざるなり、斯かる說は恐らくは有らざるべし、己れ他を正しく愛せば世人之を稱して善となす、飢ゑては食ひ渴しては飮む、誰れか之を以て惡と認むる者ぞ、世上恐くは一人の能く之を唱ふるものあらざる可し、然らば結局或種の欲求は必らず之を許さゞる可からず、楊朱の倫理說の如き利己說は固より之を惡と云はん、然れども他を愛するが如きは皆之を善と云ふ、乃ち所謂無我なるものは、我が肉體、我が精神等を虛無とせるものに非ず、動作あり欲求ある所に於ての意味なり。

元來利己利他は漠たる稱呼にして之を峻別する能はず、如何なる利他の思想にも幾分利己心存す、己の爲めにすとは啻に己を利するのみの謂にあらずして、己社會の一部分を組織する者なれば、從て社會を利益せざる可からず、何んとなれば人生の意義は我が同朋の間に存す、而して味氣なき生活は社會より孤立せる狀態に於て之を見る、故に利己利他は根本的のものにあらず、又純粹なる無我なるものあるべき理なし、要するに無我とは我を全然無にするに非ずして、我の範圍を擴張するなり、若し我を無にせば何等の意味も成立せず、世の善は利若しくは愛欲を棄つるに非ずして寧ろ之を廣め、大利大愛に至らんとするものなり、然らずんば人は終に自殺に終らざる可からず、可成的廣く其範圍を擴張し、一身一家を利するの心を棄て廣く社會を利せざるべからず、是に至つては所謂自我の實現と無我の愛とは全然是れ同一ならざる可からざるなり、其の字の如く我を無にするが如きは、決して有り得べからざることどもなり。(拔萃)

實業家の要求に對する余の所見

『實業之日本』

手島精一

今日實業家の教育界に要求する所は、在來の教育法が學者を作るに傾いて居るのを改めて、速に實際的人物を養成して貰いたいといふに一致して居る。私の學校とても實修を履行するに未だ以て滿足しては居らぬ着々實修工場の擴張並に新機械の増置を行ひ、遺憾なきを期する覺悟てあるが、學校には豫算に制限があつて速に希望を滿すとが出來ない、依て私が民間の工場主に望む所は、工業教育の完成の爲に工業家は益々其工場を學生に向て開放し、彼等の技術練習上に萬般の便宜を與へんとてある。

米國の　例を申すと、電氣機械製造工場が大學出身者を採用する法は先づ其卒業前に工場から人を特派して就職を勸誘し置き、卒業後之を採用するや各試驗室に配置して實務に當らしめ、其成蹟良好のものは扱いて事業を與へ、然らざるものは引續き試驗を行ひ段々淘汰を行ふのてある。有名なるボールドウイン會社の如きは、此の方法に依りて人物を登用するので、其要は畢竟實務に適不適を鑑識せんが爲に外ならぬ。だから此實修を盛にするのは、啻に生徒其者の利益のみならず、工場主に取つても亦一損十得と言はればならぬ。且又此上希望を言へば、民間工場に於て新機械の設備を怠らないやうにして、製作品の増加を圖るは勿論の事、學生の研究上新奇のものに接し得るやうにしたいのである。

獨逸の高等工業學校に於ては、實技の練習を經ざるものは入學の資格なきものとしてある、是れは實技を重しとする工業出身希望者に對しては本と此くあられはならぬ。併し我國では未だ纔に此法を採用して居るに過ぎない、目下本校では、一般學生より試驗を以て入學せしむるとと別に中學校又は工業學校卒業生にして、一年以上志望學科の工業に就き、本校の是認したる工場に於て實地に從事したる者は、入校上何れの者よりも優先權の特典を與へてある。然るに我工業學生の一弊として憂ふべきは、多數の中には工場實修に重きを置かず、不熱心て其課業に缺席勝のものがある。之を米國の工業學生が、競ふて實修に勉むるに比すれば、甚だ遺憾とする所てあるが是れには教育上の缺點が伴ふて居ると思はれる。私は小學教育、中學教育等の時代には、可成其生徒に科學的智識を多量に授ける方針を取りたいので、殊に中學時代の學生には一層然うしたいのてある。然るに我が現行の中學教育の傾向は、どうも文學的教育に重きを置かれ、理化算數の實際的科目は固より疎んずるといふわけてはあるまいが自然の内に偏輕の有樣を來して居るやうに思ふ。其れは私の學校へ志願して來る中學卒業生が、他の科目にて於ては及第しても、數學理化英語等の點數に於て齊しく缺くる所が多いのに依つて見るも、如何に中學教育に實際的學科の輕忽に附せられつゝあるかゞ解る加之、今の中學教育の科目は、生徒の腦量に比して餘り多きに過き、生

徒は何れの科目なりとも專攻する遑なく、勢い實際的學科に意を致すとも疎になるといふ傾がありはせぬかと考へる、而して其餘弊が延て高等教育に及び、隨て又卒業後の成蹟にも關係するので、爲に卒業生が實際的ならずとの攻擊、又は學校に無用の學科多いとの議論を耳にするは、一應道理あることと思ふ。若夫れ修學年限を短縮して、可成早く實務に就かしめんとの希望は、中學科目の改廢を行ひ其主たるものを精錬せしむれば自ら現在よりも早く卒業し得る次第となるけれども、此科目削減に就いては、教育社會にも亦反對論が喧しいから、假に實行し得るや否は疑問である、兎に角民間でも工場と學校との關係を今より一層親密にして、生徒の修技上其煩を厭はず奮つて便宜を假されんことを望む所てさる。

（援萃）

日本の特性を論ず

『北越思潮』　井上圓了

日本の特性の短所を一言にて指摘するときは、左の數字の形容詞を以て表示するを得べし、

狹小　短急　淺近　薄弱

就中、小の一字を以て特性中の特性を表し得ると考ふるなり、故に余は先づ左の數句を提唱して、漸く其次第を開陳せんと欲す、

日本
- 地小山亦小
- 屋小室亦小
- 國小人亦小
- 身小心亦小

先づ外界の事情より述ぶるに、我日本の國土は島國にして小國なり、其諸島を總括すれば延長數十里に及ぶも、幅員は至て狹小なり、從て其國内に立つ所の山は皆小にして低く、走る所の川は皆小にして急なり、湖水も平原も亦皆小にして狹し、田畑も狹小なり、市街も狹小なり、道路も公園も家屋も居室もすべて狹小なり、野外に生ずるものを見るに、米粒も其形小にして、林檎も小なり、野菜も葱の如きは西洋種に及ばず、但し茄子大根の如きは例外とすべし、風景に至ては美は則ち美なりと雖も、人工的庭園の如き風致ありて、すべて小景なり、家屋居室已に小なれば、室内の器具亦皆小なり、茶碗の如き、酒盃の如き、水差の如き、手拭の如き、机の如き、枕の如き、すべて皆小なり、唯風呂桶は日本の方大なるが如し、庖丁も日本の方僅かに大なり、此一二を除き其他は皆小なり、獨り文字の形に至りては日本字は西洋字より著しく大なり、其外大なるものにて西洋人に誇るに足るべきものは、奈良の大佛あるのみ。

次に人界を觀察するに、日本人の如き體格の小にして發育のあしきものは世界中に尠なかるべし、體軀小なれば手足も小なり、胃腸心肺の如きも亦必ず小ならん、之に準して精神の方も亦小なり、故を以て其嗜好するものも、賞玩するものも、想像するものも皆小なり、例へば美術の如きも、繪畫は其形小にして、其景亦小なり、音樂は其器小にして小ならざるは莫し、日本の名花として一般に愛賞する櫻花は、其形小にして

其壽短し、又日本の幽靈の如きは最も纎弱にして無氣力の相あり、又日本に特有なる怪物として知らるゝ天狗の如き、稍々高慢の相あるも巨大なるにあらず、其唯一の特色たるは鼻の長きのみにて甚だ小なり、是に由て之を推すに日本人の夢中に見る所のものも亦必ず小ならん、是より更に日本人の性質如何を考ふるに、才智も小、思慮も小、度量も小、志望も亦小と謂はざるべからず、近來日本人自ら稱して薄志弱行と云ふ、之と同時に余は小志急行と云はんとす、故を以て其爲す所の事業も小、其有する所の財產も小、其期する所の目的も小なり、小志なるが故に小成に安んじ、小富に甘んじ、小事を以て足れりとする風あり、又急行なるが故に、徐々として進み、乾々として倦まざるが如きこと能はず、蓋し我邦に於て古來大人物の出でたることなく、大事業の起りたることなきは之れが爲なり、先づ人物として英傑を擧ぐれば、太閤秀吉の右に出づるものなかるべし、秀吉の目的は日本を家康に讓りて、自ら大陸に入りて王とならんとするにありしなどと傳ふれども、余は決して信ぜざるなり、其軍を朝鮮に出だすが如きは、國内を鎭靜せんとする政略に過ぎざるべし、古來著名の學者あり宗教家ありしと雖も、支那或は印度より傳來せる學說を敷衍し、若くば書籍を註釋せしに過ぎず、決して新學統を開き新教系を立てたるものあらず、又畫工醫師の如きも皆支那傳來のものに多少の修飾を施したるに過ぎず、其爲す所は皆小刀細工なり、故に余は我邦に小人物ありて大人物なく、小事業ありて大事業なく、小發明ありて大發明なしと斷言せんとす、果して然らば大日本の稱は名ありて實なしと云はざるべからず、豈慨せざるを得んや。

斯く日本國を分析すれば一も小、二も小、三も小にして、之を總合すれば小日本となるも、大日本とならざるは、如何なる原因によりて然る乎を考ふるに、自然の影響より來るものと、人事の關係より生ずるものとあるべきは言を竢たず、今自然の影響を觀るに國土の小、地形の小、山川の小、其主因たるものなり、然れば余は既往に溯りて其原因を尋ぬるよりも、將來に向て之を改變する方法を講ずるを目下の急務と考ふるなり、大國的氣風の養成は教育に依らざるべからざるは勿論なるも、學校教育の外に種々の方面より世界的思想、宇宙的觀念を注入し、之をして日本人が祖先以來遺傳し來れる忠君愛國の氣の中に包合せしめざるべからず、其方法に就きては余の考ふる所によるに、學問上においては世界地理、世界歷史に通達せしむる最も効力あるべしと信ず、之に次ぐに天文學、哲學の如き亦遠大の思想を養成するに必ず其功あるべし、其次は美術の改良なり、從來の日本美術は小國的氣質を養成するに適するも、大國的氣象を鼓舞するに適せず、故に之を改良して音樂も絵畫も雄壯活潑宏大ならしめざるべからず、其他室内の裝飾品なども人の日夜接觸するものなれば、殊更に注意を要するなり、床の間の置物に地球儀を用ひ掛物には世界地圖を掛け、寢食の間之を注視せしむる樣にすれば必ず其効果あるべし、又額面にも『萬事如夢』『人生如浮雲』『富貴非吾願』の如き遁世的文字を題せずして、『萬事非夢』『人生是戰場』『富貴吾所願』の如き進取的文字を掲ぐべし、又掛物にも『蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身』

の如き句を用ひずして、『陽氣發處金石亦透精神一到何事不成』の如き語を擇むべし、余は嘗て古人の詩にて厭世的の趣味を含むものは之を改作すべしと論じたることあり、例へば最も人口に膾炙せる『人世五十愧無功、花木春過夏已中、滿室蒼蠅拂難去、起尋禪榻臥清風』の如きは、余は『人生五十可成功、遮莫春過夏已中、滿室蒼蠅拂難去、好敲北極送寒風』の如き意味に改作せんとす、詩や歌の改良は人の氣風を改變するに其効力最も多きものなり、其他旅行野遊の時には成るべく高山に登り或は大海に浮びて世界の廣濶なるを見、明月の夜に當りては天空を望みて宇内の無際なるを思ふが如き、皆思想を濶大にするの一助となるべし唯憂ふべきは日本人の癖として架空の理想を抱きて、直ちに之に達せんとするにあり、精神一到何事不成を聞きて一時の間は精神一到するも、一時の後は精神を他に轉ずる風あり、是れ本邦人の大事業を大成することの難き所以なり、故に余が所謂遠大の思想を養成すべしとは、決して架空の想像を云ふにあらず、愈々遠大の思想を養成するに於ては、遠大の目的を定めて之に達するに遠大の方法を取るを云ふなり、而して遠大の方法を取るとは急速に失せず、徐々として幾多の歳月を經、幾多の艱難を排して進行するを云ふ、此の如きは眞に遠大の思想を有する人にあらざれば遂行すること能はざるなり、(拔萃)

六、七、八の三ヶ月はどの雜誌でも非常に賣行の悪い時て、其發行部數も著しく減少するとの事である、或る大きな社の如きは雜誌の發行部數を何れも二割五分程減ずるとまで聞て居る。然るに吾々の方の雜誌はこんなつらい目を見ず。何時も仝一の律を保て行けるのは全く我江湖愛讀者諸氏のお蔭と思ふ。次號の世に出づる頃は清涼の氣漸く天の一方より動き初めて、讀書には此上もなき好時節になる。吾人は益々材料を精選し、内容を豐富にして讀者諸君の眷遇に酬へんと思ふ。願はくは其心して次號の出るを俟て居て呉れ給へ。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▶綠蔭の好伴侶◀

新小説

第十一年第八巻（八月一日發行一冊）

定價 一冊廿五錢郵稅貳錢五厘●六冊前金郵稅共一圓五十九錢●郵券代用一割增

▲避暑地案内 逗子より…泉鏡花●青綠山水…本多嘯月●嵐氣水韵…太田宙花●松雫兩三點…後藤宙外●箱根八里…前田曙山●旅立控帳…山岸荷葉

▶小説◀
女塑像家……小栗風葉
サンデーナイト……田村松魚
歳……三島霜川
雪あられ……増田合川

▶思潮◀
金子筑水
戸川秋骨
覺戀坊

▶家庭◀
肺結核の豫防 樋口芳太郎
農家と平生 某夫人

●苦熱閑談 宙外 ▲ピネロの「第二タンカレー夫人」…島村抱月
●譚叢……井上竹二郎、阪野積善、小常磐夫人

▶藝苑◀
伊原青々園
山岸荷葉
太田宙花
岡鬼太郎

▶雜錄◀
信綱、月郊
松葉、斬雲
勿來、活東
孤島、見山

●美術粧裝品……流行子
●有松紋……嘯月
●時報、懸賞、吟詠



江見水蔭氏著
河村清雄氏書

水蔭氏特得の筆、奇怪なる鐘乳洞の探險は更に奇怪なる事實を生んで變幻百出、篤學究理の學士、豪快磊々の壯士、花の如き婦人、惡むべき妖巫の出現等、風雷鼓動し來る此「新空氣」の一編は、蓋し快絶の著作といふべし、

●實價金六十錢
郵稅金八錢

發兌 東京日本橋 春陽堂

東京春陽堂新刊二小說



山岸荷葉氏著
鰭崎英朋氏畫

一個薄命の美人を捉へ現代商家の家庭に尙存する江戸生粋の思想を表現せるもの、實に是れ荷葉氏獨得の觀察と非凡の才筆に寄らずして何ぞ乞ふ一愛讀を賜へ

定價五十五錢
郵稅八錢

春陽堂發兌
東京日本橋



雪雷氏譯
（全二冊）
村上天流氏久保田米齋氏畫

●讀むべき人
●革命的趣味を有する人は讀むべし
●義氣を養はんとする人は讀むべし
●俠骨を磨かんとする人は讀むべし
▲讀むべからざる人
▲星と菫に醉ふ人は讀む可からず
▲肝玉の少さき人は讀む可からず
▲腦味噌の乏しき人は讀む可からず

前後各四十五錢●郵稅各八錢



生効

（上）

村山鳥逕

投機質のある奴とは知らずに、不圖友達の金の證文に印を押した祟りが身に及んで、一時の大窮命、四谷の左門町の途子裏に建付の悪い破屋を借りて、一昨年の秋迄足掛二年を逼塞して居た。前は二階建長屋の裏になつて居るので、肌抜の女房襁褓の滿艦飾さては戸板圍の行水などが、杉垣根の繁る夏でさへ透けて見える淺間しさに、初の中は頗る身の零落を儚んだが、後には却て下層の状態を知る好機と觀じて彼等と接近するやうに務めた。

長屋の表に廻つて見ると、三間立で右の端が車屋左は駄菓子屋で、中央は提灯の籤引が住んで居る。自分は軒別に標札を讀んで歩くのが癖で、引越立に此籤引の姓名は堀内庄兵衛と名ける事を知つた。標

札は上手な御家流で書いてある。朝は冬でも六時頃から夜は九時頃迄無間断にづう〳〵と一種特別に鋏を引く音が響いて氣にし初めると何も出來ない位であるが、又其勤勉に奨まされて睡い目が冴える事もあつた。それに爺の鋏を引く傍では、妻の婆さんが眞鍮の耳掛眼鏡を掛けて、糊の刷子を片手に提灯を貼つて居る。何時通つて見ても其通りである。

自分は其當時隨分窮して了つて、或る雜誌の飜譯欄を擔當して居たのが其社の瓦解と共に自然扶持離れの姿、さあ什麼にも恁にも足搔が取れず、八月の晦日などは什麼して越さうかと苦心慘澹して、三十日の夕方から曾て金策を賴んで置いた芝の三田へ訪ねて行て見ると、生憎それが留守と來たので、もう落膽して氣も冥入り、死と手を引かれて居るやうな思で蹌踉歸て來た。蟇口の裡には僅五錢の白銅一枚と支那の二十錢銀貨一枚とが在るばかり。

酷く蒸暑い晩で、西から北に掛けて眞暗に曇つて、時々稻妻が凄じく光る、路次口迄自分が汗だらけになつて歸つて來たのは恰度九時半頃であつたらう。意氣沮喪しては其處に堀內老夫婦が陋い椽臺を出して凉んで居るのも知らずに、づん〳〵途子に入りかけた。

「裏の先生凉んで御出なさらんかい。」

と老爺に呼掛けられて氣がついて、強ひて笑顏を造りながら、自分は二人の側に行くと。

「マア御掛けなさいましな。」と老婆は老爺の方に寄つて座を造りながら。

「今日はどうも暑いでは御座います、夜に成つても、御覽じやい、木の葉がパラッともしません、なん

といふ暑いんてしやう。」

「ごろんぢやい」が妙に自分の死んだやうに沮喪した心に紋波を畫いた。

「本當に暑いですね。」自分は立ちながら麥藁帽子を團扇に使て居ると、老婆さんは老爺の手にあつた團扇を引たくつて自分の前に差出しながら。

「まあ御掛けなさい此處は家の中より少しは凌ぎ克う御座んすよ。」

「青天井といふんだから此上の事は無い。」老爺は齒の拔けた口を開いて只譯もなく笑つた。

「難有う、では少時御邪魔するとしやうか。」自分は腰を掛て、袂から山櫻の袋を出して中を見ると一本も無いので、袋をもみくちやにして地に擲き付けたのを見て、老婆は雁首の凹んだ長煙管と挽物細工の煙草入を引よせて。

「煙草は此處に在りますよ、お喫りなさいましな。」實は少々穢らしかつたから、喫まなかつた。

「何處迄行つて御出なさつた、エ、三田ですつて、それは大變だ、成程電車でね、あ、ですかい、いや便利になりましたな。家の大い野郎は、それ何とかいふ……、此暑いのに冬の洋服を着て、前の處へつッ立つて居る、ウムその運轉手で。」

「へえ、貴方々に御子さんは無いんだと思ひましたが御有なさるんですか。初て知りましたよ。」

「あるにもねへにも五人ありまさあ、皆成らず者で困りますのさ。」と言ひながら、老婆は煙草を例の長煙管につめて、俯向いて吸付けると、街燈の光が腦天の赤く禿げた處に反射氣味なので、可笑しく感じ

て居ると、吸口を洗ひ洒した十字格子の浴衣の袖で拭いて。

「まあ一服御喫んなさい。」

「難有う頂戴しまじやう。」元の自分なら先で遠慮して這麼御報捨には預らぬのであるが、今は山櫻を喫み、山桐の下駄を穿き、山の入つたペラ〳〵羽織を着て居る身分、穢らしいなど〻は勿體ないと思ひ直して二服頂戴した。

「そんなに御子さんが御在りなんですか。」

爺は一杯飲んだ顔で目を瞑り、手拭て仕立てた浴衣の腕をまくつて、片膝は抱き片足は下に貧乏ゆるぎをして居つたが、ぱつと眼を開いて。

「五人が五人双つて馬鹿でしてな。」

「でも御前さん可愛さうに金藏は馬鹿では無いやね、今朝も爲替を送つて寄越したらう、あれは正銘な人間だよ。」

「彼奴だつて馬鹿では無いかも知れねいが、利巧の方ではあるまい。」

「でも人樣の前で五人共馬鹿だつて……。」

「まあい〻やな、て先生、よく世間では生効の無い奴といひますが、俺位つまらないものはないとつぐ〳〵此頃考へ込んぢめいました、職が提灯のひご引さ、つまらない商賣でさあ、ようがすか、全て死て居るやうなものだ、朝から晩まで竹を泣かせて喜んで居るんでさあ、喜びもしませんがね、是をしな

ければ飯が喫へねえてんだからやりきれねえ、全體是でも根からの籤引では無いんて、元は是でも、是でも元は……。」

「およしなねえ老爺さん、私が何か言ふとはすぐ留る癖に。」

「まあ可いていふ事よ、だが元の事は、然うだ、いふめいよ。」

自分に訊けよと促す語氣であつたが、自分に取ては、彼の元が旗本であらうと大名であらうと、提灯の籤引をする今の彼に一毫の重も加へぬのを知つて居るので、敢て訊かずに、只其子供達の上を訊いて見たかつた、それは彼等の現在に大關係のある事柄であるから。

「五人の御子さんは今何處に御出です?」煙草が思ひの外に上物であるので、思はず煙草入から手ごみにしながら訊いた。

「皆方々に散つて居ますんですよ。」と老婆はいひ掛けて、折柄其處を通り掛つた白粉の濃い島田に結つた娘と二言ばかり話をして、又此方に向ひ。

「總領が今老爺さんのいひましたやうに電車の切符切をして此近所の……。」

「切符切ではない、婆さんお前何にも知らない癖に」

「おやく然うかねえ、私は又切符切かと思つたが」

「運轉手だあな。」團扇を取つて足の蚊を追ふ。

「其運轉手とかで、其下が是も男で砲兵工廠に出て居ますんですよ。」

「其方々とご一所にお出ては無いんですね。」
「えい〳〵總領は新宿の北裏に住んで居ますし、次のが小石川表町に少い家を借りましてね。本當なら皆一處に居ればいゝですが。」
「成程それから二人目は女でしやう。」
「貴方能く御存知ですね。」
「どうも然うだらうと思つたから。」
「先生は占やさんより邁いや」讃辭大に當らずと腹の中で恐縮した。
「御嫁に御出てしたか。」
「矢張とう〳〵當らねえ」爺は笑つた。
「ては御奉公ですか。」
「然うても無いんですよ。」
「あら御前さん、あれだつて、矢張奉公ですわね。」
「然うだなあ、だが先生の耳には入れたく無いやな。」
「なに御前さん、人に誑れたのだから仕方が無いやね。」
「それは然うだ。實は先生その烏森に居るんでさあ、藝者に成つてね、えい藝者ですよ。」
何でも打撒けて了へといふ調子で爺は言つた。事實は差ふさうだが、自分には藝者といふと、何とな

しに美しい女のみだと思はれて、這麼婆爺の娘に、那樣美しいのが生れやう筈が無いと怪しみながら、二人の顔を熟々見ると、今は單純な梅干てあるが、昔は二人共仲々美しかつただらうと思はれる面影を殘して居る。

「藝者にてすか、其れはどうも」其れはどうもと言はざるを得ないのてあつた。「それはどうでも良いとして、それから先のは？」

「其次が今の金藏といふ奴て、此奴が先づ人間並に今ては茨城縣の役人をして居ます、小遣だなんて五圓六圓送つて寄越すのは此奴ばかりださあ。だがさ先生私程不仕合ものはあるまいぢやありませんか、此棟割長屋に住んて此歳、もう六十四になりますがね、此歳になるまて朝夕稼いて、婆は提燈を張つてさ。何？婆の年てすかいコウッとおい何歳だつたつけなお前は。」

「お前さんも忘れつぽいね、恰度五ちがいぢやあないかお前さんと」

「すると五十九てすな」

「さうて御座いますよ辰てすからね。」

「先生なんざあ、辰だなんていつても御判りになるものか、それてねえ先生子供はあつてもベラ棒ばかりて何の役にも立たないのてしやう。俺は此年になる迄一日ても樂をしたと思つた事はありません、這麼事なら生れない方が增な位てさあ。」

「そんな事を云へば私なんぞは何といつたら可いだらう、少い内から人中て育つてお前さんと一緒にな

つてからは貧乏ばかりさ。——今では這麼老爺さんてすが、元は仲々浮氣者でしてね、どの位苦勞したか知れやしません、それて擧句の果が提灯の内職てもしないと口が干るといふ世渡りでしやう、もう世の中にも厭々しちまいましたよ。」

「世に厭々したのは貴方々ばかりてはありませんよ。」

自分は今迄少焉忘れて居た自分の身の貧困を思ひ出しながら。

「時々は私だつて死んで了つた方が好いと思ふ時もありますよ。」

「先生かかね。」爺は目を圓くしながら「今の若さてそんな心細い事を御言ひなすつたら、私なんかは如何しましやうかい。」

「ても貴方々は大きくなつた御子さんがあるしさ……。」

「さそれがてがす、此年寄をいたぶるつていふんだから無い方が増な位のもんだ、兎に角世の中は厭てがすなあ。」

「そんなに力を落さないでお在なさい、今に良い事もあるてしやう。」

是より外に言ふ言葉が無かつた。

其處へ車屋の亭主が遣て來たので、話は其限になつて了ひ、自分は又其亭主が虫の好かぬ處から、直ぐ歸つて來た、而して其夜は遲くまで色々世の中の酸苦といふ事を考へて、成程あの老夫婦などは自身のいふ通り、生きて何の効も無い人間だと氣の毒になつて、最後は自分迄が何の爲に生きて居るのが、

死んだ方が増てはあるまいかと迄思ひ込んで寝て了つた。

（下）

自分は其後友人に助けられて、今の位置に座つた。即ち或中學の教師を勤めて傍農商務省の囑托翻譯をやつて居る。住家も千駄谷で敷金二月と家賃を十圓を出して居る。左門町の時と比べて見ると生計の樂になつた事は、店借りと札差程の差である。今日は月の廿七日學校の月給日で、四十五圓入の袋を歸りしなに會計から渡されて其を内衣兜に納れ、紙入の中には昨日貰つた翻譯の原稿料三十圓を手付かずに納れて持て居る。神田橋から新宿行の街鐵の電車に乗つたのは午後三時迄て、彼岸過の秋の日はもう親しい暖さを腰かけた後からあびせかけるのである。

自分は七十五圓を懐中して居るのだぞと思ふと、車中で一番の富豪は俺だといふやうに何と無く肩身が廣く感ぜられる、、、さもしいものて、人の機嫌は要するに懐合の寒暖に據るものだ。

動きます、チン／＼。今自分と共に乗つた女學生が前に立て居たが、車の動き出した拍子に跪いて、吾妻下駄で自分の靴をいやといふ程痛く踏んだが、知らぬ顔をして居る。錢の無い時なら、失禮な女だと、顔を睨める位はやるのであるが、今日は高尚な復讎などゝ云ふ餘裕が心にあつて女學生には席を讓らぬと云ふ平素の主張を擲つて、ツと立上り。

「御掛けなさい此處へ。」

「どうも・・・・」どうもが什麼したんだといひ度いのを我慢して力革にぶる吊りながら、運轉手堀内實篤

車掌北野左門といふ名前が掲げてある邊を見た、すると左門と堀内で三年前の夏の夜を不圖思ひ出した。

左門町に居た頃の生活の困難を思ひ出し、續いて堀内老夫婦が、其子供等の不肖の爲に籤を引き提灯を張つて、日夕勞働して居ながら、自分では生効の無い人間、何も是ぞといふ事業も爲ずに死んで了ふものであると、一夕述懐した事から、自分もそれに釣込まれて、世の中が可厭に成つた事を思ひ出して居ると、馳せて居た電車が急に停つて、自分は蹌踉として、今度は前に座を讓つた女學生の吾妻下駄の上を、靴の踵で蹈んだ。𤸎痛かつたらうが謝罪つたり禮を言つたりせぬのが此女の主義と識つて見れば、紳士として貴女の意を滿すのが禮であるから、先方が先刻やつたやうに、「どうも」と言つたぎり、如何に先方が可怖い顏をしても「御免なさい」とは言はずに居た。さて何が故に急に車が停まつたのかと見ると、此電車が風を切つて行く側を、米屋の子僧が歩いて行つたのに、背後から來た自轉車が衝突つて、小僧を線路に仆したのである。若運轉手が慣れない下手な男であつたら、小僧の五體は微塵に成つて居た處を、危く助かつたてある。其他を助けた名譽ある運轉手の名は何と云ふのかと、再び姓名札を見ると、堀内實策。其處で不圖思ひ出したのは、此運轉手は例の籤引の總領息子ではあるまいかといふ事である。若し然うであれば、彼等夫婦は今現に人の生命を助けた勳爵士を生んだ榮譽ある親達と謂はねばならぬ。若し此人が彼等の子で無くば、自分が目劇はしない迄て、必然何處かて幾度か這麼場合に遭遇し、熟練なる運轉手として人一人の生命を助けて居るに違ない。此事一ても彼等老夫婦が生効なしとの嘆聲を沮むに足るのである。恁謂ふ意味からいへば、彼等の次男が砲

兵工廠の職工をして居るといふのも、依様大な事業を世に行ふ人を生んだといふ事になる。其次男なる男が手を加へた兵器か彈丸か火藥かを用ゐて、日本は露國に勝つた。其事一つでも老夫婦が生劾ないなどゝ、什麼して言はれやうかと思ふと、曾てある便宜て參觀した砲兵工廠の小銃製造場の内部が心に浮んて來て、大きな萬力の前に職衣を着て、鑢を掛て居る男がその次男だといふやうに思はれて、チッと顏を見て居ると、目付鼻付が爺さんに似て、猫背の倶合が婆さんにそつくりだと、其顏や姿までが明々と空に見えるのである。

「あら女將さん何方まで？」となまめかし聲。

「今日は築地に集會が有つてね。」一種寂のある嗄れ聲てそれに答へた。

自分は工場の想像を破られて、其の聲する方に目を注ぐと、待合の女將らしい四十前後の櫛巻にした眼の飛出したやうにギヨリとした女が、腰を掛けて居る前に、今がた乘つたらしい茶屋女といふ風俗の銀杏返が、白い手を肱迄出して、力革に縋りながら、話し合つて居るのであつた。

彼等を見ると同時に堀内庄兵衞の娘が烏森に藝者をして居るといつた事を思ひ浮べる。

生劾の無いといふ老夫婦の娘に、藝者が生れて居る。自分は藝者に對する趣味を知らないから、其功徳を茲に演べる事は出來難いが、徹頭徹尾惡いものが世に生存する理由が無い、昔流行つた雪中梅や花間鶯中の俠藝者の如く、志士を補ける迄に行かずとも、大根役者に引幕を贈る御多分に漏れないて、其藝を奬勵する位の役には立つて居るのてあらう。又一歩踏込て考へれば、男といふ動物の　　、いや止

めやう其處迄は士君子の考へては成らない事だ。然し左に右社會に必要ある物件を老夫婦は生みなしたのだ。何で彼等が生効ない譯があらうか。

「麹町三丁目、お降りの方は御座いませんか。」

「鳥渡降ろして頂戴な。」茶屋女は降りて行つた。其跡を見るともなく見送ると、停留場の傍の提灯屋の軒に、油を干す爲に吊してある大小の提灯が、秋の西日を受けて光り氣味に搖いて居るのが目に入つた。

堀内の老婆さんは提灯を貼つて居た。あの提灯の中には、あの婆さんが貼つたのがあるかも知れない。或は那等の中に堀内庄兵衞殿の引いた籤が用ゐられてあるかも知れない。

提灯の籤を引き提灯張の內職といへば、成程有るか無きかの充らない仕事のやうに思はれるけれども、其提灯の社會に用ある德を思へば、どうして〳〵、籤を引き提灯を貼る人は、生効の無い處か、國家を料理する大官、大學を敎へる先生道を說く敎法師と、些の徑庭が無い尊い高い譽ある職を行つて居るのである。

各自に紋と屋號の付いた弓張を持つて、少くも七八人多きは數十人一團となつて、軒別に、

「今日は遠路の處御苦勞樣で御座います、態と御禮に……。」

と言つて歩くのは町內に葬式の有つた晩の光景である。其時彼處の何誰々々は義理が固いと言はれ、此許の某は義理知らずだと思はれるのは、一に提灯が擔つて居るのである。同樣に町內の婚禮には伊勢

屋てさへも高張を軒にぶらさげて義理を立てる。一張の提灯は社會を如何に圓活に運轉させるか。

「紙屋の旦那男の兒てすぜ。」拍子木を片手に提灯をさしつけて、其處に泣て居る赤兒を見て、定番の菅碌頭巾は、連の町内の當番の火事頭巾に、火の番と赤く書いた提灯を向けて言つた。

「男が、辰さん？　どれ見せねえ、成程能く肥つた可愛い男だ。這麼兒を棄てるとはよく〳〵だらう。人が來たものだから泣止みやあがつた。あら笑ふぜ辰さん。徹夜て這麼處に投つて置かれちや凍死んぢまうは。可哀さうに。」

「左に右番まで持つて行つて置かう。」

「ウム、事に寄つたら俺が引取つても可いや、家の子供が死んで間もないから、嬶の乳は未だあがるめい。左に右連れ行かう、俺が抱いて行かあ。ソレ、ドッコイショ、泣くな〳〵好い兒だ。」

棄兒は拾はれた。其先は什麼なるか知らないとして、這麼場合が若しあれば、提灯の功德は凍死すべかりし兒を救うたといつて宜からう、這麼な場合の其提灯が、若し堀内老夫婦の手に據つて成されたものであれば、老夫婦は人一人を助けたものと云つて差支ない。屹度這麼場合があつたらう。イヤ何て生効ない生活といふ事は出來やうか。

「お前さん御米は如何したものだらうね、一昨日買つたのは先刻たいて了つて、もう一粒もありはしないよ。」

「そいつは困つたな、八の野郎の處へも、もうさう〳〵は行かれず、此天氣模樣ちやあ、明日も怪しい

から、鶴嘴を擔ぐ譯にも行くめい、エイ仕方がない此奴を打殺せ。」着て居た袢纏を脱いて
「之を持つて角へ行つて來いや。」
「でもお前さん是は親方のでは無いかい、直に困るよ。」
「だつて食はずにも居られめえ、可いッて事よ。」
といつて居る處へ何々警察署と書た提灯を提げて、小使が門口に立つて。
「警察から呼出してす。」と言つて一枚の紙片を投込んで行つた。
「何に呼出し、俺は何にも惡い事なんぞはしねいぜ、どれ見せや。」
女房は紙片を男に渡すと、少焉それを見て居た男は、矢庭に跳上つて、今脱いだ袢纏を引掛けて飛出しさうとする、女房は喫驚して。
「まあ何所へ行かうてんでい此人は、少し氣を落付けて靜におしよ。」
「警察へ行くんだ、そして金を取つて來るんだい。」
「串戯お言ひなね、警察は此頃は餘程柔しくなつたが、貧乏人にたゞお金をくれる程に悠長ぢやあるまいよ。」
「莫迦、之を見ろい。」
「私の明盲はお前だつて知つて居さうなもんだね、ひと莫迦も無いもんだ。」
「ウム然うだな、よしか、そんなら言つて聽かせてやらあ、先一昨年の秋、恰度今頃俺が市谷で十兩拾

つた事があつたらう。」

「あ、それが什麽したんだい。那の時だつてさうさ、何も御上へ出す事は無い、何時も持たない提灯を持つて行つた其御蔭で拾つて見れば、天から授つたやうなものなのをお前さん餘り馬鹿正直だものだから届けて了つて....。」

「さあ其拾兩だい其拾兩だい、それが今俺の手に入つて來るんだから難有いぢやあねえか、手前肴屋へ行つて來な。」

「莫迦も息み〳〵お言ひよ、今頃其が返つて來てたまるもんかね。」

「あゝいふ間抜だから仕様が無い、それは御上の規則で三年立つて落し主が知れなきや拾つたものになるのだ、手前知るめい那様事は。」

「あら眞個かい市さん。」

「急に市ッさんと御出なすつた。」

「串戯ぬけて眞個かい。」

「本當にも何にも、今取つて來て見せらあ、何時でも取りに來いと書いてあるからな。」

市と言ふ亭主は出て行つた、其晩は飢に泣くべかりし夫婦子供が、腹一杯に飽いて珍らしく好い夢を見たらう。

若し這麽場合があつたら、提灯の功德一家を救つたと云はざるを得ぬ、暗の中に十圓を見出す程、人

の目は鋭いものでは無いから。

其提灯が堀内老夫婦の手に掛つたものであつたら、老夫婦は一家を救つたといつても過言ではあるまい。

自分は何時の間にか色々獨りて右の樣な事を考へながら、追分迄來て居たのである。

「新宿追分御降りの方は御座いませんか。」

「お降りるよ」

自分は降りやうとして不圖内衣兜を搜ると。

「オヤ！」紙入が無い、紙袋の方は無事だつた。

「どうかなさいましたか。」

「いや紙入をやられた。」

「掏奴にですか。」

「多分然うだらう。」と謂ふと、こそ〳〵と降り掛ける二人連の客がある。車掌は二人を遮つて。

「少しお待ち下さい。」

「何故だね。」一人が言つた。

「此方が今掏奴に物を取られたので、車中を査べなければなりません。」

言ふ内に巡査が通り掛つたので、車掌が呼止めて巡査に其趣を話したから、目顔て降りかけた客が

怪しいといふ風を諷した。巡査は二人と自分とを交番に伴つて、二人を査べると案の定彼等の處爲であつた。而して紙入は自分の手に歸つた。

巡査に禮を述べて立去る時に、其姓名を訊いて見ると、新宿署勤務巡査堀内金藏！　例の堀内老夫婦の四番目の子で茨城に行つて居たのが歸京して、巡査となつて居たのであつた。

生効の無いといふ老夫婦は、現在自分の爲にも此恩人を生んで居たのであつた。

（了）

次號の本欄には伊藤政子女史の新作「船室」を掲載すべし。其江戸的趣味に饒かなる筆を以て、女史獨得の奇警なる觀察を叙す。面白きこと請合也。尙旅行中の爲め本號に連載する能はざりし內田魯庵氏の「二人畫工」も併せ掲げらるべく、又吉野臥城氏の長篇の新體詩等材料最も豐富也。

歌

尾上柴舟選

○　吉岡夕舟

鐵線花時計草咲く夏の野を螢のごとくわれはさまよふ

松の風草庵にたつ尼ぎみの右手の方に月こそのぼれ

美しき鳥栖む森のあけぼのを雲こそなびけ金色にして

雨ふるや大湖のうへは千絃の立琴のごと美しきかな

雨雲は地に大戰をいどむごと風を喚ぶらむ世のどよもしや

なにとなう涙ながれぬ秋風の人が琴ひく簾れすがたに

朝すゞや不動まゐりの女達(をなごたち)舟して語る水のふかがは

君おもへば君はましろの翅して我胸に來ぬ鳥の如くも

石切の音はとぎれて夏山の晝のしゞまをなくほとゝぎす

君負ひて隱れ家探がす野の夕蕭々として白き風ふく

すゞ風や妓王寺ちかき乳母が家に眉そりをれば閑古鳥なく

青海原白鷗ねぶるかたちして鋸山にはつ夏くもす

○　神田文子

月にてる波のしづくを涙とも知らず流れの末を君ゆく

小枕の紙あたらしき朝心地憂世がこちは神にはづかし

今日いては十年かへらぬ我家のやみにうきたり白木蓮は

釣床のうつゝに聞くやから山の親子雀の物語より

春秋のゆきゝの道に生れたる情いつはるからおもて人

この宵のおもひねいかゞたまと靈通ふとあるを君など問はぬ

春の夜を涙にほてる女なり吹かぬ嵐に花もちれちれ

情あつき御親にえたる手やあしやひとりのものにあらじを君よ(病みたる友に)

花さほふ春のさかえの折からや世によき君の神となりにき(人に手向くるとて)

手をそへて歌一ふしに小半日小琴をしふる五月雨まどや

二度と死なぬものなり憂かるとも過ぐせ三年を虎ふす野にも

野に咲くも神のまな子の數なれば花に一歩はとめてすぎませ

○ 小川眞清

五月雨や朝の川戸に小笠して米とぐ人に啼く水鷄かな

初夏や舟して君が里をさす水の月夜を啼くほととぎす

潮のはての幽宮(かくれのみや)の姫宮にはぐゝまれたる寵兒が鴎

合掌の袖抱(た)くごときかたちしてゆうべ耕罌粟の花しぼみたり

夜の神は衣桁のかげにかくれゐて夢うつくしき君覗くらむ

池におつる水音まぜてあづまやのおもひ寢にきく蓮葉の雨

五月雨や栗の花散る夕の門(と)をとやへといそぐあひるの群よ

○ 佐久間霧江

灘百里君が船やる風の手は島の一人が祈りとおぼせ

つれ〳〵を鐘がもてくる落葉の十五かぞへて人待つ野かな

繚亂の花野に惜しき孤獨なり夢の蝴蝶よ人呼び來ずや

○　塚田夕波

今更にかごとがましう憂き人の別れと云ふに何の涙や

病む肩をぬるうも吹きぬ夕風は君の御息の交りてあらむ

花ちりて鐘は鳴る〳〵魂や來とかへり見らるゝ夜の善光寺

○　秋山琴泉

裏山の藪の狐も來て語れ溫泉の宿のつれ〳〵の宵

夕鐘は木立くゞりてひゞき來ぬ羊追ふ子の肩をすべりて

名負はさば此日の日記は夢の卷うつゝの夢とただ記すべき

○　上村萩江

山羊の乳のしたゝりうけて牧の草小き花しぬおぼつかなげに

まつかぜはすゞしき香してすだれしてこと彈くひとの額吹きにけり

野の家や夜語つきてうたゝねのひとのゆめ路にさす夏のつき

灯して苑のはな見るおんあねのたもとめぐれるよきむしの聲

○　香川里霞

濃綠の上に雲這ふ大野原あゝ又も鳴く山杜宇

思ふこととしげき我かな野に小さき羽蟲も幸とうらやむまでに

○　谷尾水紫

この悶はかる器を神に乞はむ湧く熱き血と高き響と

我が負へる心の奧の秘め籠に拾ひぞ入れむ汝が落葉髮

○

小谷寒鴉

力なく身はわくらはと秋に散る亂れ散る日を思ひぬ春に

いづ方をわが行く方と丘の上に人往きやらず日は暮れにけり

いつしかに又歩み來て故しらず涙こぼるゝ石のほとりや

ふたゝびは見もかへらじと心強く思すて來し方にぞ雲は

○

村田愛美

旅人は笠緒ぬらして往てけり君とうたなき春雨の宿

魔かも吐く吐息のごとも何者かわれを呼ぶなり野の深闇に

森かげや紅白まじる夏花は風に招ぎぬ十騎の人を

白鳥はきさらぎ海のあさあけをしづかに鳴きぬ磯の少女に

山の井やさびしきまゝにふと息をもらせば栗のさむうこぼれぬ

○

曾根朧月

蟲ぼしやしまひ忘れしふる衣に思ひもうけぬ歌なりにけり（以下春藻詠草の中）

盂蘭盆會ならはぬ口に普門品なかば誦しては小まどの月を

よる蟲に命てふものさとりぬとひとりうなづく灯火の窓

○

小宮山春子

森の日はあえかの窓の君うつす湖水の色の淺黃にてりて

丘の草に寢れば野末の塔の尖と脊くらべしけり釣鐘草よ

白鳥は花藻のなかの流れ木の上にならびぬ身つくろひして

花合歡は稚子齒の君にそとちりぬ岸はなれゆく湖水の舟の

ふるさとや金魚買うと文月はゆきしをおもふ夜
町へ

○ 廣浦藻花

うす色のあけぼのの雲のあかるさに進さきにけり
小さき音して

よべ切りし杉の幹よりひやゝかの色して霧は山
つゝみけり

障子ごしに蟲きく夜なりふけたれどまた來ぬ君
に灯をあかめゝつゝ

うす雲のながるゝ日なりそよかぜは蚊帳つり草
に淋しう吹きて

應募和歌は東京市小石川區原町卅五番地尾上柴舟宛の事

土用

繞石選

青桐に夜雨嬉しき土用かな　萍也
朝月に起きて蘭を刈る土用かな　同
風蘭の花なつかしむ土用かな　萍也
鳴りやまぬ土用の海や雲の峰　同
籠城の水餘りある土用かな　同
土用休み故山の海に親しみぬ　蕪竿
河内から木綿賣來る土用かな　桃村
鳶高く舞ふや土用の朝の空　四綠
歸省して灸下ろしたる土用かな　小草
田どころに雨降り足りて土用哉　鳳梧桐
葛水や土用に入りて日久し　拘骨
濱寺に來る土用の灸師かな　鼓雲
新らしき井によき水土用かな　鐵香
鯉こくのうすきも土用料理かな　松濤樓
漢法の草干す庭や土用中　寒骨

樂水氏の鴻臚舘御用少き土用かな、梅瘦氏の避暑の客土用殿なさかせけり、秋江氏の遺稿編む土用休暇や山の寺、を始とし、磨劍、掬水、竹馬、方外、球櫻、水紫、冷雨、松露、〔諸君の投吟中採らんとして採るを得ざりし句多かりしは遺憾なり

募集課題
天の川　八月十五日〆切
案山子　九月十五日〆切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事

川柳（題隨意）

岡田三面子選

駈落の相談きまる五ッ月目　白雨
一と度は臍を固むる大晦日　同
學問に鍍金する迄世は進み　同
一と抱あれど柳とノロいやつ　同
桃源に眠ると見れば爪をとぎ　同
要するにと來れば演説しまい也　血達磨
人爲的陶汰は凄きかぼちや面　同
木戸郎は料理の殘り下女へ呉れ　同
傘なくて外出ならず不善をし　吾川
晩婚の利を說き實は來者がなし　同
弟は公債となりて歸つて來　同
電話口留守といふのが主人なり　頓智奇
入歯落して生欠伸オジヤンにし　同
人の來る樣子て急に本を明け　同
子細ありて其弟を可愛がり　同

流盼や亭主脂下る處敵は本能寺　同
其蛙道風を馬鹿と思つて居　丁東
蓮の葉の裏から蛙面を出し　同
豆腐ーの聲姦しく暮れて行く　同
句は成ず硯にやたら假名を書き　同
試驗場三度顏色變るなり　同
掃除した序に團扇出して置き　同
助六は產婦のような鉢卷し　同

應募川柳は東京市本郷區西片町十番地反省社宛の事

岡田三面子近來多忙の爲め今回限りにて川柳選者の任を辭せられたるは吾人の讀者と共に遺憾とする所也。然し次號發行迄には必ず適當の後任者を依賴すべければ。應募者は從來の通りドシ／＼御投稿せられたし。

法官獨立の侵害

XY生

日本辯護士協會の名義を以て、昨秋九月の燒打事件に付、人民を殺傷したる警察官を十二分に檢擧せざりしを以て、檢察官の不當行爲なりとし、公開狀を以て激しく當時の檢察官たりし人々を攻擊し、勸むるに辭職を以てしたるものあり、而して都鄙新聞紙の多數また辯護士協會の主張を助くるもの丶如し

内務大臣官舍の燒打あるや、警察官の人民を殺傷したるもの一二に止まらず、公衆が其の凶暴に切齒するや實に人情として已む可らざる也、然れども之に對する檢察官の進退を議するは、是れ感情問題にあらずして純理問題也、感情に走らずして飽まで冷靜に理義を剖析せざる可らず。

但し吾人は遡りて當時の檢察官の檢擧如何を論評せんと欲するものに非ず、唯だ其の操守を論じ進退を議する辯護士協會の主張其のものが、果して司法官の獨立を侵犯するの虞なきや否やを疑ふのみ

檢察官を以て純然たる司法官とする、不當なるべし、然れども其の獨立を尊重するの必要なる、幾んど判事と異ならず、檢察官の獨立を尊重するは、是れ延きて判事の獨立を完全にする所以なれば也

語を換へていへば、若し或る勢力を以て檢察官を左右せん乎、此の勢力に對して判事も亦多少屈折する所なきを保せず、少くも此の勢力は判事を威迫するもの也、即司法官の獨立を侵犯する者なりとせざる可らず

辯護士協會が多數者の勢力を擁し、公開狀を以て檢察官を攻擊し、其の文中交ゆるに諸種のセンセーショ

ナル語句を以てし、而して背後に多數新聞紙と、俗衆の聲援とを擁して二三の檢察官に加へし其の當否は、吾人今論評の要なし、唯だ此の不合法的勢力が假令當面の檢察官をして辭職せしむるに至らずとするも、頗ぶる檢察官を畏怖せしむべきや言を俟たざるべし、隨つて其の結果が司法官を威嚇し、其の獨立を侵犯するの虞あるや言を俟たずとす

卒直にいへば、吾人は辯護士協會が輕々しく斯の如き擧動に出でざらんとを希望せざる能はず、司法官の獨立を威嚇するもの單に政府の權威のみに限らず、黄金も然り、新聞紙も然り、俗衆の多數も然り、自在に言論を弄して法官の擧措を議するもの又亦然り

自家の重きを加へんがため、汲々乎として機會を求め、一度機會に接するや百方自己を吹聽し、自家の對手たる判檢事の勢力を抑へんと欲し、而かも常に無識なる新聞紙を利用するを。智といはゞ洵に智なるべし、然れども是れ一の流弊也。彼等は更に大にシリアスならざる可らず、多くの場合に米國大統領ルーズヴエルト氏の代辯を爲し、現にパナマ運河開鑿權を讓受くるに當つても、米國側の代辯たりし紐育市の辯護士クロムヰル氏を看ずや、國際上の重要問題にも上る辯護士の職分は尊貴也、隨つて其の言動は演劇的野心的なる可らず、飽まで冷靜に、飽まで純理的ならざる可らず、吾人近事に深慨あり、坐ろに此の苦言を爲す、心ある人當さに之を諒とせん

評煩悶救治策

酒井勝軍

聞くが如くんばホーマーは或難謎を解く能はざりしを恨みとして憤死せりと、此難謎或は人生問題に非ざるなきか、古來人生問題に對して滿足なる解釋を得ず、爲めに煩悶の結果自殺せしもの幾千萬なるを知るべからず。

人已に世にあり、其祖先の猿たると神たるとは論ずる要なし、祖先猿なりしとて我等今猿なるに非ず、又祖

先神なりしとて我等今神なるに非ず唯要するは人生問題如何にあり、此問題に對して滿足なる解釋を與へ得ざる限りは其人生は失敗なり、或は爵位を以て之を解かんとし、或は權勢を以て之を解かんとし、或は金銀を以て之を解かんとし、或は學識を以て之を解かんとし、又或は信仰を以て之を解かんとするあり、之を試みて成らず遂に煩悶す、煩悶豈必ずしも哲學者の專用語ならんや、三助お鍋の情死亦煩悶の結果のみ、其動機或は藤村某等の憤死と比して同じからざるべし、されど其死に對する觀念及希望は一なり、此種の徒近時の統計によれば我國にありては每時間一人を算すと、されど從來通常一般の自殺は左まで我國の思想界に反響を起さゞりしが藤村某華嚴の瀑に姿を隱せしより以來、之を學ぶもの漸く多く、已に前後十數名に及びたるや、從來薄弱なりし我思想界は直ちに反響を起し、甲乙相應じて煩悶問題を喋々するに到りぬ、嗚乎薄弱なる思想界よ、爾社會を指導すべき使命を有しつゝ今は却つて數多薄志弱行の青年のために動搖す、斯の如くんば爾の見識何れにかある、斯くの如くんば我國の思想界は贅物なり直ちに以て打破すべきなり、文相の訓令出でたりといひては周章する教育者甚だ多く、幾多の青年憤死せりといひては狼狽する教育者甚だ多し、斯る不見識無主義の徒教育界に出入すること多きが故に我國の教育は振はざるなり、戰勝の源因は普通教育の力なりと武人側より賞讃せらるればニコ〳〵として其度を失し、煩悶の原因、德義の墮落の原因は教育者責を負ふべきものなりと社會より誅めらるればシブ〳〵として意氣揚がらず、何ぞ其小膽なる、若し夫れ我文人にして武人の如き度胸膽量を有したらんにはと識者をして痛嘆せしむるに到るが如きは、偶ま教育界不振の原因を示したるものに非ずや、何が故に膽大ならざる、曰く一定の見識なきが故のみ、若し夫れ一定の見識具はり來らんか方針茲に確定すべし、方針茲に確定せんか文相の訓令何かあらん、社會の毀譽褒貶何かあらん、十數名の青年憤死せりとて騷ぎ始むるが如きは畢竟方針の確定せずして教育者の態度の曖昧な

るに由らずんばあらず、見よ教育者が最も力を致すべき我國思想界の甚だ薄弱なることを、頃者新公論紙上に掲載せりといふ諸名家の煩悶救治策なるものを見るに實に能く其眞相を見はし居るに似たり、其救治策の薄弱なる恰も庸醫の診察に類す、又其能く其當を得たるものといへども其言や甚だ曖昧なるものあり、固より此等諸先輩の說未だ以て我國全般の思想界を代表するに足らずといへども亦以て其大概を推知するを得べしと思ふが故に今其諸說に對し、不遜ながら評言を試み以て我國思想界の薄弱なるを發き進んで教育界の大刷新を仰望せんかな。

山根正次君曰く、空理空想の結果にして教育制度も非なり社會に接近すべき學問を鼓吹して社會的人間を製造すべし。

固より君は其道の人に非ず、煩悶を以て空理空想の結果となすは人生問題に對しての謂か將た又該問題に係はる解釋法に對しての謂か、其何れにもせよ空理空想と斷定するは非なり、人生問題は空理空想に非ず、最大最高の實地問題なり、而して煩悶は生命あり靈體ある人間の何時一度は通過せざるべからざる大關門なり、社會的學問を鼓吹し社會的人間を製造したればとて此關門は通過せざるべからず、若し此關門を通過せずして一生を終り得たりとせば、これ世を欺き自己を欺きて生涯を送りたるものなり、眞面目なる人生は煩悶通過後の生涯なり、故に社會的人間製造は煩悶救治策に非ず。

幸田露伴君曰く、原因は舊信仰の破壞、新信仰の未立、物質的欲求の旺盛、精神過勞、教育當局者の短見等、救濟法は先づ安逸輕浮の實例教育を施せる教育者及父兄長上を責め方針を正うすべし

善哉言や、されどこれ間接の法にして直接の法に非ず、煩悶は個人の問題なり、或程度までは干涉しうれども其以上及ぶ能はざる個人の自我に係はる問題なり、君の策未だ上乘なるものに非ず。

加藤弘之君曰く、今日の人間は尙不完全な物で此上進化するかも知れぬ、從つて人生觀も變はらねばならぬ、

人生が分らぬとて心配するな、心配したとて分るものてはない。

むかしは希臘の學者は星を以て天空の節穴より洩るゝ光なりと斷じたりき、されば君の策の如きは學説の一としては保存する價もあらん、されど煩悶救治策としては餘りに不心切にして又餘りに不成熟のものなり、人間なるもの或は君の言の如く尚進化すべきものなるやも知れず、されど其進化や幾萬年を經たる後の事ならん、よしんば近く明年に於いて完全なる進化をなしうべしとするも、彼の暦數の如く之を斷案し得ざる限りは斯る答案は無責任極まれるものならずや、殊に老博士の言としては更に無責任なるものならずや、假令へば玆に將に餓死せんとするものありとせよ、君は尚ほ彼に向つて、今日の人間の胃袋は不完全なるものなれば其内に進化して食せざるも饑ゆる事なきに到るやも計り難し、饑ゑたりとて左まで心配するに及ばぬと曰はんとするか、君の救治策斯の如し何ぞ之を以て憐れなる煩悶者に一服せしむるの價あらんや。

高楠順次郎君曰く、學資學業戀愛の儘ならぬ等意思の薄弱に因す眞向から一大鐵槌を加へて其腐れ根性を打摧くべし。

甚だ可なり、此意氣込ありてこそ思ひ切つたる教育も出來うべし、されど煩悶なるものは實直なる心に生ずるものにして、不義不德を敢行し平然之を默許し居るが如き破廉恥なる心には生じ得ざるものなり、君の所謂大鐵槌を煩悶者に加へる事は可なり、されど其鐵槌は先づ第一に煩悶を避け居る橫着なる破廉恥漢の頭上に加ふべきものにあらざるか、煩悶のために自殺するが如きは固より薄志弱行なり、されど煩悶を避け居る無賴漢の徒らに世に永らへ居るより可なり。

石黑忠悳君曰く、宗教に依て安心を得せしめ小說や文章の書籍を避け娛樂を撰び運動體育を盛んにする事

流石は人生問題を通悟せられたる君の言なり、已に宗教によりて安心を得せしめと喝破せられし以上は他を附言する要はあらざりしならん。

根本正君曰く、厭世的狂人の自殺自滅を歡迎せよ、詩

人小說家哲學者は皆無用無益の徒なり役者幇間を一廓内に拘束し利己的拜金病を振りまく讀み物を排斥し名利外超然の眞人物を說示すべし

これ空論なり、よしんば斯く實行し得たりとて個人の煩悶は治すべからず。

佐治實然君曰く、一、政府は殖民政策に重をおきて青年子弟の海外移住に便し、二、青年男女は中學卒業後直ちに生產的生活に入り、三、中產の紳士となり、四、素朴なる田園的生活を味ひ、五、厭世より樂天に進み、六、名利僥倖の醜漢を英雄視せず、七、高尚なる文學をよみ、八、男子は三十才女子は二十五才迄戀情を絶ち、正しく障りなき結婚をなし、九、學說にては智識を買ひ、世故に堪能なる人を本師と仰ぎ、十、學問と政治家と法律家とを過重せず、人生の目的は人格の完全なるにありと知れ。

君亦老いたるかな、これ辻占者の判斷の如く又庸醫の診斷の如し、十策中一も要領を得たるものなし、帝國首都の思想界尚斯る贅說を弄する人を容るゝとせば、これ思想博品館ならずや。

下田歌子君曰く、砕けしは波間の月のそれならで空吹く風の業なりけり。

これ救治策に非ず、評すべき言なし。

棚橋絢子君曰く、戀愛の二字に外ならずと存候男女自由交際を廢し其根本を斷つの外致方なき樣存候。

余りに淺見にして評すべき價なし。

鳩山春子君曰く、或官能の過勞なり學校の教員よりも兩親によりて治療すべし。

ところが其兩親は甚だ怪しきものならずや。

花井卓藏君曰く、一度は逢着すべき運命と存候休息快樂節制の三藥が適劑なるべく候。

宗旨違ひの事故是非もなし、斯の如きことにて煩悶を排除しうれば誰も好んで天命を縮むる必要なきなり。

村上專精君曰く、教育家は文相の訓示に宗教家は厭世的說教に注意し新聞雜誌等は自殺者の事を餘り風聽せざる樣注意すべし。

夫れ教育は校長又は教師の見識に存す、文相の訓示に

て左右せらるゝが如きは不見識の至りなり、次ぎに宗教家云々の句甚だ非なり、何となれば基督教説教者は未だ曾つて一度も厭世的説教を試みしことなければなり、固より君は佛教のみをいひしものならんも、さらば君は佛教を非認せるものといふべし、殊に新聞雜誌云々の如きは卑屈の到りなり。

平井金三君曰く、學生を焦慮煩悶せしむる如き煽動教育より先づ改めざるべからず。

煽動教育の範圍如何、君恐らくは之を明示し得ざるべし、さらば君の策は實行しうべきものに非ず。

安部磯雄君曰く、體育を盛んにし競技運動の趣味を持たしめ、責任ある仕事を負擔せしめ、宗教又は社會主義の如きものにて高潔の理想希望を抱かしむる事。

枝葉はいはず、君は宗教又は社會主義といはれしも、社會主義なるものは宗教が生み出したる一産物に過ぎず、已に宗教といはゞ、社會主義といふ必要なかりしならん、君又社會主義に對して左までの信念を有せば何を苦んで宗教を持出せしや。

寺田勇吉君曰く、多大の希望を抱かしむる勿れ。

君は教育者にして尙且つ縮少主義を取らんとするか、多大の希望なくば人の教育は成るものに非ず。

山路彌吉君曰く、煩悶せしむるだけ煩悶せしむれば自然に直り可申候。

それが直らずに自殺するから問題と相成申候

丘淺治郎君曰く、自殺者などありたる場合に新聞にも出さず評判もせぬが一番に候。

人間もコウ消極になれば却つて幸福ならん、序でに凡ての學問を廢止しては如何。

山縣五十雄君曰く、怠るからにて候、私は私の經驗にて煩悶は一種の贅澤と相信じ申候治療の良法は獨立自活の身に劇しき勞働につかしむるにありと存候。

ソンナに劇しく働かせられては不平といふものに惱まさるべく、よしや不平を起さぬにしても神系過敏又は衰弱となり却つて煩悶を誘致することゝ相成不申候也。

宮川鐵次郎君曰く、園藝にて精神に慰安を與へ、宗教

にて物質的慾望と不健全なる哲學思想を驅逐すべし。宗教云々なる名策ある以上は園藝云々と附記する必要なかりしならん、爲めに却つて宗教云々の句の力を毀滅せるを恨む。

堺利彦君曰く、獨立生活の困難と其より生ずる結婚の不自由とに在ると思ふ根本の救濟法は一日も早く自由安樂の新社會を現出せしめるの外ないのである。其新社會は何千年の後に出來るものやら、君も亦弘之博士に類似し居らずや。

最近の中央公論は學生の風紀墮廢は無宗教の弊ならざるやとの快文字を以て此萎靡せる教育界に大警醒を與へたり、然り無宗教の弊なり、東亞之光事件にて名を揚げたる博士某が嘗つて宗教と教育の衝突などゝいひて輕薄なる教育界に病毒を逞うせしめしが故なり、煩悶問題亦無宗教の弊のみ、豈他あらんや、されど輕薄なる思想界は宗教を歡迎せずして徒らに贅説を陳列す。玆に謹んで教育界及び思想界の大刷新を希望し更に宗教家の大傳道を希望す。

野人禮に通ぜず、盲者蛇を恐れざるの狂態を演ぜしことなきに非ず、其罪大なり謹謝々々。

（酒井氏の此篇は此處に收めたればとて其所論必ずしも吾人と一致するが故にあらず、評論子筆を執つて次號の本欄にその見を述ぶるところあらん）

學生と社會主義

ちよいん生

七月五日神田錦輝館にて社會主義の人々、電車問題に關して演説會を開きたるに、多數の警官臨場して嚴に聽演者の種類を檢し、未青年者及び學生と見ゆるものは堅く其入場を拒みたり。而してそは先回の文相の訓令中、學生に「極端なる社會主義」を戒めたるの趣旨に基くものにして、尚全國皆此方針を貫徹する積りなりと傳ふ。吾儕之について聊か説あり。乞ふ之を述べん。

そも六月九日の文相の訓令中「極端なる社會主義」といひ、「建國の大本を藐視し、社會の秩序を紊亂するが如き危險の思想」云々といへるは果して如何なるものを指せるか、具體的に表示する所なければ、さだかには知る由もなけれど、察する所彼の無政府主義、共產主義又は劍と血と火とに訴へんとする過激なる一派の社會主義等を胸に置きて發したるの言辭ならんか。吾輩もと今の穩和なる文部省の方針に從て教育

れたる爲めか、或は又自然の性格が左樣なることを好まざるが爲めか、兎に角以上の如き「極端なる」說を弄するものに對しては常に面白からず感じ居るものなれば、文相が若しかゝる思想及び行動を檢束せんとしたるものならば、今日の場合寧ろ至當の所置として稱揚せんと欲するものなり。然れどもたゞ「社會主義」と聞けば直ちに「過激」「極端」の異名なりと誤解し、遽かに之が壓抑妨止の策を講ぜざるべからずと戰慄する今の多數の所謂上流者の意見と同趣旨より出で「あらゆる社會主義」に向て抱ける惡感情の反映なりとすれば、吾輩は大に其淺薄なる思想と輕卒なる擧動とを尤めざるべからざるなり。

抑々社會主義とは果して如何なる思想なるかは各人互に其見る所を同じうせず。小異殆んど拾ふに勝えざる程なれども、大體に於て土地資本を以て社會の公有となし、人民皆協力勞働に從事して社會全體の生活を安全幸福ならしめんとするの根本思想に於ては先づ〳〵一致したるものと見て差支なきが如し。或は「穩和」といはれ、「過激」といはれ、或は「講壇」の名あり、「民主」の名あり、或は「無政府」と稱し「共產」と稱して、中に無數の差別あるが如く見ゆるは、全く之を實現するの手段、方法、形式を異にするに依るものにして、其最後の目的とする根本思想に至ては、古の志士仁人が世を憂へ、時を慨するの至誠と毫も相違あるを見ざるなり。只其志と其目的とが可なりとするも、世の實際に照して果して有益なるか、將た又有害なるかは自ら別問題にして、是れ社會主義が現今第一の研究問題たる價値ある所以なり。世に我は社會主義者なりと稱するものは、社會主義を以て已に確定せられたる眞理、不變の公理となし、今日迄の社會進化の理法より推せば、必らず到達せざるべからざる當然の結論なりと主張し、又之に反對するものは到底一の空想、一の白日夢に過ぎずと批難する模樣なれども、吾輩は其孰れとも判斷がつかず、今少し眞面目に、着實に、氣を永く研究すべき餘地の充分ある問題也と思惟するものなり。夫れ故に吾輩は微力自ら省みず、駑駘自ら鞭ち、窃かに社會主義の研究を以て一生の事業とせんと迄考へ居るものなり。吾輩は元來頗る移り易き性質にして昨日非なりと信ぜしもの今日是に、今日眞なりとするもの明日は却て僞なりと、殆んど極端より極端まで思想の變遷せること屢々ありし程の男なれば、只今然るべしと信ずるものの今後も亦必らず左樣なるか否かは自らと雖も疑なき能はざることなれども、今日窃かに願ふ所は、社會主義は果して人性に悖らずして人生を向上せしめ得る制度なるか、殊に經濟學上當さに到達すべき當然の結論なるか否かを研究し、若し之れ當然の結論、確實の眞理なること明かとなれば、靜かに人間の理性と感情に訴へて、穩和なる手段を以て之が實行を計畫し、能ふべくんば一人の不平者もなく、滿天下の人驩呼雀躍して笑聲場裡、拍手堂中之が實行を贊成せんとする程にしたきものなりと思ふなり。是れ若し或は一の理想なりとするも吾輩は成るべく此理想に近き方法を擇ばんとするものにして、彼の暴を以て暴に代へ、血を以て血を償はんとするが如きは却て早きに似て遲く、斷なるに似て愚なるの所謂なりとするものなり。

吾輩は寡聞少學の質を以て、こゝに社會主義の講釋を企つるものにあらず。又そは此文を草したる目的にもあらず。たゞ吾輩が以上の大まかなる總體論をなしたる所以のものは、吾輩の社會主義とする所のものは、必らずしも「建國の大本を蔑視し、社會の秩序を紊亂するが如き危險の思想」にもあらず、又必ずしも「極端」なる思想にもあらずして、實に現今の經濟狀態より生ずる社會現象を憂慮するものゝ必らず研究すべき問題にして、學生殊に經濟學社會學等直接に社會組織の研究に從事するものにとつては、須要最も缺くべからざる問題たることを感じ、從て文相の訓令があらゆる學生の社會主義の研究を禁遏するの意ならば、甚だ其不法亂暴なる所置たるを示さんと欲したるが爲めなり。

社會主義の演說會に於て未成年者の入場を禁じたるはよし。又學生が社會主義の實際運動に加入するを戒むるも亦惡しからず。然れども若し社會主義の名あるものは一切之を學生に嚴禁し、其學理の研究を妨げ、學理の研究會にも之が入場を禁ずるが如き方針に出づることあらんか。是れ疑もなく文相の僭越也、文相の惡干涉也。筆あるものは筆を以て責むべし、舌あるものは舌を以て責めざるべからず。吾輩は經濟學を專攻せんとする一書生也。身自ら社會主義者にはあられども、社會主義を以て最新にして最進なる一經濟學說なりと信じ、一生之が研究に從事せんと欲するものなり。能ふべくんば成るべく多く之が著書を讀み、成るべく多く之が會合に出席せんと欲するものなり。是れ吾輩にとりては何の疚しき所なく、寧ろ吾輩の爲し得べき最良の進路也とするものなり。恐らくは天下又吾黨と志を同じうするもの尠からじ。文相の言頗る抽象的にして且つ曖昧模稜の譏を免れずと雖も、若し無政府主義、共產主義血と火と劍とに訴ふる過激なる社會主義を拒み、學生の此思想に感染し且つ實際運動に加入するを防がんとするの意ならば善し。若し否らずしてあらゆる社會主義の研究をも妨止せんとするの趣旨ならば、吾輩亦筆硯を新たにして之れが攻擊を爲さんと欲するものなり。

學生と花柳病

今年第一高等學校に於て入學試驗を受けたるもの殆んど三千名に近く、其中體格檢査に於て不合格なりしもの百二三十名なりきと傳ふ。而して驚くべきは、此百二三十名の學生が體格に不合格なりしは、概ね皆花柳病患者たりしが爲めなりしとの風說あることなり。學生の體格檢査に花柳病の檢査を行へるは新らしき事實なり、昨年迄は全くかゝることなかりしなり聞く所によれば一々陰部を檢査し且つ小便をとりて之が分析を試み、花柳病の徵候明かなるものは嚴に之を排斥したるなりといふ。百二三十名中少數の結核性の患者ありきと見て、純粹の花柳病患者を百名なりとすれば、三千名に對する百名即ち三十分の一の割合にて、左程に多くもあらぬかの如く感ぜらるゝも、中學を卒業せる許りの學生が已に三分以上花柳病に罹れりとありては、又決して輕々に看過すべからざる問題というて可なり。勿論受驗者の中には中學の門を出てゝ已に數年、每

試驗に落第して其間都會にぶら〳〵して日を送り、不知不識(しらずしらず)惡風に誘はれて惡所に通ひ慣れたるものもあるべければ、かゝる厭はしき病に罹りたるは左樣なる少年に限ることゝなるべきも、兎に角憂ふべき現象なりといはざるべからず、學生の中にはかゝる檢査を行へるは學生を侮辱したる仕打なりとて憤慨したるもありとか。其志は殊勝なれども已に百名以上の患者ありといふ事實にして明かなる以上は、檢査したるは寧ろ至當の所置といはざるべからず。只吾輩は今年より箇樣なる新らしき制度を設けて、悉く之を排斥したるは、主として倫理的道德的見地よりなるか、又は生理的體格的意味よりなるか、又は兩者を兼れ合せたる目的よりなるかについて些か說なきにあらざれども、そは追々吾輩よりも其道の智識に富める人の論もあるべければ、こゝには何事もいはざるべし。只吾輩の一つ心づけることは學生にしてかゝる厭はしく且つ恐るべき病氣に罹るものゝ増加したるは、漸く淫靡輕薄に流れたる一代の風潮が、青春の激烈なる情火を煽りて、殆んど盲目的にかゝる危險の淵に身を沈ましめたるにもよることならんが、或點までは學生が人間生理の學に委しからず又明かならざるの罪に歸することを得べしと信ずるを以て、今回かかる新檢査法の行はれたるこそ幸なれ、宜しく之を機會として中學時代即ち人間情火の燃え初むる頃より、明かに嚴肅に人間生理の學を吹き込み、花柳病の災害の恐るべく忌むべきの事實を深く〳〵腦裏に染み込ましむるやうの敎育を施したきものなりとの考なり。素より人間の性欲はなか〳〵に深きものにてフレース及びウエルタイメルとかいふ人は「人を驅て性交に向はしむる自然慾の勢力は法律及び警察の規定よりも活大にしは僧侶も醫師も之に打ち勝つこと能はず」といへる程なれば、況して敎育の力にて全然其性慾の橫溢を妨止し、只一人の怪我人をも出さずといふが如きことは隨分の難事なるべけれども、少しく一身の將來を考ふるものは、其敎育によつて大に啓發せられ、之を節抑するの力の增加すべきこと疑を容るべからず。吾輩は箇樣なる思ひ切つたる仕打をやり遂げたる我文部當局者が、又世間の瑣々たる批難を省る如き姑息なる考を起さず。斷然中學生に向て性慾に關する生理的智識を普及せしめんことを希望するものなり。

高等學校入學試驗に落第せる學生に告ぐ

高等學校に入學を許可せらるゝ學生の數は受驗者の數の三四分の一に過ぎざれば、受驗者の四分の三、又は三分の二の學生は不合格の悲しき目に逢ふべきは知れ切つたる事實也。此等の不合格者の中には眞に學も才も人より劣りたるものも多々あるべけれども、又中には特別の才學人に勝れながら、一部の學課に不得意のものあるか、又は時の張合にて思ふやうなる答案が出來ず、遂に不合格となれるものも尠からざるべし。吾輩の持論によれば、高等學校を經て大學を卒ふるまでの年限は隨分短

からぬ上に、入學試驗に數年を費しては殆んど學窓の久しきに倦怠の情を催すの恐あり、されば一度失敗すれば寧ろ方向を轉じて他の專門學校に籍を入れ、三四年にて社會に出づる工夫したる方得策なりとの考なれども、若し何處までも高等學校の試驗を續けんとの意ならば、是れ亦其人の志にして、吾輩亦强て之を止むべき理由もなし。只吾輩の望む所はかゝる人は入學試驗に不合格なること明かとならば、斷然故鄕に歸りて父母の膝下に於て勉學し、來年の試驗期を見計りて再び上京することにしたきものなり。吾輩の知合の中東京にて失敗したるもの隨分尠からぬ事なるが、其失敗者の十人の九人迄は一度入學試驗に落第しても東京を去らず、何か臨時の學校に足を止め居る人どもなり。誘惑は常に空虛(すきま)を窺ひて入り込む。定りたる學校もなく、志亦飢えたる學生程誘惑の入り易きはあらじ。殊に都會は一種の魔窟なり。足一度び橫徑(よこみち)に入れば惡魔の手は蜘蛛手十文字にからみて殆んど逃るゝの道なき迄苦しめずんば止まず。若し魔窟に迷はざるも都會は決して身體に佳なるの地にあらず。風吹けば塵埃、雨降れば泥土、黑煙隨所に洽れくして空氣は常に不潔也。夫れよりは故鄕に歸りて淸き川の畔に散步し、高き山の頂に衣を振うて、身體を强健にし、志氣を浩大にして上京することの如何ばかり得策なるか、殆んど比較すべからざる程なり。たゞ或人は故鄕に歸れば敎師もなく、學校もなし。都會に止れば便利なる學校あり、博學なる敎師あり、是れ吾輩の都合に於て勉學せんと欲する所以なりなど辯解する人もあらんかなれども、高等學校の試驗は左程六つかしきものにあらず、たゞ中學にて敎はりたることを記臆して居れば可なり。中學を卒業したるものはたゞ正直に敎へられたることを復習すれば充分也。敎へられたるを復習するには田舍に居たりとて別段事缺くることもなし。新らしき事柄を澤山に覺えんなどゝいふ野心は却て入學試驗の妨害にこそなれ、得にはならじ、されば今年入學試驗に落第し、明年又試驗を受けんと欲するものは、多くの學生の爲す所に傚ふことを止め、氣を確かにし、自己の力を信じ、安心して故鄕に歸り、眞面目に敎はりたる處を復習し、身體も志氣も丈夫にしたる上、來年亦上京するの覺悟ありたきものなり。(以上三項ちよいん生)

前號の小說欄に揭載した伊藤銀月氏の「大魚に呑まれし人」は氏獨得の長所を發揮したもので、近來の快心の文字なりしことは讀者の見られた通りである。あの小說の新聞廣告に「作者の自贊」云々の文句があつたが、あの文句は何だか自分が押賣でもしたやうに誤解され易い恐れがあるから取消して呉れとの申込があつた。「伊藤銀月は男でござるぞ」押し通して居る氏には最もの申込と思ひ、こゝに謹んで取消す次第てある。



近時の飜譯書

樗陰生

「宇宙の謎」「アンナ、カレニナ」及び無絃氏の譯詩を評す

世界の名著大作は、相成るべくは悉皆邦文に飜譯して了ひたきものなり。是れ外國語の素養なき又は乏しき人をして、智見を啓き、學識を高めしむる唯一の捷徑なればなり。然れども、名著大作の飜譯は、自ら凡著小作の飜譯と異り、大いに愼重且つ懇切の態度あらんことを要す。素より凡著小作の飜譯と雖も、愼重且懇切なる程結構なるは論なけれど、少し位の胡魔化し又は誤りありたりとて左程の大事にあらず、隨分大目に見てやつてもよきこと間々あるべし。是れ其書の影響を與ふる範圍も勢力も比較的に僅少にして、利も害も事々しく論ずる程のことなかるべきを以てなり。然れども名著大作の飜譯に至りては、左樣に輕々しく手を着くる譯には行かぬなり。仔細は一文の誤謬も一句の增減も、或は其書全篇の意味を變更し、趣意を沒却し、延て思想界に影響を與ふる甚だ大いなることあるべきを以てなり。

以上は吾輩の飜譯書に對する大體の意見なるが、扨飜て近時の飜譯書を見るに、少しく面白からざる風潮の目に立つが如く思はるゝは吾輩の遺憾とする所なり。例へば高橋及び外一氏の譯ヘッケルの「宇宙の謎」の如き、柴田流星氏譯トルストイの「アンナ、カレンナ」の如き、小原無絃氏の西詩飜譯の如き、皆吾輩の意に滿たざるものゝ標本にして、こゝに少しく不平を並べんと欲する所のものなり。

吾輩は不幸にして獨逸語の智識に乏しく、ヘッケルの「宇宙の謎（ウヱルト、レッチェル）」は、英譯によりて僅かに其面影を窺ひ

たるに過ぎず。されば先般此書の飜譯が出來上り、殊に加藤、元良、渡瀨等の諸博士の讃辭序文がずらりと並んで出版せられたりと聞くや、直ちに驅け附けて之を買ひ求めたり。然るに歸て之を讀むこと二三葉、忽ち一種異樣の感に打たれぬ。先づ第一に其調子が甚しく平生のヘッケルに異る所あるやうに思はれたり。此飜譯書にあらはれたるヘッケルは宛然として一個の漢學者的道學者的口吻なり。總じて文の調子といふはなか／＼に大事なるものなり。意味は同一なる積りにても、文の調子變れば、讀者の頭に響き、胸に應ふる思想がらりと代りて殆んど異腹の子も啻ならざるものと化し去るが常なり。ヘッケルは何時の間にかゝる道學者に生れ變りしかと訝りつゝ英譯を出し見るに、矢張り吾輩の頭に宿りし平生のヘッケルなり。英譯非なるか、和歌可なるか、原文と對照したる上ならでは、俄かに判ずべからずとの論もあるべけれど、吾輩は竊かに英譯の方可なるべしと考ふるものなり。仔細は英學者の獨文を解する力は一般に我國人よりも上なりと見て間違なかるべし。殊に吾輩の有せる英譯は廣く世上に流布せるものなれば、若し英國の學界にして非常に放慢ならざる限りは、左樣なる誤譯をして公行せしむるの恐なかるべければなり。然れどもこれ或は吾輩一個の臆測偏見に上りて、事實大に相違せりとの辯解あらば、吾輩も强て之を追究することを止むべし。されどこゝに如何に辯解しても辯解せられぬ落度ありといふは、此飜譯書の慾まゝに原作を節略し、又は抄略しあることなり。殊に吾輩の見る所にては、事、科學上の議論、學問上の理論に亘りて、所謂生物學者の本領、ヘッケル獨得の長所を發輝せりと思はるゝ所は、概ね省略せられてたゞ／＼大まかなる總體論に終れるが如き感あることなり。吾輩は箇條に信用を置かれぬ杜撰なる飜譯書は、讀むの價値なしと信じ、初めの少部分のみ讀みて直ちに古本屋に賣り飛ばしたれば全篇の出來榮如何は委しく論評するの資格なきも、一事は萬事なり。殊に何事も初めは力瘤を入るゝ習ひなるに其初めさへ箇樣なるものなりとすれば、其終りも亦之を推

量するに難からずと考ふるなり。夫れヘッケルは當代生物學者の泰斗なり。「宇宙の謎」は彼の一名著也。之を飜譯する宜しく愼重懇切、一字一句輕忽に附すべからず、若し力到底及ばず、たゞ力の及ぶ丈けを譯するか、又は其梗概丈にても紹介せんとの殊勝なる心掛ならんか。宜しく明かに其旨を斷るべし。然るに一言の斷りをも附せず。抄譯とも記せず。博士等の無責任なる序文を並べて出版したること、世間を馬鹿にしたる仕打なり。讀者を盲目にしたる所行なり。而かも我學術界及び批評界は之に一言の批難をも起さず、其儘に打ち捨ておくこと、餘りに緩怠に過ぎ、餘りに放漫に流れたることとならずや。丘博士校訂の下に成れるダルウインの「種之起源」の飜譯は決して良好なるものとは稱すべからざりしも、兎に角忠實ならんとするの誠意は充分に認められたりき。然るに此「宇宙の謎」は彼れに比して遙かに劣れるものなることは吾輩の遺憾とする所なり。

又彼の柴田流星氏の「アンナ、カレンナ」の飜譯に至ては殆んど言語道斷ともいふべき無責任なるものなり、尤も其序文には抄譯といふことと明かに斷りあれども、其一部を拾ひ讀みするに、全く文學趣味の幼稚なるか又は解せざる人のものしたるものと思はる所少からず。吾輩が英譯にて讀み、最も面白しと感じ、又はトルストイ翁獨特の長所と思はゞ銳利なる觀察、趣味ある敘述に至ては殆んど全く略せられたるか、又は極めて不充分に譯せられ、到底原作の面影を窺ふにも足らざるなり。思ふに「アンナ、カレンナ」は「戰爭と平和」と共にトルストイ翁最大の傑作にして文壇不朽の大著なり。吾輩はマッシュー、アーノルドと共に此翁の道德的宗教的著作の省られざる世に達するも此二大著述は必らず讀まるべきを信ずるもの、人生の批評、人世の縮寫圖とに眞にかゝる小說をこそ指すなれと常に感嘆の聲を絕つ能はざる次第なりしに、今かゝる杜選なる飜譯を以て世に紹介さるゝこと慨嘆に堪へざるなり。我國には平生トルストイの作物を喋々して全集の隅より隅まで讀破し了りたるやうのことを吹聽する

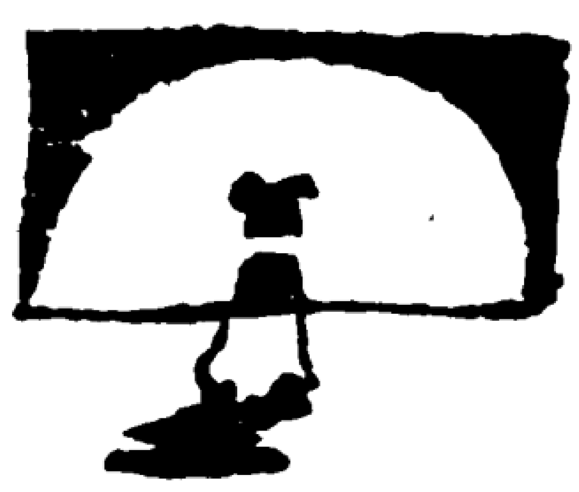
人も少からざるに、かゝる人が此飜譯について一言の批評もなきは訝しき事どもなり。或は吾輩は原作を讀めり。飜譯など讀むには及ばずとの説もあらんかなれども、原作に興味を感じたる人は早く日本にもかゝる作の飜譯のあれかしと祈る位の親切心はあるべく、若しかゝる親切心あらば飜譯の世に出でたるとき一讀の勞を惜まず、若し飜譯佳ならば世間に推奬し、飜譯惡しからば之を批難する位の世話をしても差支なき筈なるに、未だ之を評して懇切なるものを聞かざるは、所謂西歐文藝の鼓吹者なるものゝ不親切驚くに堪へたりといふべし。

　最後に小原無絃氏の西詩飜譯の世に出でたるもの最早や五六冊の多きに上りたる程なるが、何れも苦心經營の跡に乏しく、たゞ〳〵譯しさへすればよしといふやうの氣味合見えて甚だ情なきことゝ思ふなり。飜譯は難事なり。殊に韻文の飜譯は難中の難事なり。之を責むるに完全を以てするは固より酷なり、然れども西歐の名工巨匠が苦心慘憺の墨の痕、筆の匂、之を移して世に紹介せんと欲する、宜しく及ぶべき丈けの苦心經營ありたきものなり。然るに其調子もわるく、其文字も妥ならず、殆んど原詩の響をさへ宿さゞるは、何となく不平不滿の情なきを得ざるなり。かゝるものにても飜譯なきには勝るべしとの説ならば格別なるも、譯詩を以て半生の事業とせん位の覺悟あらば今少し佳良なる飜譯を出されんことを希望せざるを得ず。

　以上吾輩の不平の大體を並べたるが、かくいへばとて我國の飜譯界悉く非なるにはあらず、一方には淺野、戸澤兩文學士の沙翁全集の飜譯の如きあり。小説界には二葉亭氏、魯庵氏等の老手あり、又鷗外氏も其精嚴の筆を以て飜譯を再びせらるゝこともあるべけれど、以上述べたるものゝ如き、確かに喜ぶべからざる近時の一風潮なりと見たるが故に、殊に此言ある所以なり。

（七月二十三日）

次號の本欄には夢蝶庵主人の「社會的文士を評す」といふ一文掲載せらるべし



漫評

無聊錄

丘山生

（一）言語の下落

△金剛石は鮮きが故に貴し、言語も亦之に類するものあり、薨ずとは貴人にのみ用ふ、故に之を使用する場合少く、從つて有難味一層也。

△貴金屬として古來珍重せられたる銀は、產出額增加の爲近年著しく下落せりと聞く、言語も使用の範圍擴張と、其餘りに通俗的(ポピユラー)となりし爲下落せるもの少なからず。

△妃、御息所なんど云ふやんごとなき際は云ふもかしこし、上は北の方より奥方、奥樣、令夫人、夫人、令閨、お方、御新造、お神さん、細君、妻、女房、梵妻、大黑、嬶、山の神等、有夫の婦を指すの名稱多きこと蓋し我國の如きはなかる可し、是れ階級制度より來れる結果ならんも、之を外國語の多きも僅に四五を有するに過ぎざるに比すれば唯々驚くの外なし、而して四民平等の結果はやがて之が使用法の亂雜を來しぬ、殊に著しき例あり、由來「奥樣」は貴族的紳士的なりし也、然るに今や天下の妻たるもの、猫も杓子も滔々として奥樣たらずんば止まざらんとす、甚しい哉、今や既にお神さん、細君、大黑を風靡して、近く嬶、山の神の壘を摩せんとす、自然陶汰の理法を說く進化論者は、奥樣の繁榮を謳歌するならんも、余は其下落を憐む。

△世人口を開けば「非常に」、「大變に」と云ふ、人爲の變は夕べを計り難しと雖、如何ぞしかく異常變事の頻繁なるあらんや、少しく澁皮のむけたる面相を見れば甚だ無雜作に非常な美人とたゝへて怪まず、これ一面島國根性事大根性を表白するもの、當今書生間の流行語たる「素敵」の如きは遂に同一運命たるな

からんや。

△言語は愈用ひて其價愈下落すること、猶愈着して愈すり切るゝ衣服の如し、更に進んでは無價値となり廢物ともなる、「惚れる」と云ふ語は近來頗る無價値となりて顧る者甚だ少し、學生も女工も皆戀すといふ、新しくて善き者啻に女房と疊のみかは。

△雅言とは高價にして例へば骨董品の如きものか、俗言とは其價廉にして例へば日用器具の如きものか。

△人より恩惠を受けたる場合、感謝して有り難うと云ふ、もと甚だ稀に其事に逢着するの意を述べて謝辭としたる也、然るに今や店頭にて物を買へば有難う御座いますと云ふ、商人は物を賣るが常なり、其事や有り難きにあらず甚だ有り易き也、言語もこゝ迄下落しては寧ろ愛嬌也。

△醜き毛蟲も一度化せば美しき蝶となりて、道樂書生や式部連の甚だ珍重するところなり、往昔の醜態全く忘れらる、言語にも之に類するものなり、未亡人と云ひ、細君と云ふ自卑の言の何時の間にやら化して他人の尊稱となれるもの也。

△貴樣貴公といふ語は例へば腐つた鋼の如し、

△自卑自遜の言を直に取つて他人に移したるもの、手前、自、これ他人を自卑したる自己と同地位に置く也。

△上にも下にも用ひる語、殿、公（正成公博文公熊公源公と云ふが如し）君。

△何々やの「や」は商家商人を指す也、郵便脚夫を呼んで「もし郵便やさん」と云ふはおかし。

△犬死とは由來人死に對する語也、然れども觀じ來れば萬物の靈長先生にして果して犬死せざるもの幾人ぞ、言語の騰貴にあらず人間の下落也。

○　　　杜子美

黃四娘家花滿蹊、千花万朶壓枝低、
留連戲蝶時々舞、自在嬌鶯恰々啼、



濱の魔窟

白眼子

東京を南に去る七里、其處一に大都會がある、言ふまでもなく、五港の一たる橫濱港は即ち之れだ、江戸ッ兒は單に目して濱と稱へて居る。汽車で往けばざッと四十幾分、間違つた所で一時間とはかゝらぬつひお隣り、お隣りではない一ッ家の軒下と言つても差支のない程、それだけ近く且つ密接の關係を有して居るこの大都會、今度は舞臺を玆に取つて見やう。

若し、世人の言ふ如くに、東京が生馬の眼を拔く物騷な所であるならば、僕は、橫濱を以つて更らに鬼の住む危險な場所といふを憚らない。尤も、生馬の眼を拔くのも鬼の住むのも、物騷ッ危險いといふ意味に於ては大した違ひもないが、併し、その程度を比較すると、橫濱は東京よりも更らにより多く甚しい、假りに、東京を墮落の場所とすれば、橫濱は進んで人を葬むる魔所なのだ、東京には暗黑のある代りに尚ほ光明がある、橫濱は暗黑のみで光明が更らにない、要するに、橫濱は飽まで墮落の場所で決して成効の舞臺ではないのである。

けれど、事情を知らぬものは、一攫萬金の僥倖や、又は途方途徹もない空想を抱いて、柄にもない野心を齎らすものが多いのである、殊に、東京で失敗したものや、田舍から飛び出して來るものなどが、徃年の僥倖的成効者に眩惑して、立身出世は何んでも橫濱に限る如くに想像して居るのだから情けない、それは、橫濱なる港が今の如くに開けない昔の時代は、成程、天保錢一枚で仕上げたとか、或は空拳赤手を以つて巨萬の富を造つたとかの、大なる成効者も間々ないではなかつたのだが、少くも、昔と今とでは時代が違つて居る、早い話が、續々と入り込んで往く多くの野心家の中で、近來は未だ誰あつて成効したものあるを聞かぬでないか、それも、大なる成効者でなくとも、少なる成効者ですら殆んどない、が、ないのもその筈、之れには理由がある、試みに、橫濱なる土地を觀察して見ると、さすがに開港場であるだけ、四方から雜多の人が入り込んで居るだけ、人氣の惡いことゝ言つたら夥しい、詭詐、奸計、互ひに呑噬を逞ふして居るのだから、世間を知らぬ田舍者などは無論のこと、多年都會に住み馴れたものでも、足一度橫濱の地を踏めば、忽ち周圍の陷穽に沈溺して、又と容易に浮み上ることが出來ないのだ、現に斯く言ふ僕の如きがその一人なので、所謂一攫萬金的の空想を夢みながら、遠大の野心を抱えて出かけたのだが、僅々月餘を出でずしてさんざ

んの失敗、失敗ではない、駱駝にかゝつて手も足も出せない仕末、今少して溺れる所を、辛くも逃れて來た當時の經驗談、之れを、讀者の參考にまで紹介して置かう。

横濱の停車場を下りて、一二町も辿ると、忽ち眼に附く一種の商店がある、入口の紺暖簾や家根看板の文字を見ると、曰く、汽船乘込、商館住込、と二行に割り書きをして、下には、筆太の文字で大きく、即ち、家號の代りに、人事博愛周旋社！

尙ほ、一二町も辿ると、文字こそ多少は違つて居るが、矢張りこの意味の看板で、曰く、人事周旋合資會社！

何んたる大袈裟な看板であらう、知らぬものが見たなら必らず不審の眉を顰めるに違ひがない、そして、この地に何等かの職業を求めるべく來たものなら、一も二もなくこの看板を見て飛び込むであらう、けれどこの不可思議なる商店のそも何物なるかを知るに至つたなら、誰しも又呆然として一驚を吃するに違ひがない。

之れを、尤も手ッ取り早く、一口に素ッ張抜いて了へば、外でもない昔のせげん、即ち桂庵で、今の口入宿が之れなのだ。

斯く、通俗に口入宿と言つたら、如何に世間の事情には暗い迂遠なものでも、恐らくこの營業の何物なるかを知らぬものはあるまいと思ふ、現に、地方から飛び出して來るもので、知己も縁者もない頼りなきものなどが、差詰め縋らうといふのはこの口入宿なのだ、されば、この營業は地方の人等には、無くて叶はぬ便利な所であるが、而も、一口に口入宿と言へば、誰しもその危險を虞へて、可成之れに縋らざらんことを勉めて居るそれ程世間には信用がないのである、けれど、內幕眞相は兎も角、表面の看板だけは、東京を始め如何なる地方でも、之れを露骨に表示して、雇人口入所、若くば、男女奉公人周旋所、などゝ掲示して置くのだが、獨り、横濱の口入宿に至つては、斯かる大袈裟な看板を掲げて、暗に世人を瞞着して居るのだ、人氣の惡い、物騒な、油斷のならぬことは、この一事でも大概想像が出來るであらう。

が、僕だとて初めから之れを世間普通の口入宿と看破したのではない、その見事な大袈裟な看板には、成程横濱だけあつて、さすがに便利なものと、譯もなく感心して了つたのだ、さうだらう、汽船乘込、商館住込みと言へば、場所が場所だけ、如何にも在りさうなことで、之れに向つて一點の疑を挿むなどの念は毛頭なかつたのである、殊に、人事博愛周旋社とか、又は人事周旋合資會社などゝ、字義から解すれば如何にも殊勝らしく眞面目なので、實は、普通一般の勞働的奉公人を周旋する口入宿ではなく、多少敎育を受けた、言はゞ、靑年學生輩の就職に向つて設けられた高尙な周旋所と思ひ込んだのだ、勿論、而く思はせるべく裝ふて居るのだから、一槪にさう信ずるのも決して無理ではない。

所で、僕は先づその看板を見て飛び込んだのだが、入つて見ると、その看板の大袈裟な割に、內部の體裁は甚だ權衡を失して居るのに少からず驚いたのだ、暖簾を潜ると、其處は一部が土間で一部は店であるが、土間には汚ない薩摩下駄や草鞋などがだらしなく脫がれて、帳場格子に

は若い番頭が二三の帳簿を抱えながら、恰かも事務員らしく控へて居る、玻璃障子の奥を覗けば、この家の主人と見えて、人相の悪い一癖ありげな奴が長火鉢の前に煙草を吹かしながらヂロ／＼店の方を眺めて居る、腰を下して、一通りの來意を語れば、之れも喰ひない面附きの番頭、眼鏡越しに物騷な眼て、ヂロリ一瞥を與へたのだが、瞬間、既に僕の人相から服装から、乃至は頭の先きや足の爪先きまて、殘る隈なく讀み得た如きの態度には、僕は聊か薄氣味惡くも又不快に感じたのだが、併し、入らッしやいのお世辭と共に、面には似合はず頭の低いのはさすがに商法柄とは言ひ又人を外さぬ愛嬌がある、腰を下しながら徐ろに來意を語れば、番頭こつ／＼頷いて、火鉢を押し出しながら、何んな所がお望みて……？、といふ、實は看板を見て來たのだが、商館の口があろうかと聞けば、番頭事もなく合點して、ハイ、在ります、併し、今日はもう遲くて否けませんから、何れ明日といふ、成程、その日はもう夕暮れてあつた、兎に角、番頭の潔き返事に安心して、では何分頼むと頭を下げれば、承知しました、所て、保證人はありますかと聞く、東京にはあるが弦にはないと言へば、東京ては否けないのてす、商法とは言ひますものの手前共からお世話をすれば矢張り責任がありますので、身元も分らないものを周旋して後て迷惑が出來ては第一手前共の信用に係りますから……と、言ふことは成程尤もなのだ、殊に、信用だとか責任だとか言ふのだから、旁々以つて信を措くに足りる譯と、僕はます／＼信用して、ては何うすれば好いかと聞くに、番頭更らに鹿爪らしく改つて、それは保證人のない方は如何程もありますが、折角田舍から出て來て保證人のないため目的の所へ住み込めないと言つては誠にお氣の毒ですから、そんな方には之れまで手前共で保證して上げましたといふ、では僕もさう願ひたひと言へば、番頭澁々らしい顏附をして、手前共の方ては可成それを好みませんが、併し折角のことてすからなつても上げましょうけれど、それに就ては二圓の保證金が要るといふ、保證金といふ一語て聊かへこたれたもの丶、この場合彼れ之れ言つて居る時てもなく、且つは、僅々二圓のために有望の口を取り遁しては詰らぬ譯と、多くもあらぬ中から二圓を割いて、別に手數料が五十錢。

ては、何れ又明日來るから、と言つて辭し去らうとすれば、番頭更らに曰く、旅人宿へなど宿るのは不經濟だからお止しなさい、口の出來るまでは手前共の二階へお宿め申します、格別宿料も要りませんから……とのことに、僕はます／＼安心して、渡りに船とその言葉に從ふたのだ。

が、言はる丶がま丶に二階へ上つて見れば、こはそも、表の大袈裟な看板と店の裝體が甚だしく權衡を失して居るそれよりは、此處と店とは更らに雲泥の相違なのだ。

十疊の一室、之れが二階てある、と言へば何んてもないが、一言之を盡せば豚小屋てある、疊は赤く黒く焦げて、所々に腸が露出して居る、壁や障子は疊に色を競ふて、點々たる破れ目壊れ目には反古や繪紙て裝飾されてある、脚絆股引の吊されたる、卷煙草の死骸や鼻紙の散亂た

る、東京の木賃宿にもこんな所はない、番頭の厚意も之れで讀めた。

更らに、その一室に豚の如く轉々して居る雜多の人間が又甚だ奇觀なのだ、或は被布一枚で轉がつて居るもの、或は單衣一枚でふるえて居るもの、或は角帶前垂れで畏つて居るもの、彼れ之れ四五人は居たが、兎に角、僕が想像して居た如くに、玆へ入り來るものが多くは青年學生と思ひの外、書生といふのは僕一人で、餘は悉く勞働者や商人らしいものゝのみなのには、先づ以つて意外の感がしたと共に、そも〳〵この周旋社の內部の體裁や又は番頭の餘りに旨過ぎる言葉などを考ひると、聊か玆に至つて疑念が起らないでもなかつたのだ。

二階へ上つて、片隅に少さくなつて居ると、一同は不思議げに僕を眺めて居たが、中の一人は馴々しく言葉をかけて、貴所は何んな所へ住み込むつもりですかといふ、商館が希望だと言へば、ハヽヽア、と苦笑して、貴所もとう〳〵引ッかゝりましたね、と他のものを顧みながら、憐む如くに僕の樣子を眺めて居る、引ッかゝつたとは？不思議がつて聞けば、イヤさ、商館などの口があるものですか、それは皆噓です、實は僕も貴所のやうに、表の看板に釣り込まれて來たのですが、先づ僕の樣子を御覧なさい、言ひながら、今更ら自分の身邊を耻しさうに見廻すのだが、見れば、二月半ばの雪さへ降りさうなこの寒天に、衣服といふのは汚ない襯衣一枚に之れも古く汚れた紺飛白の單衣をたゞ一枚羽折つて居る、衣服の着方や言葉の樣子は何うも書生らしい。

御覧なさる通りこの態でしやう、之と言ふのもたゞ表の看板に引ッかゝつたのが事の起りですが、大枚二圓の保證金まで取られて、商館所か、旅人宿の帳附けさへない仕末でしやう、今日でも十日餘りも居りますが、羽織は脫ぐ、袷は飛ぶで、今朝からはもう飯も食へず、煙草も飲めないので、斯うやつて蒼い顏をして居る譯ですが、實際お氣の毒に思ふから遠慮なしに言ふので、惡いことは言ひません、二圓の保證金は落したと諦めて、今の中にこの家を脫けなさい、ぐづ〳〵して居るとその羽織も綿入も無くなりますから……。

意外の言葉に僕は呆然とした、じやア玆は一種の桂庵ですか、と眼を圓くして聞けば、さうです、立派な桂庵です、而も、東京あたりの桂庵と違つて、その遣り方が非常に慘酷ですから、一度玆へ入つたが最後、必然さん〴〵な目にあつて、裸體にせられた上、湯屋の三助か酒屋の樽拾ひに追ひ遣られるのが落ちです、噓と思ふならまア二三日居て御覧なさい、玆に居る連中も目的こそ違ひ皆その手にかゝつて居るのだから……。

書生の言葉は噓らしくもなく、又成程と合點の行く所もないではないが、と言つて今更出られもせず、出た所で往く所もない、他の周旋社へ往つた所で、玆が既にそれだけの奸策があるとすれば、外の所も矢張り之と同じに極つて居る、が、兎に角念の爲め今一度番頭に掛合ふつもりで下へ下りたが、番頭は通勤と見えてもう居ないのである、主人に聞けば、番頭が居ないから明日まで待てといふ、仕方なく、半信半疑で不安の念を抱きながら又も二階へ上つたのだ。

やがて、夜になつた、夜にはなつたが洋燈といふものがない、廣き十疊の室にはたゞ豆の如きカンテラ一個、室は暗い、異ならぬ臭ひはする、雜居の人等は大概夕飯を認めるべく往來へ出た、それも、暫くすると、又ぞろ〳〵と戻つて來て、此方の隅、彼方の隅と、思ひ〳〵に陣取つて、太息を吐くやら、愁むやら、唸るやらで、宛然木賃宿の二三に宿無し連が雜居して居る如き光景であるが、その談話と云つたら、卑俗、淫猥、殆んど聞くに堪へないのだ、夜は更けた、雜居の人等は茲にいよ〳〵雜居して、汚ない煎餅布團を引つ張り合ひながら、彼方此方にごろ〳〵して居る、鼾の聲は高い、往來には按摩の笛が遠く聞える、何時の間にか寢たのであらう、眼を覺すと、赫々とした旭日は汚ない室を美しく照して居る。

番頭は出かけて來た、店には早や多くの人が詰めかけて居て、奉公口を彼れか之れかと犇めえて居る、昨夜の書生はつひ〳〵思ふやうな口がないので、今日は蕎麥屋の出前持ちに往生して往くさうだ、僕は番頭を捕へて早速掛け合つて見た、番頭曰く、今はこのやうに忙しいのですから、手の明き次第話して來ますといふ、待つたが中々に手の明きさうにもない、午後になつた、夕刻になつた、けれど、番頭は中々に出かけて往かないのだ、堪えかれて催促すれば、今日はもう遲くなりましたから明朝は早く往きますと、格別氣の毒とも思はぬ躾し方、茲に於てか、僕は始めて書生の言葉を成程と合點すると共に、不安の度は更らに高まつて來た、が、明朝といふ言葉を尚ほ多少は的にも力にもして、その日も不快の中に一日を送つたのだ。

翌朝になつた、昨日の如く催促すれば、答は依然として不得要領なのだ、癇癪はむら〳〵と起つた、そんなら口はないのかと詰れば、兎に角今一日といふ、抑へ難き癇癪も仕方なく無理に抑へて、若しやに釣られてその日も待つた。

更らに翌日になつた、今日こそはと、無理に番頭を急き立て〻とうとう追ひ出して遣つた、が、暫らくすると、歸つて來ての返答が又甚だ癪に障らざるを得ない、曰く、話はまことに旨い都合に往きましたけれど、併し、今日明日といふ譯には迚も往かないさうですから、兎に角四五日お待ちなさい、急いては却つて仕損じますから……、と飽まで平氣に構へて居る、而も、その言葉がたゞ一時凌ぎの遁辭であることは見え透いて居る、もう、書生の言葉は果して事實となつた、更らに信を措くには足らぬ、そこで、僕は憤然として、そんな曖昧なことならもう賴まんでも好い、外の周旋社へ往くからと言へば、外へ往つても同じことです、それに、一旦或る周旋社へ賴んだものは、他の周旋社では取り扱はぬことに仲間の規約が定つて居るのですからといふ、じやア兎も角之れで好いからと、決然意を固めて、それから保證金の返戻を迫つたのだ、所が、番頭應ずる氣色もない、彼の保證金は手前共が保證人になつて上げたからのことで、現在も矢張り保證人なのですから、今更破約は出來ません、と平氣なものだ、尤も、最初依賴する時に、原籍から身分職業を記して、尚ほ、保證に對して迷惑はかけぬといふ誓約書を入れさせら

れたのだ、けれど、未だ何處へも世話して貰はぬ中は、保證の必要がない、保證の必要がないからには、保證金の必要も從つてない譯と、尙ほも頑として詰つて見たが、誓約書が入れてあるからには今更ら破約は出來ません、の一點張りで、言辭益々冷々なのだ、でも口があると言つたじやないか、と開き直れば、無いとは言ひません、氣永くお待ちなされば必然出來ます、延びたのは都合だから仕方がありませんといふ、勿論永い中には出來るかも知れぬ、が、それまでには口が干上つて了ふ、口が干上れば彼れ之れ言つては居られない、蕎麥屋の出前持ちでも牛肉屋の下足番でも何んでも遣らればならぬ、其處を見込んでの落ち附き拂つた濟し方なのだから尙ほ更ら以つて癪に障る、思へば奸くも巧んだものだ、旨くも陷れたものだ、ぶんなぐッても飽き足らない、喰い附いても氣が濟まない。

と言つて、今更ら何うにも斯うにも仕方がないので、望みなき望みを未だしも多少は力にして、送るともなく更らに二三日を悶々の中に送つたのだ、て、もうこの時には、最初雜居して居た多くの人等は、皆思ひ〳〵の勞働に甘んじて、それ〳〵四方に散つて了つたのだから、廣き十疊の二階には、今は古參になつた僕と、それから、新たに入り込んで來た新參の二三であるが、それ等は矢張り看板に釣り込まれて、鰐の餌食となるべく知らずに飛び込んだ連中なのだ、そして、番頭は例の如く例の口吻を用ゐた、保證金や手數料を食つて居る、憎いと思つても手の出しやうがない。

物騷な二階に籠城してから、恰度一週間ばかりも過ぎた、この間は別に宿泊料は要らないものゝ、兎に角一飯四五錢づゝも飯屋に投じればならないのだから、多くもあらぬ懷中は早くも盡きた、が、商館の口は依然としてない、せめて旅人宿の帳附けでもと思つて見たが、之れさへ中々にあらう筈がない、と言つて、まさかに喰はずに待つて居る譯にも往かないので、果然、書生が嘗つて斷言した如くに、とう〳〵羽織を脫ぐことゝなつた、羽織ばかりでは濟まなくなつた、上着の綿入れさへ何時か飛んで往つた、けれど望む奉公口は依然としてない。

不平、煩悶、氣は氣でないが何んとも詮がない、癪に障る餘りに、更らに下へ下りて番頭に談判を試みれば、番頭冷かに見やつて、兎に角一時凌ぎに何れへかお出でなさい、その中には必らず口が出來ますから、さうすれば早速お知らせ申しますといふ、斯う來ることゝは固より覺悟の前だが、併し、餘りにその大膽な詐欺的行爲には、今更ながら呆然たらざるを得ない、じやア何んな口があるかと聞けば、曰く、蕎麥屋の出前持ち、曰く、牛肉屋の下足番、曰く酒屋の樽拾ひ、曰く、新聞屋の小僧、曰く汁粉屋の下働き、でなければ、郵便集配人、或は波止場人足などゝ、一として滿足な所がない、と言つて、不滿足だからとて應ぜぬとすれば、第一籠城の糧がない、籠城しても前途漠として殆んど望みがない、茲に於てか、僕は遂に寛にその慘忍なる奸策にかゝつて、あはれや郵便の集配人とまでなり下つたのだ。

以上はたゞ僕が墮落の徑路であるが、この間に目撃した珍談奇聞は決

して、一二に止まらない、殊に、彼の周旋屋の目的とする所は、男よりも寧ろ女にあるのだが、僕がその二階に籠城中、現に女學生も來た、田舍の女も來た、或は酌婦上りらしいもの、或は素人らしいものなどの、種々雑多のものが舞ひ込んで來て、それが皆、慘忍なる奸策にかゝつて終世拭ふべからざる墮落の淵に投げ込まれるのだから甚しい、この間の消息、之を傳へる筈ではあつたが、紙數限りあるのだから、更らに稿を改めて寛窟の寛窟たる所以を次號に紹介するとしやう。

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内集書に限る▲締切毎月十八日限

▲蛆と糞

本郷　蚓蟲奴

文相が學生の風紀を矯正せんとするのや、萬朝報が學生の暗黑面を摘くるのは其意蓋し大に可なるものだ、併し彼等は只其枝葉を論ずるのみにて未だ盡せりと云ふべからず、不良學生は恰も蛆蟲の如しだ糞土の如く腐敗せる現社會には必然生ずべき者で根本の糞的社會を清潔にせざれば枝葉の不良學生は如何にするも滅し難し、願はくは蛆を殺すの愚を行はんより糞を掃除せん事を望みたいれ。

▲忘恩者

神田　猫兒

地球上何物と雖悉く太陽の恩惠に浴せないものはあるまい、智あり識ある人類は此大恩人？　たる太陽に對して相當の敬意を表するは必然の事だらふ、今西洋と東洋とを比較するに科學の發達して太陽の恩惠の如何なる者なるかを知るに便なる西洋に太陽崇拜の風なくして却て不利なる東洋に此風あるは面白からずや、思ふに彼西洋人は科學一方の冷かなる頭腦にて恩惠に對して謝恩と云ふが如き高尚なる心を有せざるか。

▲大實業家諸君に

日本橋　虚業家

東京中の實業家連しかも大頭株が集て、ホテル期成同盟會なんて大業な事て騷ぎ廻てるが、爲る事は古家屋探しと云ふ極めて下だらない仕事ぢやないか、之が新進氣鋭な戰勝國の活動的な實業家としてアメリカの政治家に恐れられた人々の仕事かと思へば涙がこぼるゝ、外人の手前もある事だ、少しはどうかして貰ひたい。

▲罰はあたるまい

角筈　青二才

「見た事もない癖に無暗に天使々々を振り舞はすは不都合だ、西洋かぶれにも程がある」と仰せられる人もあるやうだが、其は餘り現金的な言ひ草だ、そんな利口さうな事を言ひ始めた日にや世の中の趣味と云ふものは一切打ち毀れて了いはすまい乎、よしんば無いとした所で、天使を理想のものとして置いて、可愛い子供等を其に接近したもの……即ち天使とするも強ち罰は當るまい、世の中はさう實利的な理窟づくめで行くものでない。

▲矛盾

京橋　逆螢

營業上の障りになるだらふから店名は云はぬ、銀座の或る有名な藥店で自店發賣の毛生液が驚くべき功能ある事を毎々新聞紙へ大々的の廣告し

てる、お其店先に鹿爪らしく濟まして座てる若い番頭の頭はおびんづろ其所除けのつる〱藥罐だ、若い者の辭に色氣なしの禿げなんか感心せん、速に御手元の大々的靈藥を用ひて濡烏の樣な毛を生やしたらよささふだが、思ふに嘗し其の靈藥の効能は？？？

▲價値の下落

地下の人　半獸生

犬の交際は初對面の奴には互に性質の知れる迄容易に心を許さないで時には咬み合ふ事もある、併し一度親しく成た以上は甚だ睦しい者で疑らない、之に反して人間は初めは妙に恭しく濟まして譃んでるが心易くなるに從ひ追々に地金を現はし、終には惡口をしたり喧嘩をしたりする、人間の交際法は獸類の夫に劣る事數等だ萬物の靈長と誇てる人間の價値は犬の前ては數段下落する、

近來社會側面觀の投書は非常に殖えたが、文章や文句が餘りまづい爲めに採用し兼れるのが多い。どうぞ今少し書き方に注意してどし〱投書して與れ給へ。

新刊批評

▲漾虚集、

夏目漱石著
大倉、服部兩書店發行

夏目漱石氏の文世已に定評あり。今更ら之を喋々するは却て時勢後れの感なき能はず。此集收むる所。「倫敦塔」「カーライル博物館」「琴の空音」「幻影之盾」「一夜」「薤露行」及び「趣味の遺傳」の七篇。孰れもとり〲に面白く、幾度讀むも倦厭の情を催すことなく、讀めば讀む程新らしき面白味更に加はるを覺ふ。其中「一夜」「薤露行」の二篇は嘗て本誌に揭載せられたるもの、讀者の感興今尙昨の如く新たなるものあるべし。其他の諸篇も帝國文學、ホトヽギス、七人、學燈等に揭げられたるものにて、總て二度のお勤めなれども、かゝる趣味饒かなる作物は幾度世に出づるも決して其多きを痛むことなかるべし。「カーライル博物館」「一夜」の二篇文最も締りて想も亦洒々落々、最も氏の俳的趣味を窺ふべく、「倫敦塔」「薤露行」「幻影之盾」の三篇、氏が西歐文學の素養深きに加へて詩人的想像の旺盛なるを見るべく、「琴の空音」「趣味の遺傳」の二篇は、氏の心理的描寫の精細に且つ一種獨特の人生觀を抱ける人なるを知るべし。要するに此集の如き今日の出版物中最も永き生命を有するものたること毫も疑を容れざる也。裝裝は唐本の帙に用ふる如き藍布に、內容、書名を書きたる白絹を張り、且つギルト、トップにて、中の紙もよく、贅澤いふばかりなし。製本界亦之が爲めに多少の變化を來たすべきか。只挿畫は

不折、五葉二氏の揮毫にて隨分金もかゝりたるべきに拘らず。本文を讀みて起る感興と釣り合はぬ如く思はるゝは挿畫としては慊らぬ心地す。因に記す、「漾虛集」といふ六つかしき書名は「春水漾二碧虛一」とかいふ句より取りたるものなりといふ。(定價一圓廿錢)

▲進化と人生　丘淺治郎著　開成館發行

「進化論講話」を著して我國のハックスリー、我國のヘッケルなりとの評判を得られたる丘理學博士が、種々の雜誌に掲載したる論文、色々の學會にて談話したる講演の中より十篇を選び、多少の訂正を加へて出版せられたるもの也。卷頭の一篇「人類の誇大狂」は時間と空間の無限なるに比すれば人間の存在の殆んど無意味に近きものなるを說き、此無意味に近き人間が「僅かに三斤ばかりの、然かも尚進化の中段にある」腦髓の働きによつて宇宙萬物を解釋し盡さんとするは、已れ自ら人力車夫たるに拘らず、天晴總理大臣になりたる積りにて「伊藤を外務大臣にしやうか、井上を內務大臣にしやうかなどゝ」唱ふる精神病患者—誇大狂の一種にして、其中でも「隨分甚しい方」なることを論じ、星學、地質學、生物學等「誇大狂治療學科」とも稱すべきものを學んで、天然に於ける人類の位置を明かにし、實驗的方法による確實なる科學的智識にのみ信賴して生活すべきことを勸めたり。第二篇「腦髓の進化」は脊椎動物の腦髓を比較して人間の腦髓とて他の動物と種類を異にするものにあらず、全く魚、蛙、鰐、兎、犬、猿等の階段を經て遂に今日の人間の腦髓となりたるものにて、要するに今日の生存に必要なる程度まてより發達したるものにあらず。而して人間が哲學、宗教、倫理、教育等の問題を解するを得るは、全く此生存の爲めに發達せる腦髓の副貳的作用に過ぎずして、味噌を擂る爲めの擂子木が犬の頭を打つためにも用ひられ得ると仝理なりと說き、かゝる進化の中途にある腦髓の價値を忘れて、之を以て宇宙の眞理を悉く悟り盡し得たる如き感を起すものは「已に自分の精神に異常を呈し掛かつたものと見做して其豫防に手を盡す」べしと論ぜり。第三篇「藝術としての哲學」及第五篇「人道の正體」は嘗て我「中央公論」に掲げられたるものにして、博士が前の論文に於て今の哲學研究法を以て讀手式と罵り、ヘッケルの著作が確實なる智識を並べて夫れより讀手式推理法に移り、識らず知らず讀者を釣り入れる手際を、實物を前方に置きて、之を見物人に知られぬ樣に繪畫と繫ぎ合せ、遠方の景色までを巧みに實物の如くに見せ掛けるパノラマ式なりと評し。厭世哲學に迷ひて自殺する人を以て、菅原天神記の芝居を見て時平に罵て掛かゝりし博勞の與五左と比したるなど、如何に其譬喩の巧妙にして其論法の痛快なるかは讀者の記臆せらるゝ處なるべく、吾輩は博士の文章を以て「藝術として進化論」と稱したき程の心地するなり。後者に於て、人道を以て狼道、象道、海狸道、蟻道、及び蜂道等と比較し、人道は畢竟人類の團體的生存を營むに必要なるものにして、今日の團體的生存の單位たる國家以外に人道を及ぼして快味を感ずるは、滋養物なる砂糖の甘味を感ずる爲めに發達したる舌が不滋養物なるサッカリンをも甘く感ずると仝一なりと評したる手際も今尚讀者の記臆せらるゝ處なるべしと信

ず。第四篇「動物界に於ける善と惡」第六篇「生物學より見たる教育」第七篇「戰爭と平和」第八篇「進化論と衞生」第九篇「所謂自然の美と自然の愛」第十篇「進化論に對する誤解」等何れも讀んで面白く、味てサツセツションを與へぬはなく、科學について興味を有する人は勿論、有せぬ人と雖も之を讀んで利益を得、趣味を感ずべきこと疑を容れず。博士の此篇に說ける所の要旨は、宇宙に於ける人間の位置を明かにして人間の誇大妄想に流るゝことを戒め、常に實驗實際を重んじて空理空論を弄ぶことを禁じ、鳩を以て「爪もなく、牙もなく、血をも流さぬ」故に平和の符號と見做すが如きは極めて皮想の見にして、鳩が一粒の豆を食ふは即ち他の鳩及び他の豆食動物の生存を害するもの、世の中は兎角生存即競爭にして、わざ／＼生存競爭と文字を重ぬる必要なき程なれば「生活は戰なり」の格言を以て世に處すべしといふにあるが如し。博士が在來の哲學、宗敎、倫理及び敎育等に對する批難は「進化論講話」の第十九章に掲げられしが、此書は更らに之を敷衍したるものと見て可なるべく、其論旨には或は不滿の人も多かるべきも、不滿の人と雖も之より得る利益は決して缺からざるべきを信ず。博士の文章は躍然として一家をなし其平易流暢にして通俗なる警喩に富み、高尙なる趣味の饒かなる、今の學者中第一の文章家なり。只其章句は非常に長くして簡潔の趣なく、多少斷切れが惡きやうの感あれども、之れがために冗長に流るゝなく、又倦怠の念を起さしむるなきは常々吾輩の感嘆措く能はざる所なり切に江湖の熟讀を望む。（定價六十錢）

▲母の紀念（後篇）　德田秋聲著　今古堂書店發行

德田秋聲氏は今の作家中最も注目すべき人の一人たるはいふまでもなし、此篇氏が「時事新報」に掲げて一部の好評を博したりしもの、吾輩は前篇と通讀の上、稍々詳細の批評を試みんと欲す。（定價六十五錢）

▲故事熟語辭典　池田蘆洲著　寶文館發行

此辭典の第一の特色は、最も早く故事熟語を見出し得るといふ便利があることである。辭典の中には、何か一つ檢べやうしとしてもなか／＼に見附けにくいやうに配列したものがある。此辭典は夫れとは反對、調べたいといふ字は直ぐに見附かる。至極便利である。これは全く索引が三つも附いて之れによつて中の字のある箇所も直ぐ解り得るが爲めである。又字數も可なりに多く、一語一語に「意義」と「出處」を掲げ、必要のある處には「探原」「使用」「轉用」「誤用」「考異」「辨疑」及び「餘論」等を設けてある。吾輩と仝様、故事熟語の智識に乏しきものには至極有益のものであるを疑はぬ。（定價一圓五十錢）

▲われかれ　內海月杖作　寶文館發行

ズーデルマン。ヘツク。コロレンコー。ツルゲニエフ。アラルコン外二三人の短篇物の飜譯、及び著者の自作の美文數篇を收めたり。自作の美文は素より、譯文も概れ、鷗外ぶりの雅文體をとられたるが、鷗外氏のに比べては數段も手腕の劣れる感あるは是非もなく、殊に譯筆の時々隔靴掻痒の嘆あるは甚だ遺憾なり。されど原作は皆清新なるものなれば、我國には見得られざる趣味のほの見ゆるもの亦なきにしもあらず。

文學好の少年には線陸の友たる資格あるべし。（定價六十五錢）

▲社會主義管見

山路愛山著　金尾文淵堂發行

現今の論文家中吾輩の最も敬服して居る人は山路愛山氏である。氏の文章は通俗にして而かも趣味あり、平易にして而かも奇氣横溢し、何人か讀んでも解らぬことなく、何人が讀んでも感嘆せざるを得ぬ。其いはんとする所を巧みにいひ、論ぜんとする所を曲さに論じて、一點の遺憾もなき老實周到なる其筆致、其掩ふ所なく隱す所なく、我が思ふ所を有りの儘にさらけ出して半點の衒氣なく厭味なき磊落洒脫なる其胸襟、蓋し現代第一等の文章家、第一等の快男見と思ふ。「文章世界」第五號に氏の文章に對する談話が載てあるが、これて見ると氏は日本の書物の中で徂徠の政談を最も會心の文となし、これを評して「江戸ッ子の福澤翁ともいふべき文章である」というて居る。「江戸ッ子の福澤翁」の一句亦借用して愛山氏の文を評するに足ると思ふ。此書は氏の獨力經營にかゝる「獨立評論」の中から社會主義に對する文章五篇を拔き集めたものであるが、氏の所謂「國家社會主義」を知るには素より、只文章を學ばんとする人にも非常に有益な本と思ふ。最初の一篇「社會主義評論」は言文一致を以て社會主義の主張の大體、且つ之に對する氏の批評を記したもので、卷中第一の名文である。情理併せ盡して如何なる敵も首肯かざるを得ぬ畜き振り、氏ならでは到底書けるものでない。誰にも解らぬ文章を書いて學識の深遠を獨り免許して居る今の學者博士達にお護符にして飲ませたいやうな氣がする。第二篇「我々祖先の社會政策」は矢張り言文一致體で、社會主義の必らずしも外國仕入のものではなく古くから日本にも行はれ來たものであることを記したもので、氏の日本歷史に通ずること深きを示すと仝時に氏の所謂「世の中には社會主義は我皇道に反し、我歷史に反し、我國體に反するものなりなどいふ没分曉漢（わからずや）あるが故に、斯様なる沒曉漢を曉豁するには室に入りて刀を奪ふの策を取り、直ちに敵の中堅を衝」くものといひ得るかも知れぬ。第三篇「國家社會主義梗概」は少しく散漫に流れて居るやうに感ぜられ、文章も愛山氏獨得の長所を發輝すること少いやうに思ふが、然し「絕對的の權利とは國家の權なり、國家の權は何ものをも自巳の威嚴に從はしむることを得」「國家の目的は共仝生活に在り、共仝生活の目的を遂せんが爲めに國家の活動するときは其權威は絕對なり」又は氏の所謂「日本國民の總體は一家族」にして國家の本義は「家人父子の關係」なりといふ國家社會主義の前提を知るに足り、且つ普通選擧等に對する氏の意見を窺ふを得べし。第四篇「國家社會主義と社會主義」は「社會主義評論」に次ぐ名文にして兩者の異仝を辯じて、國家社會主義の獨創的、實際的にして且つ日本の歷史に適合したるものなるを說き、くだくだしき議論の無用なるを論じて社會問題を以て「要するに實利上の問題にして終年喧騷して富豪を罵詈するも勞働者の一人に牛乳の一杯だも多く飲ましむること能はざる數理の說法者は寧ろ默して十人の購買組合を作るに如かざるを知る」と結べる、痛快なれども穩健を失はざる文章である。第五篇即ち附錄としてある「社會主義年表及總論」は佛國革命より一昨年に至るまで、社會主義に關する大事件を

年表にしたるもの、一寸便利なり。此書全體を一言にして評すれば歴史的智識が七分に經濟的智識が三分で、多少釣合が取れぬ樣の感はあるが、然しこれが即ち此書の短所であつて又長所、即ち此書の特徴というても可い。要するに社會主義に就て興味を有する人及び文章に志ある人は共に一讀せざるべからざるものである。（定價三十錢）

▲我が散文詩　高須梅溪著　開村書店發行

清輕優美といふが、梅溪子のこの一卷の文品を評すべきであらうか、山寺の奥深く、溪に面した闌欄を香烟が洩れて、仄見ゆる白衣の裾、老僧の唄聲が寂びを貫くといつた樣な趣は元よりない、さればといつて此頃の打ち續く五月雨の椽に寢亂れ髮を輕う吹いて紅縮のはんけちをそつと前齒に嚙みしむる乙女子の姿も亦許せない、苦勁でもない、艶麗でもない、如何しても漣波寄せ返る磯回の路、隻脚立ちの鷺の純白な羽色が、旭の光を滑らして居るといつた風情である、集むるところ水國の美以下十八篇、處定めずはぐり當つたものから折々に讀んだので著者には濟まぬが見殘したところも大分ある、が見た限りでいへば島の愛、修行寺日記などは面白かつた。その他のものには往々心行く、否數々迷ひ込む筆致があるのであるが筆があまつて韻を消すところと對話が擬つたくなるので讀み終へて感興を殺がれたところとがあつた、この感想が予一人に限らぬものならば著者に一工夫欲しいものだと御勸めする、が之も古兵の著者だと思ふから出る贅澤でもあろー先づ〳〵題して散文詩といふには十分の價値あるものだと斷言する。（定價金五十五錢）

▲あらゝぎ　水野葉舟著　金曜社發行

予は明かに白狀するが、水野葉舟といふ名は予の耳には餘り古くはない、否極めて昨今である、それも唯だ一新派歌人としてゞあつた、而かもその和歌さへ餘り多くは讀まぬといふのであつた、それが今この一篇に接して先づ現はれた感想は、如何んなもので有ろーか、開いて見れば散文と新體詩といふんだもの、でも眞乎に詩を解し詩を語る人の作は、散文も亦一種の詩であるといふことを信じて居る予は、若歡から始めて露、木枯と三篇まで讀み續けたが、讀み耽つてはならぬとの氣がして日課の仕事に移つてしまつた、此う言つた丈でも、君の筆には一種人を引きつける力があることを語つた積りだ、さればとて、文字に何等の奇があるのでない、新があるのでない、無いが扨て全篇を通した上にホンノリ一種の色彩が現れて居つて、寶珠を藏めた函のまはりを紫霞が包んで居る樣な氣がする、新體詩も、詞は七五或は五五を離れず、語も亦新奇を衒はず、斯くて唯標渺の詩趣を現さんと勉めて居られる、こゝで散文といはず詩といはず、著者が文藝に見開く一隻眼といふのが勞發する、どーぞ飽くまで所信に忠實に此方向に於て大となられんことを希望する。定價五十錢）

▲紀行文集ふところ硯　遅塚麗水著　佐久良書房發行

小さい頭で小説百家選いぢりの昔であつた、國民の友の夏期附錄かなどゝ思ふ、長白山一帶の雲といふ篇があつた、山と雲とを好いた予のこと、何氣はなし讀んで見たが、今までに見ぬ一種出格の堅苦しい文字、

だが噛み砕いて見れば鬼々しい角ぐみの金米糖でも得言はぬ甘味が有ると同じいので、妙に釣り込まれてしまつた、それから紀行文御座れ、小説御座れ、麗水の名あるところ、予の鰐口の開くところであつた、が小説は氏の本領ではない、本領はどーしても紀行文にある、否小説を見るにも紀行文を見ると思つて見るべしてあるのだ、がその後倦怠が來て一切氏のものとは絶緣してしまつたので、今この篇を見ると又新知人の心地がして相變らず面白い、氏の文體は未來を支配すべきものではないが、之が又特長でもあるから已むを得ぬとしても、その形容の工夫は常に新を勉めて貰ひたい、僕が暫く氏の作物を辭したのは之が重なる原因をなして居つたのだ。(定價金七十九錢)

▲新浮世風呂

海賀變哲著
原文堂發行

貴賤上下の挨拶入らず、老若男女の差別もなく、誰憚らぬ素つ裸、寫生帖だ頼む〳〵といはぬ計りな風は湯屋の外又と見るべきてはあるまい、著者應と答へて石齡球の樣な輕い筆付き、無差別平等になり廻つたのが此一篇、明治の後代遙に三馬の向ふを張つて新の一字を見てくれとの注文なるべし、笑ふ門には福とやら、讀んで見るも損は無かろー。(定價金四十錢)

▲トルストイ言行錄

中里介山著
内外出版協會

言ふも古し、レオ、トルストイと云へば日露相鬩ぐ時にも何人にも賛嘆の聲を絶たゝれずに居つたのてある、氏の思想必ずしも偉なりとはせぬ、氏の確定評ありてはあるが、英譯位で見る我々には雷同する權利も持たぬ、が如何なる斷片を手に觸れても常に打たれるのはその眞摯熱誠の點てある、此一事氏が敬慕すべき當代の偉人てあることを疑はぬ、此著簡略てはあるが、能く翁の風采を寫して居り、文章も言文一致て極めて分り易い。(定價金二十五錢)

▲「東海遊子吟」(土井晩翠著) ▲「基督教評論」(山路愛山著) ▲「閻黑日本史」(伊藤銀月著) ▲「純正社會主義の哲學」(北輝次郎著) ▲「寐覺草」(高安月郊著) ▲靑年の修養(占部百太郎著、▲「註釋二日物語」(幸田露伴著、高橋穎川著) ▲「原始佛敎史」「舟橋水哉著」 ▲「英雄觀」(中野天眞著」 ▲「明暗」(水野葉舟、窪田通治著」の批評紹介は紙數の都合により次號に讓

●●●●新刊批評は成るべく忠實に懇切にやりたいといふ希望てあるが、何時も編輯に追はれて思うやうに行かなかつた。今月は先づ手初めとして二三部の書について希望の一部を實行して見た。來月からはます〳〵此方針てやる積りてある。吾人は學識も少く見識も低いが、正直に所信を告白するの勇氣は何時でも失はぬ積りてある。

附録

現時の新體詩の價値

巖谷小波
坪内逍遙
岩野泡鳴
谷本梨庵
末松謙澄
福本日南

山路愛山
渡邊虹衣
正岡藝陽
薄田泣菫
兒玉花外
伊藤銀月

現時の新體詩の價値

はしがき

現時の新體詩界に就いて聊か願ふところあり、左の書翰

謹啓時下益々御清適奉賀候。扨弊社發行の『中央公論』は政治、宗教、社會等の諸問題に對し、公平なる批評を下し、以て健全なる思潮の普及を圖ると同時に、更に文學上の製作に向て多大の注意を拂ひ、以て高尚なる趣味の鼓吹に勉めつゝあるは大方諸彦の諒知せらるゝところに御座候。窃に思ふに現時の文壇に在りて最も群疑の府となり居るものは新體詩なるべしと存じ候。或は字句に、語格に思想に、今日の新體詩は到底一の謎語のみ、作家等自身の圏内を離れて了解せらるべきものにあらずと難ずるものあり、或は新事象、新詩情を歌ふには凡てに於て新を許さゞるべからず、之を謎語となすは新詩趣を解せざる凡俗の見なりと辨ずるものあり、孰れか是、孰れか非、之を現時のまゝに遣るべきか、之を根底より打碎して新に建設すべきか、蓋し瓦礫を什襲する愚は寶珠を委棄するの愚と擇ばず、斯る諸説紛々の時に當り、文壇諸大家の御判定を得て、その眞價値幾何なるかを江湖に知らしむるは極めて有益の事と信じ候。御多忙の處恐縮の至りに御座候へ共『現時の新體詩の價値』について御教示を惜まれざらんことを伏して奉懇願候。尙御執筆の御暇あらせられずは御一報次第社員拜趨御高話筆記仕るべく候敬具

を普く大方識者の士に致し、その高見を求めたるところ、快く請に應じて返書を賜はりしもの、現在にて既に半百の上に達せり、これ吾人の甚だ榮とし感謝已まざるところ、唯限りある紙數は悉くそれを收錄するを許さず、本號附錄として添ゆるもの僅にその幾分に過ぎざるが故に、寄稿諸大家と一般讀者諸君とに對して聊か相濟まざる心地すれど、次號以後、附錄の紙數を增加して、今殘れる分と將に大に集まるべき分とを、成るべく多く紹介する樣勉むべし、幸に諒恕を望む。

○　小波

今度は新體詩に付ての愚見を徵發されるのですか、所で新體詩なるもの、近來とんと御不沙汰に成つて、一向讀んで見ませんから、隨つて意見も無い樣な仕末です、

然し一言云つておき度い。元來新體詩は、オルガンの様なものではありませんか、(和歌が琴なら、俳諧は三味線でせう。)――それともせッて居る御當人は、バイオリンのつもりか知らん。――道理で時に齒の浮く様な音がする。あれでも上手に成つたら、さぞ結構なものでせうが……

そからもう一言、これは質問の方です、一體新體詩と以ふものは、何に合はして謠ふのが好いのでせう。狼吟とか云ふのも、一二度聞かされましたが、何所で手を拍つてよいのだか、つひ不案内なものですから、失敬してしまつた位です。

或人は云ひました。今の新體詩は、謠ふものでも、讀むものでもなく、只目で見る物だト。成るほど御覧なさい。あの活字の組み方を上げたり、下げたり、つめたり、あけたり、何しろよほど苦心して居ますネ。それにまたその詩集の立派な事、さし畫の凝つて居ること。

だから私なぞは、新體詩の本を見るのは大好き。

◎

山路生

貴問之趣、愚見ザット左の通りに御座候

(一)新體詩の大部分は僕には分り申さず、分り申さねば門外漢にて何とも申上様無之候。さりながら門外漢も不平なきにあらず。

(二)如何なる想にても之を表はすべき形なきはなし。皮肉は分ちて二とすべからざるが如く想と形とは一なり。想は水なり。形は波なり。形、既に方物すべからざれば想亦混沌のみ。新體詩の解し難きは作者胸中

混沌の故と存候。

(三)詩人は人民の言はんと欲して言ふ能はざる所に明白なる形を與ふべき筈のものなり。胸中一個の想を鑄らば其辭何ぞ明ならざるを得ん。朦朧として捕捉し難きは想に非ず。想の熟せざるものなり。今の新體詩の多くは未熟の物耶非耶。

(四)詩形は韻文、散文、古體、新體、長篇、短篇共に論ずる所に非ず。水到渠成可申候。

○

坪内逍遙

拜復詞園の事はやはり自然の成行に任せ候かた面白き花も咲き實も結ぶべく候、現時の作出來不出來すきぶすきこそはあれ、一がいに賞むべくもあらず。棄つべくもあらず。從つて一がいに判定すべくもあらずとぞんじ候、草々。

○

渡邊虹衣

「現時の新體詩の價値」につき作家の一人として申上候。

自分は新體詩の作家でありながら、現時の新體詩を絶對的に鼻摘まむ者の一人に有之候、鼻摘まみながら作る矛盾した男に候。

先年兒玉花外氏に「新體詩も今のやうな有樣で進んで行つては早晩社會からも忘れられ、また忘れらるゝ而已ならず、新體詩としての生存も覺束なく、遂には過去に於ける箏歌や清元や長唄の、短詩や俗謠を吸收したやうに、大きな文學ものゝ内へ吸ひ取られて仕舞ふやうな事になるのは必然の事であらうと思ふから、

氏等は先輩として今の內適當なる救濟策を講じられたら奈何だ」と申せし事も有之候樣の次第に候、世の定評たる謎語、獨りよがり、は適評に御座候、作家自身に於てすら其作物の可否如何の評眼は危きものに候、○社の如き社の機關雜誌に揭載致し置きながら其可否を辨へず奈何なる事を歌ひしや、夫れすら判斷に苦しむ模樣にて、また作家自身も、マア其麼事ですの曖昧に逡足を踏む人多く候、(是れは事實に候)而して百人が百人ながら解釋のつくのにては、平凡陳腐なりとして退け、作家も解らず、評者も解らぬ者は清新なりとして歡迎致し居るのに候、其何の爲めなるやは、了解に苦るしむ處に候、何はともあれ、現時の新體詩はオドカシ的聲色の上手なものならでは持てぬ仕末に候間、詩的價値などは到底認め得らるべきものには無之(なかには有るのもあれど)泣菫、有明、柳村氏等は其尤もオドカシの極上吉なる者に候。

是れが改善に關しては小說の如く廣く一般人士の愛誦に適せしめ候らはては叶ふまじく、自分は其第一着步として俗謠と調和を圖り大なる俗謠を作らんとする者に有之候、兎に角目下の狀態にては根本より打碎致す事こそ然るべき處置かと存じ候。

○

岩野泡鳴

「現時の新體詩の價値」に於て、諸方の識者に御尋問の件、至極面白きことに存じ奉り候。然るに、僕はその價値を問はるゝ新體詩を作るものゝ一人に有之候爲め、むしろ諸氏の說を承はる方が樂しみに思はれ候へども、丁度よき機會と存じ候に付き、諸氏の答案にのぼるらしく思はるゝ個條二三をあげて、之が辨明の一端に供せんかと思ひ出で申し候。

今の新體詩が難解又は朦朧と云はれ候は、作者の不熟練に由る場合もあらんかなれど、また、讀者或は評者の側に於て、詩を讀むだけの用意なき事情も大いに有之候。用意なしとて、必ずしもその人を輕視する意にはあらず。たとへば、想像力又は主觀力に乏しきものが、作者の想像又は主觀に由つて這入り居る境地に達し得ざるは、當然のことに有之べく候。かゝる人は、思索力なくして哲學を研究する者の如く、たゞ物の外形と形式とにのみ拘泥して、つひにその要領を逸し可申候へば、むしろ詩を批判せんとする樣な野心は起さず、先づこの方面にそれだけの趣味を養成するに勉むるか、然らざれば、斷然その人の本分なる科學か、宗教か、實業かを着實に心配して居る方がよろしかるべく候。

・ワグネルやベートーヱンと申せば、音樂上、名のみは世界的に聽え候へども、近頃獨逸より歸朝せし專門家の話に據ると、渠等の本國ですら、一演奏會に於て、之を解するものは、全聽衆の十分一か二の由にて、わが國よりは少しましだと云ふに過ぎず候。詩も之と同樣、不用意と無趣味と不熱心の社會には、とても一般に誰れても分ると云ふ工合にはまゐり兼候。たま〳〵普通人のうちに、詩を云爲する奇特者があり候ても多くは、外國の詩を忠實に字引きと首引きて熟讀し、わが邦のはたゞ冷淡に寢轉んで卒讀するのみにて、外國詩の方が邦詩よりも分り易いと自慢する手合ひに有之べく候。藝術はすべて、之に對する忠實と尊敬心なくては、之が談論と批判とを許さゞるものに有之候。

獨逸ではハイネが、米國ではロングフエローが、殆ど一般に讀まれたる例も有之候へど、前者は唱歌的なる取り柄があつて、譜をつけて歌はれた爲めで、後者はたゞ淺薄平凡の分り易き想を、最も通俗なる口調に

合はせた故で、いづれも、そんな作ばかりが詩――進んで最上の詩――とは申しかね候。詩は到底一種のアリストクラチックな產物に有之、之に對する趣味と素養ある人々の範圍――乃ち、一種の貴族――の讀むべきものに候。庶民はたゞこの貴族の受けたる詩興を間接に味ひ得るものと存ぜられ候。

今の詩を評するに、七五調の俗歌や古來の民謠を以つて標準とするもの多きは、詩の發達と天職とを無視したる社會なればに候。多くは作者も分らず、たゞ諸人の口にまろび來たつた俗歌や民謠などには、なか〳〵よき物もまゝ有之候へど、哲學で云へば、組織と系統とを備へざる思想にて――之に確然たる根據を與ふるには、大思索家を待たざるべからざるが如く、詩は獨得ある詩人の天才より出づるに至つて、初めて思想の發表に深き根據を生じ來たるものに候。僕は、現今、かゝる詩人が多少存在し居るを信じ申し候。かゝる詩人等は、以上に申せし注意と尊敬とを、世人に要求してもよろしきかと思はれ候。作詩上の技巧の如きは、苟も詩が思想なくして立つべからざることを知らば、たゞ程度上の問題に過ぎず候。

現今、多少、詩にくちばしを入れる人々には、之を公表するとせざるとに拘らず、大抵はいまだクラシヽズムの傾向を脫し得ざるかと存ぜられ候。されば、奔放自在よりも巧緻齊均、主觀よりも客觀、敍情よりも敍事、他調よりも七五調、新語法よりも舊語法をよしとする向きに有之候、僕等の一部は、渠等と反對の地に住し居り、傾向の異なる爲め、意外の――而も、何の痛傷をも感ぜざる――攻擊を受くることも有之候。外國にては、早くよりクラシヽズムの傾向を脫し、ロマンチシズムや自然主義を出だし、更らにまたデカダンや表象派などが現はれ居り候へば、評者や讀者は一々之を判別して吟味し得る能力を備へ居り候へど、わ

が國では、一小範圍の人々の外は、すべて空々寂々、どの詩を判ずるにも、たゞクラシヽズムの頭腦を以つてせんとするものに有之候。從つて、今回の答案にも、この傾きを脱し得ざる人々多かるべきか——世間一般の識者にして、現今の詩の價値を云爲すると同時に、たとへば、泣菫氏が特にクラシック派の傾きを現はせるに反して、有明氏又は泡鳴が、その詩想上に多少の形式はあるに致しても、自然主義派やシムボリスチック派に向へることに云ひ及ぶ人あり候や、如何に?。

粗雜なる頭腦を有せしマコーレーが、詩の存在を否定せしは昔のことに候へど、主觀的、敍情的なるを好む近世なれば、ポーの如きは、これまでに詩のうちに數へられたる長篇——たとへば、ホメーロスの二大篇、ミルトンの『失樂園』等——を詩外に排斥致し候。そこいらの問題も、多くの答案中にあり候や、如何に?然し長篇は兎角敍事的なるものなれば、現代の讀者が之に倦みを來たし候は尤のことながら、詩人の側から云へば、よしんば古典派でなくとも、長篇を有するは一つの意氣込みとも相成り可申候。まして、わが國では、いまだ長篇と稱すべき程のもの、存じ居らざる場合なればに候。この點より、僕は史詩又は物語詩の長篇を喜んで迎へたく候。これは詩界の將來に關することの樣なれど、現今の詩を論ずるには、必らず多少の參照となるべきことに候。

『アート、フォーア、アート』の樣なことは、既に古き言葉と相成候。僕の詩に對する考へは、近著『半獸主義』にて論じ及び候通りに候。厭世とか、樂天とか云ふ、淺薄な境遇を抜け出てゝも、人生はなほ悲愁と痛苦とが自然の事實に有之候。乃ち、人間は悲痛の靈に候。僕等はこの悲痛の靈を詩に歌つて居るなり。神

ならざる限りは、完全無缺の詩は得られざるものと致して、たゞその不完全なる詩だけでも、淺薄皮相の形式と觀念とを打破して、個人の生命を活躍さす價値は有之べく候。その他、種々の影響あることに就ては、僕等から申さずとも、僕の所謂趣味と用意ある人々は、必らず之に云ひ及ぶならんと存ぜられ候。

明日より旅行に出かけ候爲め、その用意に忙しく、たゞ右のみ御答へ申上候。草々。明治三十九年七月十五日。中央公論記者御中泡鳴拜。

○ 正岡藝陽

委細拜承

當今の新體詩に就きては御答へ致すだけ手間損に候、三錢切符御封入相成候故不已得御返事申上候次第に付「然らば詩體詩の價値は三錢なりや」と御尋ねあらば「然り」と答ふるの外無之候殊に小生は新體詩人を好み不申候、日本國が百人の新體詩人を有する時、日本が露西亞に負けるの時に候

小生の新體詩

「日本勝つた〳〵露西亞負けた！」

○ 谷本梨庵

拜復今度御照會相成候現時の新體詩の價値如何は、我が文藝界の時務には至極適切なる御發問と奉存候、是に就き小生は素より何等格別の識見も無之、太だ恥入候が、所謂新體詩の多數は、到底一謎語たるを免れざる樣なる事は小生も夙に認むる所に御座候、乍併元來散文と韵文とは何時も必ず兩立可致、而かも韵文は散

文に比しては其約束多少窮屈なるより、俗人には往々謎語の樣に想做さるゝことありとせば、之れを以て折角是迄發展し來りたる新體詩を一概に打破し去らんとするは極めて無法の事かと存候、それよりは寧ろ大小詩才ある人々精々工夫鍛錬して、之れを改良せんことこそ希望に不堪候、尙且つ現時の新體詩が字句、語格の上に於て動すれば鵺的なるを見るが如きも、固是れ國語現狀の反映に外ならずと存候へば、强ち新體詩のみを責めんは太だ酷かとも存候、小生も夙に我國語中よりして可成漢學者一流の文字、語格等を除き度考居候へども、是の如きは最難しと見候へば、今は獨り新體詩をのみ云々すべきにあらずと存候、頃者偶々晩翠子の『東海遊子吟』一閲仕り、色々苦情の可申點も不尠候へども、猶ほ是れ確に詩趣津々として掬すべく、太だ面白きものゝ樣に感候、露伴子の『出盧』などは申すに不及、泣菫、藤村、泡鳴等新舊作家よりして東都にては鐵幹子夫婦、當地にては半月、月郊兩子などのは這にそれ〳〵長所有之、決して無下には打捨難申候、先年『毒草』の寄贈を受け讀過感興を惹起したる某々數篇の如きは、今猶は難忘候、去れば此際萬一言語界の源三位賴政現はれ出でゝ、斯の鵺的國語を根本より退治致呉候へば、其上は固より新體詩の面目全然一變せんとも亦決して期し難きにあらずと存候へども、それまでは從來の儘にて多少の改良を加ふるに過ぎざるべきかと存候、如何哉御答迄如此に御座候、匆々不一

海田淳介

○

われら詩について何をか知り候はんや、歌ひて自家に忠實ならむとする、唯それのみに候、藝術の批判に衆議何の効か候べき、唯少數の同情ある讀者と卓越せる評家と或はよくこれを辨へ候のみ。而もなほ『時』の老

判者が公平なる將た峻嚴なる決定には及びもつかずとこそ存じ候へ。
右貴答まで　敬具

○

末松謙澄

御尋により新體詩なるもの丶價値を論じ見んに、新體詩とは、近世世間に行はれ居る新工夫の詩體のことにて、夫の外山、矢田部等がその權輿をなし、その後種々の變化は有りしも、要するに舊和歌流と全くその形容を異にせるものを指すなるべし、右に就きて、予は直接に、新體詩そのもの丶如何を論ずるに先ち、我國の美文的文學の沿革とその利害得失とを廣く研究して、然る後新體詩そのものに及ばんと欲す。

日本の言語と文章との將來に就いては、此頃博文館出版の『文章世界』の代表者にその要點を談話し、已に世に公にせられたるものあれば、就いて之を見られんことを希ふ、今此處にはそれ以外の事項に就き、予が觀察するところを一應論述すべし、過日帝國大學にて大隈伯と同座せるとき、伯の言はる丶に、女子の修養に最も適切なるは美術と文學とに如くものなかるべし、されど日本文學の教授法には又殆んど困窮するなり、日本文學の修養といへば、是非共委しく王代の古典を調べざるべからず、即ちそを主とせざるべからざる樣なれど、さて、その頃の美文的書籍といへば、內容に於て、如何にも妙齡女子の訓練に適當せざるもののみにて、恰好の用書を得ること能はずとて嘆息せられたり、予も亦如何にもその意見に同意するのみならず、言語文章の上に於ても、寧ろ王朝文學を随一に研究することの、今日の需要に應ずるに足らざるを信ずるなり。

その重なる理由を擧ぐれば、王朝の國文は、大概惰弱冗長の一方に流れて簡勁雄壯の文字に乏しきこと之なり、然るに所謂和學者流は此等の標準を一意に尊奉して、その長所は之を取るもその短所は之を看破するの達見あるもの少し、此處に予は眞淵の書翰一篇を所持せるが、その一節に曰く

今より御もとにも歌は少なくも源氏物がたりなどをいく度も心を入れてよみ玉へさなくては風流なることは心のうつらぬことにて有なり御たのみの方も後の歌書などふつにすてゝふるきものをのみ見玉はんならば云々(以下蠹蝕にて文字不明)

此の如きもの眞淵などの美文敎導の指南車たりしを見る、古學研究の點に於て、眞淵の効績の大なりしことは予も亦之を認む、されど此指南法は今日に在つては滿足し得べきものにあらず、從來日本美文の概して惰弱冗長に趣きしこと、斯ゝる指南法の致せるところなりと信ず、蓋し源氏に非常の長所あることは予も亦敢て疑はず、されどその敍述するところは、景色よりいへば、常に優しき小景にのみ傾き、雄壯遠大なる大景に乏し、二條院の怪景の條、須磨の浦暴風雨の章など、源氏にありては最も光彩陸離なるべきところなりとは雖も、實際これを讀みてさしたる感覺を與へず、人情の描寫に於て、その敍述の微妙の點まで及べるところは如何にも感心なれど、これ偏に柔和悲哀の點に傾く、要するに源氏の文章は所謂雅びやかなるところがその長所なるのみ、章句の體裁は漫に長たらしく、動作の主格そのものも亦曖昧にして正確を缺く、如上の缺點は、予が曾て源氏の凡そ三分の一を外國語に飜譯せしことある經驗よりして、親しく熟知するところなり而してこの源氏物語が和學者流の採りて美文の標準とする第一の書なるが故に、これに模倣する諸文章の如

何なるものとなり終るかは、殆んど言ふを値せざるべしと信ず、即ち源氏物語の彼の如きの長所を有したるは、却て本邦美文の發達に於て、偶ま不幸の結果を現したりといふも可なり、眞淵等が當時に在つて源氏を尊崇せしことと彼の如きは、その當時の狀勢よりして必ずしも咎むべきに非るも、今日に在りて時勢の須要を知り一大刷新を企てんと欲するものゝ、斯かる意見を一變する英斷あるべきは、識者の已に遍く知るところならん。

予を以て之を見れば、文章の標準として見んには、王朝の遺書中、源氏を措きても尙ほ他に優れるものあるべし、枕の草紙の如き或は然らずや、降りて徒然草に至るも尙ほそれに優れるかを思ふ、否、その實情をいへば、神皇正統紀、太平記、藩翰譜等は更に〱優れるを思ふ、藩翰譜の中、山内一豐の條に、「貧しき苦しきは厭はねど」といふ如き文字ありしことを記臆す、この「貧しき苦しき」といふ語は、若し和學者をして試みしめば、「身の貧しきをも、將た心の苦しきをも」といふ如き、冗長なる文章に書くは必定のところを、白石が貧しき苦しきとのみ書きすてたるは如何にも感心なり、若し和學者等にして此流に和文の改良を圖りなば、その結果は蓋し大に見るべきものあらんと思はる、

以上を概論すれば、予の主旨は、我美文は優美閑雅に長ずれども、甚だ簡健壯大の點に乏しきが故に、此短所に向つて大に工夫を要すいとふに歸す、例へば行けといふ命令語は漢語より轉化し來りたるものとするも、行き玉へ、いざさせ玉へといふ語に比すれば大に氣勢あり、且つ日本語として何等の澁滯なき語なれば多くの場合にては和文にもせよ、寧ろ行けといふの勝れるに如かざるを信ず、更に又一歩を進めて、國歌謠

語の變遷に就いて論ずるも、上來美文全體に關し論述せるところと趣を同うす、我國歌は、無論幾多特種の例あるべきも、概括して言へば、究竟茶室的にして、且つ女性的に陷り終りたるものとするも妨げざるが如し、此頃予が一友人の家にて詠じたる和歌に曰く

おもふどちまとゐしをれば五月雨の
　ふりしきる夜もたのしかりける

如何にこれを讀みても、二三の友人が四疊半乃至八疊の小室にて一夕を團欒の間に暮したるもの以外に想像し得られざるにあらずや、こは予の腰折に過ぎずどするも、一般に和歌は此ゝる氣味を免れざる樣なり、語を換えて言へば、器局の雄大と思想の宏遠とは和歌の缺點となすべきなり、夫の人丸の咏歌に

梅の花それとも見えず久方の
　あまきる雪のなべてふれゝば

の如き、流石は歌聖の傑作とも稱せらるゝものなるが故に、當時尙ほ稍や雄大宏遠の姿態を有したるを見れども、躬恒の咏歌

心あてに折らばやをらん初霜の
　おき惑はせるしらきくのはな

は、小倉色紙中にも選ばれし程ありて、好歌には相違なかるべきも、その詠歌當時の氣風の甚だ纖巧に赴ける一徴候として見るべきにあらずや、獨りその調子の次第に纖巧に赴けるのみならず、言語の用法も、萬葉

時代はまだしも、その以後は、時と共に次第に纎弱冗長に趣きたること論なし、且つ和歌は一體に悲哀の方面に傾き居れり、されば用語も從つて勇壯活潑よりは柔和溫順なるものを擇みし氣味あり、香川景樹は、形式的に流れし古風を一變したる名家として稱せらるゝが、その一代の傑作と見らるゝ

かくて世をふる屋の軒のなはすだれ
　くちはつるまでかゝるべしやは

などを見ても、予が批評の範圍外に出づる能はず、勿論詩人歌人は大概恨人などと稱し、悲哀の方面に傾くもの多きは論なきも、さりとて和歌者流は、特更に用語着想の上に於て、此狀態を慕ひ、此狀態に陷りたる氣味あり、これ今時以後の作家に於て、最も注意して一刷新を企つべきものたるは論なし、試みに繪畫を以て之を說かんに、日本の繪畫も上代に在りては、相應に雄大且つ精密のものもありしが、その着想結構は世と共に變化し、近世に至りては、殆んど茶室的小規模に陷り終りし如きものなり、唯その例外は往々屛風畫ある位にて、懸軸に至りては、二間床に懸くる如き大幅の佳品は、如何にしても之を得ること、支那古畫に求むるの外甚だ難きに似たり、これ蓋し家屋の構造より生ずる、需要の如何より來る結果その多きに居るとはいへ、器局の自ら收縮に陷りたる痕跡は免るべからざるものあり、茶懸けの小粗畫必ずしも佳品にあらずとはいはず、その實、その中に存する氣品など大に見るべきものありといへ、これを以て繪畫の能事此處に終れりといはは誰かその誤を笑はざるものあらん、他の方式の美術と相對し、我若し茶懸け粗畫の達摩や、枯木の小典を以て、この畫術あり、以て世界を橫行すべしと爲さば、寧ろ予はその井蛙の見たるを疑はんと

欲す。

用語の上より之を論ずれば、予は純粋の和歌風より寧ろ俳句風に左袒するものなり、蓋し俳句風の用語たるや、簡健の點に於ては和歌に優ること數等なりと思はる、已に何人かも論じたるが如く

一こゑは月が鳴いたか時鳥

と

時鳥啼きつるかたをながむれば
唯ありあけの月ぞのこれる

と、孰れが簡いづれか冗孰れが健いつれか惰、從つて孰れが佳作の性質を具へたりとするや、識者の眼には一見して首肯するところあるべし、俳句體の三十一文字體に比し、一層器局なることはいふまでもなし、左れど俳句體の用語にて、稍や長き落想を長篇に綴り出したりと見よ、これを普通の和歌體の用語にて綴り出したると、その健惰煩簡の點に於て、長所の孰れにあるかは容易に想像するを得べし。

扨てこれより所謂新體詩なるものに就いて一言すべし、和歌が和歌として自らその要あらんことは、猶ほ茶室懸け粗書小典が一概に排斥せらるべきにあらざると同一理由なり、されどその範圍外に於て、別に美文發達の必要ありとせば、玆に一新工夫あるべきは固よりなり、第一に和歌は普通の唱歌用に出來居らず、詩歌必ずしも盡く唱歌に適するを要すとは言はず、西洋の詩歌と雖も樂器に施すを眼目とせるものもあり、唯吟誦の用にのみ施すもあり、されど詩歌の本體よりいへば、これを音樂に合はせ、若くは少くとも吟誦の用

に供すべきものたること論を待たざるべし、故に何等か新工夫の作歌、若くは舊式詩歌の適當なる變體を求むる用ありと思はる、次には世に行はるゝ和歌式にては、完全なる叙情叙景の工夫なし、有りても器局甚だ小にして、猶ほ茶懸け粗畫の一枝一花に甘んぜざるべからざる如き趣あり、故にこの點に向つても時勢に應じて何等かの新工夫あるを要す、次に舊來の和歌風の用語は、甚だ散漫冗長に失するが故に、今世の事情に照してその體裁を一變する必要あり、これ等幾多の理由存するが故に、予は世の學者が新體詩界に向つて、敢て探險を試むるを以て壯擧となし、一向、その成効を希望するものなり、勿論予は未だ已に世に現はれたる此等の新作物の多數を閲覽したることなきが故に、その今日に於て如何なる程度にまで進みしか、將たその種類は如何に分岐したるか、且つその如何なる種類が最も將來に有望なるか否かを評論し能はず、唯その大體に於て有望のものたるを認むるに止まる、されど予が眼に折節觸れたるものの限りより推察して、茲に數言、所見を簡單に敷衍するも妨げなかるべきを信ず。

我國語はその性質として押韻を要せず、又平仄樣のものをも有せず、されど詩歌の本體としては何等かこれに類似の點あるべきにて、これなくば散文と何の擇ぶなき境に陷るべし、五七若くは七五の如き句調といふもの即ちこれにて、これが日本の歌謠に於て、從來漢詩洋歌の平仄韻字に相當し、散文と異なるを示し來りたるなり。平仄なるもの（洋詩にも殆んどこれと同種類のものありと知るべし）なしといふも、自然に所謂調なるものありと聞く、景樹などは殊に嚴かに此點を論じ居れり、この調なるものは仔細に分析して説明すること甚だ難けれど、語路の惡しきものや、音聲の相凌轢して耳障するものの類に在つては、即ち調の整はざ

るものと見て可なり、予は敢て我國の歌謠を必ずしも五七若くは七五等の一定の排列に從はしめざるべからずとはいはず、されど一方には全然これを無視して、他方にはこれに代るべき詩歌の特調を含まず、散文と少しも區別なき排列、若くは所謂隱語符同樣のものを排列したるのみにて、斯くて新體詩を工夫し得たりと爲すものあらば、甚だその成効を疑はざるを得ず、且つその所謂調なるものも、一切除外することは予の與する能はざるところなり、今の新體詩なるものには往々にして此等の不足點あるものあらざるか、又國學者流の語格論には、往々拘泥に過るもの無きにしも非ずとはいへ、彼等が論定する語格說は大概ね日本語の性質に於て事實上自然に必要のものなり、然るを今の所謂新體詩に在つては、此等の語格を無視し、或は甚しく誤るもの少からざるやに思はる、これ亦その缺點なり。

日本語の不足を憂ふるが故に、漢語又は俗語と雖も排斥すべからざることは論を待たず、されど我國固有の言語にて十分に言ひ現はし得るものまでも、漫に漢語を用て、支那詩に返り點を付けて吟誦するに似るものを以て、敢て新體を工夫し得たりとするが如きも、予はその成功を疑はざるを得ざるなり、元來歌謠は人の本性に基くこと、貫之も已に古今集の序に言ひ置けるが如しとするも、眞に他人の心を感動し得べき名作は、何人の手によりても作らるべきものにはあらず、然るに今の新體詩は、纔に高等小學校を卒業したるほどのものが、朧げに己れこれに適せりと思へる位にて、漫に之を作出して世に傳播せんと圖るが如きものあり、これ一面に於て新體詩の氣運を催す利益なしとは言ふべからざるも、斯かる狀態は眞に新體詩の幸福とは稱し難し、予の所見より言へば、和歌式の國語に堪能にして而かもその常套に拘泥せず、俳諧者流の用語法に精通してその淺俗に陷らず、その孰れを問はず、長所を利用し得るの材幹を有し、而して美文的に新工夫の思想を纒め、愈よこれを美文的に綴り出し得べき人才、或は天才出でゝ、而して後新體詩は始めてその

功績を擧げ得べきものなりと信ずるなり。（談話筆記）

○ 兒玉花外

拜啓小生は、熱烈火の如き感情を自由に大膽に歌うて天下を獨行濶歩する者にて、他人の聽くと聽かざるとは、小生の敢て關する處に非ず候。

○ 稲本誠

……………御執筆の御暇あらせられずは御一報次第社員拜趨御高話筆記仕るべく候　敬具

七月十日　『中央公論』發行所　反省社

如何にも御賢察の通り執筆の暇これなく候へば、御社員御來訪被下度、野ら聲の高話可仕候、但し少々遠路の段御苦勞御多費なる可く奉存候、恐惶謹言

誠

寄青年子

韻もあらず調もあらざる新體詩

書くひまあらばせんすりをかけ

○ 伊藤銀月

早速御返事申上候。新體詩草創以來未だ斯界に社會の注目を集むるに足るの大天才を生ぜざるが殘念に候。新體詩の分からぬも面白からぬも之が爲めと存じ候。小生は早晩斯界の歷史は一革命を起すの天才を生じて、新體詩を分かつて面白きものとなすの時期を迎ふべきを信じ、且つ之を望む者にて候。小生の親友に新體詩人も有之候へど小生はあまり今の新體詩に趣味を有せず。隨つて之を問題として思考を費せしことも無之、汗顏乍ら斯る漠然たる御答へ以上には及び兼候、草々。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

帝國文學

第拾貳卷第七號目次

定價 壹冊金拾五錢郵稅金壹錢
六冊前金郵稅共金九十錢
十二冊前金郵稅共金壹圓六十五錢

丁酉倫理會 倫理講演集

第四拾六輯目次

定價 壹冊金拾貳錢郵稅金壹錢
六冊前金郵稅共金七十貳錢
十二冊前金郵稅共金壹圓三拾貳錢

發行所 東京銀座壹丁目 大阪北久太郎町 大日本圖書株式會社

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋銀座四	東海堂
仝　日本橋呉服町	北隆館
仝　本郷四丁目	文明堂
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋區鎗屋町	良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論 廣告料

一行(五號文字二十四字詰)	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

中央公論 定價表

一冊	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢
郵税共	

●但海外(清國は本邦郵便局所在地を除く)は一部郵税六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社出名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし

一弊社は振替貯金(三四)に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられたく候

一郵券代用の塲合は必ず壹割増のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年七月廿七日印刷
明治三十九年八月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　(電話下谷九一九)　反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工塲